

長崎県文化財調査報告書 第130集

県内重要遺跡範囲確認調査報告書IV

1 9 9 6

長崎県教育委員会

県内重要遺跡範囲確認調査報告書IV

- ・原の辻遺跡（芦辺町・石田町）
- ・宇久松原遺跡（宇久町）
- ・浜郷遺跡（有川町）

1 9 9 6

長崎県教育委員会

## 発刊にあたって

近年、全国的に埋蔵文化財への関心が高まっておりますが、本県でもこのたび壱岐原の辻遺跡が『魏志倭人伝』に記載された一支国（いきのくに）の工都であることが確認されました。『魏志倭人伝』に伝えられる弥生時代の「クニ」が特定されたのは全国でも初めてのことであり、今後の発掘調査の進展が期待されてゐるところです。本県は、この原の辻遺跡をはじめ多くの貴重な埋蔵文化財の宝庫であり、これらを保存・活用し、さらに学術的な調査によってその実態を解明していくことは、本県の文化財行政に課せられた大きな使命であります。

このような主旨のもとに長崎県教育委員会では、平成3年度から県内の重要遺跡について、その範囲や性格・時代などの内容解明のために、年度ごとに数か所の遺跡の発掘調査を実施してまいりました。平成7年度は全国から注目を集める原の辻遺跡をはじめ、宇久町松原遺跡、有川町浜郷遺跡の範囲確認調査を行い、さまざまな調査成果を得ることができました。この調査報告書が本県の埋蔵文化財についての理解と愛護を深め、学術、教育、文化財保護のために広く活用されることを念願するものであります。

最後に、発掘調査の実施にあたりまして御理解と御協力をいただきました地元関係者ならびに地元教育委員会の方々に深く感謝申し上げます。

平成8年3月31日

長崎県教育委員会教育長

中川忠

## 例 言

1. 本書は長崎県教育委員会が平成3年度から実施している県内重要遺跡範囲確認調査の結果報告である。
2. 本書には、平成6年度調査を行った原の辻遺跡（壱岐郡芦辺町・石田町）、宇久松原遺跡（北松浦郡宇久町）、浜郷遺跡（南松浦郡有川町）の結果報告を収録した。
3. 本書では各遺跡について分担執筆した。それぞれの遺跡についての執筆者は、以下のとおりである。

原の辻 遺跡 川口 洋平

宇久松原遺跡 本田 秀樹

浜郷 遺跡 古門 雅高

4. 詳細は各項の例言を参照されたい。
5. 本書の総括編集は古門が行った。

## 総 目 次

I 原の辻遺跡.....	1
壱岐郡芦辺町・石田町所在	
1. 遺跡の立地と環境.....	5
2. 調査の経緯.....	8
3. 重要遺跡範囲確認調査の概要.....	11
4. まとめ.....	42
II 宇久松原遺跡.....	65
北松浦郡宇久町所在	
1. 遺跡の立地と環境.....	69
2. 調査の経緯.....	72
3. 重要遺跡範囲確認調査の概要.....	75
4. まとめ.....	84
III 浜郷遺跡.....	95
南松浦郡有川町所在	
1. 遺跡の立地と環境.....	99
2. 調査の経緯.....	102
3. 重要遺跡範囲確認調査の概要.....	103
4. まとめ.....	109

# I 原の辻遺跡



## 例 言

1. 本報告は、平成6年に実施した長崎県壱岐郡芦辺町に所在する原の辻遺跡の重要遺跡範囲確認調査の報告書である。

2. 調査は長崎県教育庁文化課が事業主体となり、壱岐教育事務所、芦辺町教育委員会、石田町教育委員会の協力を得て、平成6年8月22日～10月7日に実施した。

### 3. 調査担当

長崎県教育庁文化課（壱岐教育事務所駐在）

埋蔵文化財班係長 副島 和明（現原の辻遺跡調査事務所）

文化財保護主事 町田 利幸（現主任文化財保護主事）

同 山下 英明（現原の辻遺跡調査事務所）

同 川口 洋平（ 同 ）

同 石尾 和貴（ 同 ）

芦辺町教育委員会

文化財指導員 松永 泰彦

石田町教育委員会

文化財担当 河合 雄吉

4. 調査指導 井上和人（文化庁記念物課）・岡村道雄（文化庁記念物課）・小田富士雄（福岡大学）・佐原真（国立歴史民俗博物館）・高倉洋影（西南学院大学）・高島忠平（佐賀県教育庁文化課）・武末純一（福岡大学）・長島正春（国立歴史民俗博物館）・西谷正（九州大学）・松井章（奈良国立文化財研究所）・松下孝幸（土井ヶ浜遺跡人類学ミニアージアム）・宮本長二郎（東京国立文化財研究所） 以上50音順

### 5. 調査協力

壱岐教育事務所

所長 木村 晃一（現長崎教育事務所）

総務課長 脇坂 正孝

芦辺町教育委員会

教育長 今西 國善

教育次長 辻本 正

6. 本書の執筆・編集は川口による。

## 本文目次

1. 遺跡の立地と環境.....	5
(1) 地理的環境.....	5
(2) 歴史的環境.....	5
2. 調査の経緯.....	8
3. 重要遺跡範囲確認調査の概要.....	11
(1) 調査の目的と方法.....	11
(2) 調査の概要.....	11
(3) 遺構.....	14
(4) 遺物.....	28
4. まとめ.....	42
(1) 調査のまとめ.....	42
(2) 遺跡の範囲・取り扱いについて.....	42

## 挿図目次

第1図 壱岐の主な遺跡 (S = 1 / 200000) .....	6
第2図 原の辻遺跡周辺の遺跡 (S = 1 / 50000) .....	7
第3図 原の辻遺跡地区割図 (S = 7000) .....	9
第4図 過去の調査報告より.....	10
第5図 試掘場位置図 (S = 1 / 3000) .....	12
第6図 O区平面図 (S = 1 / 150) .....	15
第7図 時期別ピット分布図 (S = 1 / 300) .....	17
第8図 遺構T.P. 4・5 (S = 1 / 80) .....	21
第9図 遺構T.P. 4・7・8・10 (S = 1 / 80) .....	22
第10図 遺構T.P. 11・12・13・16 (S = 1 / 80) .....	23
第11図 遺構T.P. 14・15 (S = 1 / 80) .....	24
第12図 遺構T.P. 19・20 (S = 1 / 80) .....	25
第13図 遺構T.P. 24・25 (S = 1 / 80) .....	26
第14図 遺構T.P. 18・31 (S = 1 / 80) .....	27
第15図 遺構出土の土器(1) (S = 1 / 4) .....	32
第16図 遺構出土の土器(2) (S = 1 / 4) .....	33
第17図 遺構出土の土器(3) (S = 1 / 4) .....	34
第18図 遺構出土の土器(4) (S = 1 / 4) .....	35
第19図 遺構出土の土器(5) (S = 1 / 4) .....	36

第20図 遺構出土の土器(6) (S = 1 / 4)	37
第21図 各地区出土の土器 (S = 1 / 4)	39
第22図 その他の遺物 (S = 1 / 1)	41
第23図 原の辻遺跡ゾーニング図	43

## 表 目 次

表1 原の辻遺跡周辺の遺跡	7
表2 調査一覧表	8
表3 試掘場一覧表	13
表4 O区ピット一覧表	16

## 図 版 目 次

図版1	47
図版2	48
図版3	49
図版4	50
図版5	51
図版6	52
図版7	53
図版8	54
図版9	55
図版10	56
図版11	57
図版12	58
図版13	59
図版14	60
図版15	61
図版16	62
図版17	63
図版18	64

# 1. 遺跡の立地と環境

## (1) 地理的環境

壱岐島は、九州と朝鮮半島の間に浮かぶ東西約15km、南北約17km、面積139km<sup>2</sup>の小規模な島である。行政的には長崎県に属するが直接航路はなく、佐賀県の呼子とフェリーで約1時間、福岡県の博多と2時間半で結んでいる。このため経済・文化的には福岡の圏内にある。

島は全体的に起伏が少なく、最高峰である岳の辻で213mにすぎない。北方に位置する峻険な対馬と対照的で、しばしば「女性的」と形容される。島の基盤は第三紀の堆積岩で、その上を玄武岩が覆って低平な地形を形成する。島の南東部には「深江田原」とよばれる平野があり、長崎県下では有数の穀倉地帯として知られている。原の辻遺跡はそこに舌状に伸びた台地を中心として広がっている。その面積は約80haで、現在の芦辺町と石田町にまたがっている。台地の標高は高い所でも18m程度であるが、平野全体を見渡せるほどの好位置にある。遺跡の北側には幡鉢川が東に流れ、約1km離れた内海に注いでいる。古代には驛家が置かれていた印通寺港は遺跡の南約1kmの位置にあり、現在は九州本土と航路で結ばれている。

## (2) 歴史的環境

壱岐島は古くからその地理的条件のため、大陸との中継点として重要な役割を果たしてきた。その名があらわれる最古の文献である3世紀の歴史書『魏志倭人伝』には「一支国」として登場し、弥生時代末の壱岐の様子が書かれている。「一支国に着く。官をまた卑狗といい、副官を卑奴母離という。竹林・叢林が多く、三千ばかりの家がある。やや田地があり、田を耕してもなお食べるには足らず、また南北に行き米を買うなどする。」簡単ながら非常に貴重な記述であるといえよう。壱岐では現在約60箇所の弥生時代の遺跡が知られているが、原の辻遺跡はその中で最も規模が大きく、出土した遺物は質、量ともに他をしのいでいることから、この一支国を中心集落と考えられている。この遺跡については大正時代から紹介され、幾度か調査されてきた。そして平成5年度からの調査では台地を取り巻く多重の環濠が確認され、全国的に注目されるようになった。現在、原の辻遺跡は「魏志倭人伝に記載された国の都が唯一特定された遺跡」として評価されている。

島内では、原の辻遺跡に次ぐ遺跡として島の北西部にあるカラカミ遺跡が知られている。高地に位置し環濠を巡らせているが、原の辻遺跡に比すと規模は小さく遺物の内容もやや劣っている。島内には、原の辻遺跡を中心としていくつかの集団があったと思われるが、カラカミ遺跡はその中でも有力なものではなかったかと推測される。

弥生時代から古墳時代の推移については不明な点が多い。原の辻遺跡は集落としては古墳時代初頭まで続いたと考えられるが、その後どうなったかを知る手がかりは今のところ乏しい。現在、壱岐島内には4世紀代の古墳が知られておらず、最古のものと考えられている大塚山古墳は5世紀代のもので原の辻遺跡を見下ろす山の上に築かれている。この頃までは付近にそれを築いた勢力があったと考えられるが、考古学的には証明されておらず今後の調査が期待されている。



第1図 壱岐の主な遺跡 ( $S = 1/200000$ )

6世紀から7世紀になると古墳は集中的に造られるようになる。島内には約270基の古墳が知られているが、これは長崎県の古墳の約半数にのぼり、島の規模からすると驚くべき数である。その中でも代表的なものとして県内最大規模の前方後円墳である双六古墳（全長約90m）や同じく県内最大の円墳である鬼の窟古墳（直径約45m）、そして金銅製の馬具等が出土した笹塚古墳（直径約38m）などがあげられる。これらはいづれも島の中央に造られており、付近に中心勢力があったことを裏付けている。また離島の首長墓としては破格のものであることから、中央政権との結びつきの強さ<sup>(註1)</sup>を指摘する意見もある。だが、7世紀も後半になると壱岐島は、国内での政略的な拠

点から国防上の拠点へとその位置づけを変化させるようになる。

663年、朝鮮半島の白村江で日本が新羅に敗れたことを受けて九州各地の防衛が強化されるが、最前線である壱岐島にも烽と防人が置かれている。<sup>(註2)</sup> 8世紀になると壱岐は島でありながら国の扱いを受け、国府そして国分寺が置かれ官道なども整備されたようである。<sup>(註3)</sup> 9世紀になると新羅に対する警戒<sup>(註4)</sup>から大宰府との間で頻繁にやりとりが交わされていたことが文献からわかる。原の辻遺跡では、この奈良・平安時代の木簡や貿易陶器が出土しており、この頃付近に官衙などが存在していたことが推測されている。

註 1. 森浩一「海の生活－玄海・海の海人」『日本通史』第1巻 小学館 1993

2. 『日本書紀』卷27

3. 壱岐直の氏寺を転用 『延喜式』卷21

4. 『統日本後紀』卷4など

#### 参考文献

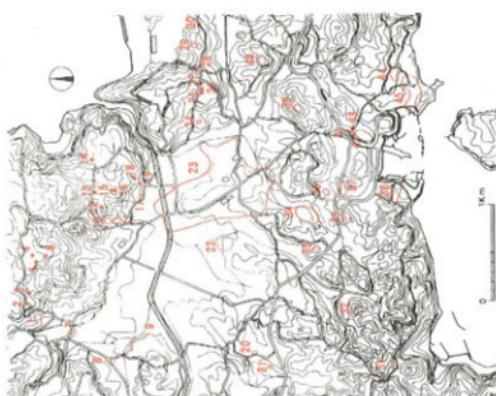
1. 藤田和裕 『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第31集 長崎県教育委員会 1977

2. 正林謙・宮崎貴夫 『カラカミ遺跡』勝本町文化財調査報告書第3集 勝本町教育委員会 1985

4. 横山順「壱岐の古代と考古学」『玄海灘の島々』 小学館 1990

表1 原の辻遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	位置	性質
1	原の辻遺跡	丹波川右岸中段	遺跡・古墳・古跡
2	原の辻1号墳	丹波川右岸中段下流	古墳
3	原の辻2号墳	丹波川右岸中段下流	古墳
4	原の辻3号墳	丹波川右岸中段下流	古墳
5	原の辻4号墳	丹波川右岸中段下流	古墳
6	原の辻5号墳	丹波川右岸中段下流	古墳
7	原の辻6号墳	丹波川右岸中段	遺跡・古墳
8	原の辻7号墳	丹波川右岸中段	遺跡・古墳
9	原の辻8号墳	丹波川右岸中段下流	古墳
10	原の辻9号墳	丹波川右岸中段	古墳
11	原の辻10号墳	丹波川右岸中段	遺跡・古墳
12	原の辻11号墳	丹波川右岸中段	古墳
13	原の辻12号墳	丹波川右岸中段	古墳
14	原の辻13号墳	丹波川右岸中段	古墳
15	原の辻14号墳	丹波川右岸中段	古墳
16	原の辻15号墳	丹波川右岸中段	古墳
17	原の辻16号墳	丹波川右岸中段	古墳
18	原の辻17号墳	丹波川右岸中段	古墳
19	原の辻18号墳	丹波川右岸中段	古墳
20	原の辻19号墳	丹波川右岸中段	古墳
21	原の辻20号墳	丹波川右岸中段下流	古墳
22	原の辻21号墳	丹波川右岸中段	古墳
23	原の辻22号墳	丹波川右岸中段	古墳
24	原の辻23号墳	丹波川右岸中段	古墳
25	原の辻24号墳	丹波川右岸中段	古墳
26	原の辻25号墳	丹波川右岸中段	古墳
27	原の辻26号墳	丹波川右岸中段	古墳
28	原の辻27号墳	丹波川右岸中段	古墳
29	原の辻28号墳	丹波川右岸中段	古墳
30	原の辻29号墳	丹波川右岸中段	古墳
31	原の辻30号墳	丹波川右岸中段	古墳
32	原の辻31号墳	丹波川右岸中段	古墳
33	原の辻32号墳	丹波川右岸中段	古墳
34	原の辻33号墳	丹波川右岸中段	古墳
35	原の辻34号墳	丹波川右岸中段	古墳
36	原の辻35号墳	丹波川右岸中段	古墳
37	原の辻36号墳	丹波川右岸中段	古墳
38	原の辻37号墳	丹波川右岸中段	古墳
39	原の辻38号墳	丹波川右岸中段	古墳
40	原の辻39号墳	丹波川右岸中段	古墳
41	原の辻40号墳	丹波川右岸中段	古墳
42	原の辻41号墳	丹波川右岸中段	古墳
43	原の辻42号墳	丹波川右岸中段	古墳
44	原の辻43号墳	丹波川右岸中段	古墳
45	原の辻44号墳	丹波川右岸中段	古墳



第2図 原の辻遺跡周辺の遺跡 ( $S = 1/50000$ )

## 2. 調査の経緯

原の辻遺跡は、大正年間に島内在住の松本友雄氏や山口麻太郎氏によってはじめて紹介された。その後、昭和14年には鶴田忠正氏による土層の観察と遺物の採集が行われている。戦になると京都大学の水野清一教授を団長とした九学会と東亞考古学会によって調査が行われ、住居跡などの遺構や貨泉や鉄器、そして「原の辻上層式」と設定された弥生時代後期の土器が出土するなどの成果をあげている。

昭和49年には石田大原地区で畑地を水田化する際に甕棺墓や石棺墓が見つかり、また銅剣や玉類が出土したため長崎県教委が調査を実施した。県教委はつづく昭和50年から昭和52年にかけて範囲確認調査を行い、新たな墓域や溝状遺構が確認され、玉類や銅鏡、銅剣などが出土した。

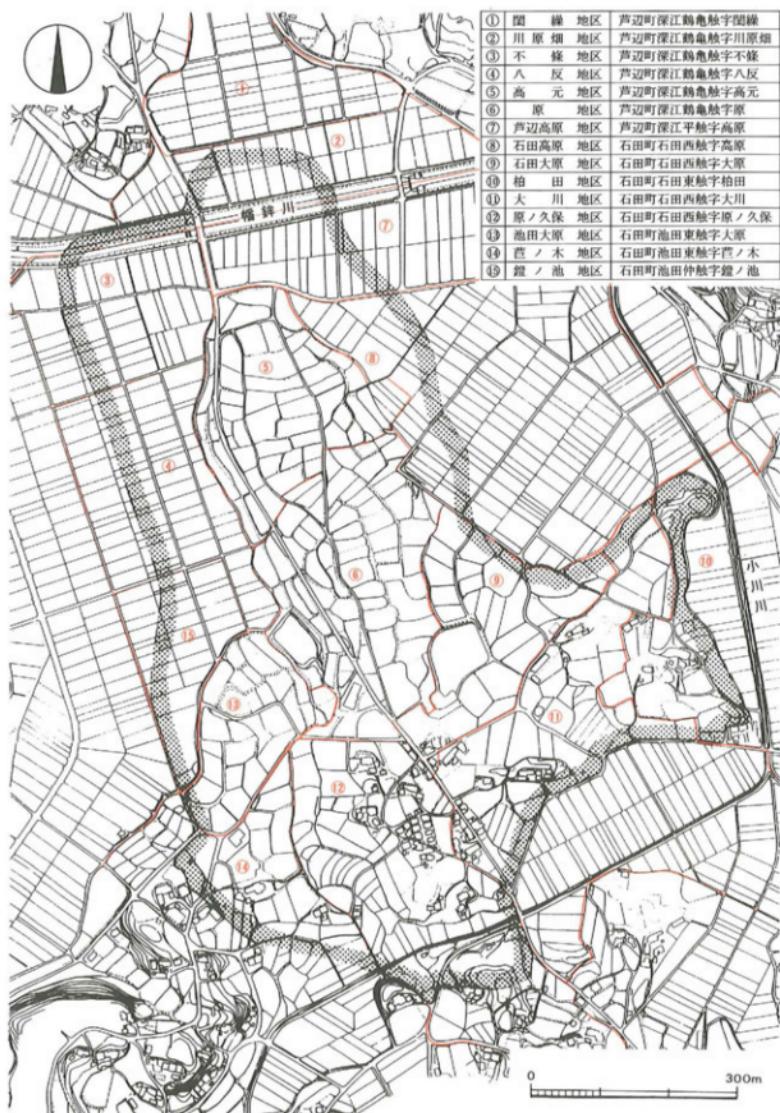
平成4年から長崎県は幡ヶ谷川流域の水田基盤整備を計画した。県教委は工事区域にかかる原の辻遺跡の範囲確認調査を平成3年から5年にかけて行った。平成5年には道路と排水路の工事区域について緊急発掘調査が実施されたが、台地をとりまくような多重の環濠が確認され、この遺跡が大規模環濠集落であることがわかった。そして、島内に規模や出土遺物の豊富さなどでこれをしのぐ遺跡が存在しないことから、原の辻遺跡は『魏志倭人伝』に記載された「一支国」の中心集落であると認識されるにいたった。

### 参考文献

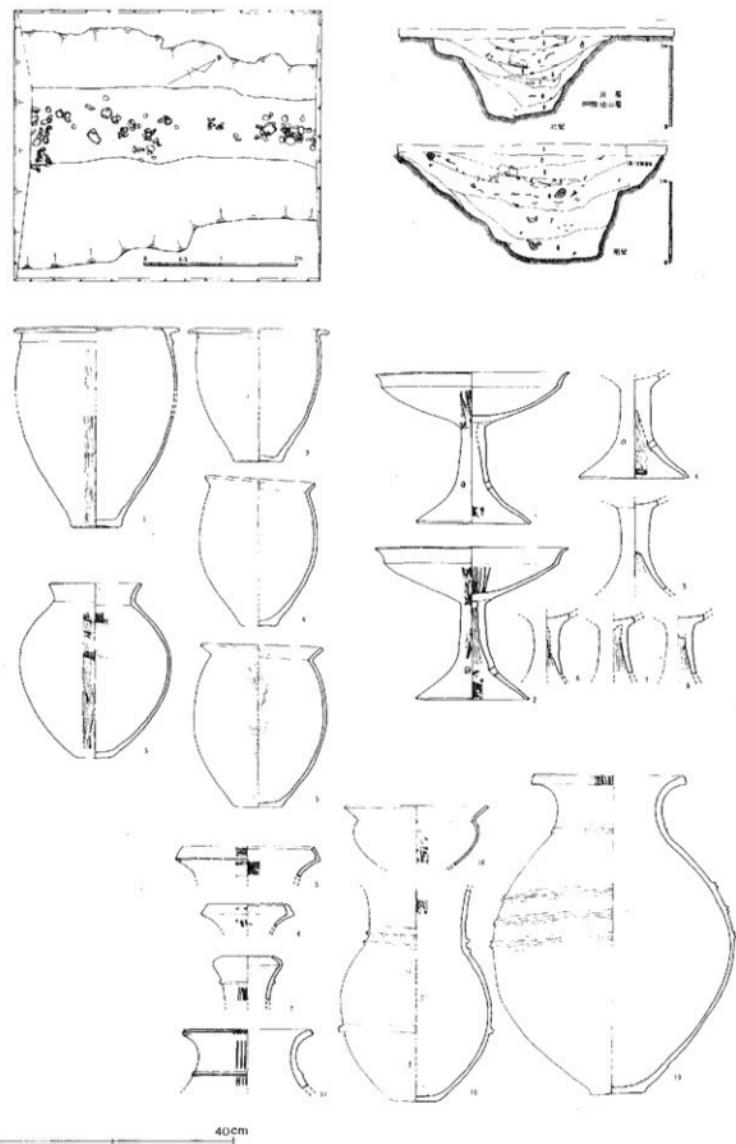
- 藤田和裕 『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第26集 長崎県教育委員会 1976  
藤田和裕 『原の辻遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第31集 長崎県教育委員会 1977  
藤田和裕・安楽勉 『原の辻遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第37集 長崎県教育委員会 1978

表2 調査一覧表

調査年度	調査者	調査地区	調査面積
大正年間	松本友雄、山口麻太郎		
昭和14年	鶴田忠正	⑤	
昭和26, 28, '29, 36年	九学会、 東亞考古学会		
昭和49年	県教委	⑨	1,000m <sup>2</sup>
昭和50年		⑤⑥	140m <sup>2</sup>
昭和51年	県教委	⑥⑨⑩⑪	210m <sup>2</sup>
昭和52年		⑫⑬	328m <sup>2</sup>
平成3～5年 (試掘)	県教委 芦辺町教委・石田町教委	①②③④⑦⑧⑩ ⑪⑫⑬	902m <sup>2</sup>
平成5年 (本調査)	県教委 芦辺町教委・石田町教委	②⑤⑦⑧⑨⑩⑪	12,232m <sup>2</sup>



第3図 原の辻遺跡地区割図 ( $S = 1/7000$ )



第4図 過去の調査報告より

### 3. 重要遺跡範囲確認調査の概要

#### (1) 調査の目的と方法

県内には約3,400箇所の遺跡が存在するが、県教育委員会はうち155か箇所を重要遺跡として台帳整備を行っている。遺跡の規模、性格、内容等を把握し開発事業に対する調査・協議の基本資料とすることが目的である。しかし、これらの遺跡でその実態が把握されているものは少ない。その為、平成3年度から重要遺跡の範囲確認調査を実施することとなった。平成6年度は、原の辻遺跡と有川町の浜郷遺跡、そして宇久町の宇久松原遺跡の3箇所が調査の対象となった。

原の辻遺跡は、大正時代に発見されて以来、九学会・東亜考古学会、長崎県教育委員会等によって数次の調査がなされている。また、平成5年度の環濠の確認によって遺跡の重要性が増し、全国的に注目されるようになっている。しかし、遺跡は80haにおよぶ広がりを持ち、遺構の分布や規模、性格等いまだ解明されていない部分が多い。今回の調査は、遺跡の中心部分と考えられている台地の頂上付近を中心に、過去の調査で確認された遺構の拡がりや新たな遺構の確認等を目的として行うこととした。

調査方法は、台地頂上部分をO区として400m<sup>2</sup>単独で発掘し、そのほかに台地上に試掘場を35箇所設定した。試掘場は、遺構の拡がりに応じて拡張を行った。調査総面積は766m<sup>2</sup>である。

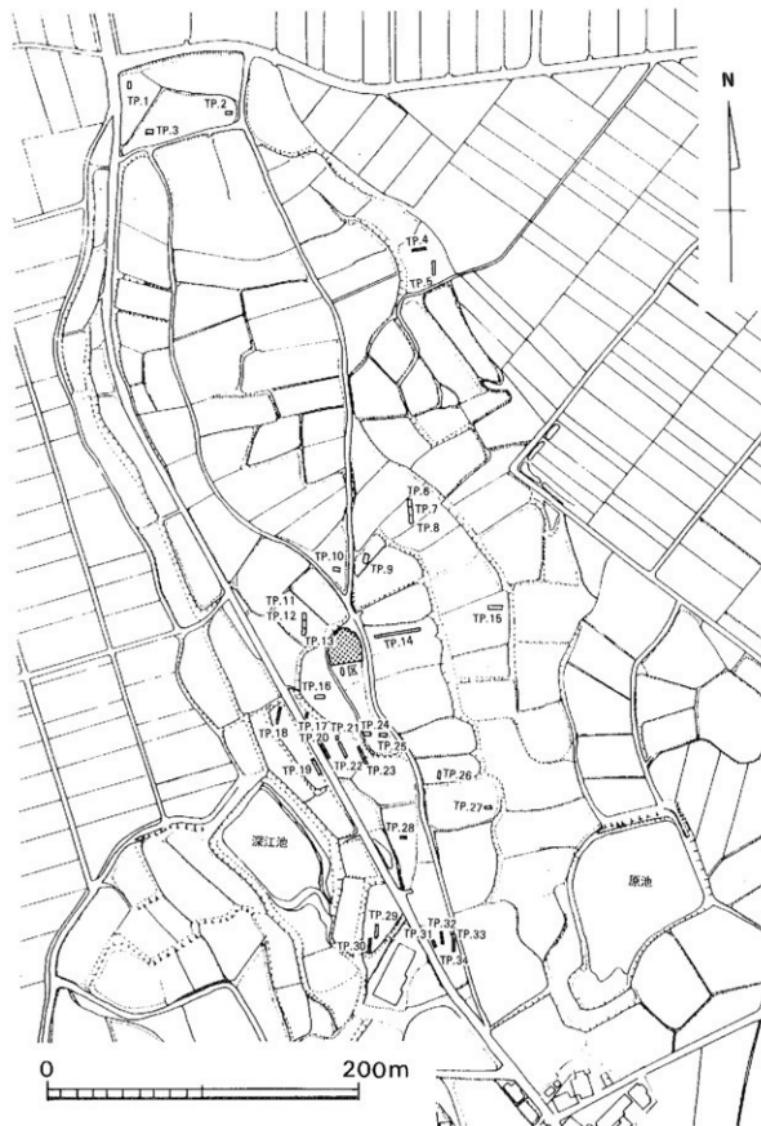
#### (2) 調査の概要

調査は、平成6年8月22日から10月7日にかけて実施した。調査の結果、O区から多くのピットが確認されたほか、TP. 5, 18, 19, 20, 24, 25, 31で溝状遺構、TP. 16で住居跡が確認された。また、計19の試掘場から弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての土器が出土した。それ以外には、TP. 16から不明鉄製品とカマド石状石製品、TP. 20から銅鏡、TP. 24からガラス玉、O区から鐵鏟などが出土した。

O区で確認されたピット群は削平により底部しか残っていなかったが、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけてこの場所が利用されていたことがわかった。TP. 19, 20は、昭和51年に長崎県教育委員会が行った調査で確認された溝を追跡するために設定したが、共に溝が確認されたことで北東から南西方向に伸びることがわかった。また、TP. 24, 25で確認された溝のどちらかが、この溝と結ばれる可能性もある。

平成5年度に環濠が確認された台地の北東側に設定したTP. 5では、溝が三叉路状に分かれている状況が確認された。この溝のどれかは、環濠に合流することも考えられる。また、遺物が出土した試掘場の多くでピットが確認されている。

これらのことから、この台地上には弥生時代から古墳時代初頭にかけて多くの人々が生活を営んでいたこと、環濠内にも複数の溝が掘られていることなどがわかった。



第5図 試据據位置図 ( $S = 1/3000$ )

表3 試掘場一覧表

試掘場	大きさ(m)	おもな遺構・遺物の出土状況
TP. 1	2×5	
2	2×5	
3	2×5	
4	1×10	落ち込み, ピット, 弥生土器, 凹石
5	1×10	溝状遺構, 弥生土器
6	2×5	ピット, 弥生土器, 不明鉄製品, 凹石
7	2×5	ピット, 弥生土器
8	2×5	ピット, 弥生土器
9	2×5	
10	2×5	ピット, 弥生土器
11	2×5	ピット, 弥生土器, 不明鉄製品
12	2×5	ピット, 弥生土器
13	2×5	ピット, 弥生土器
14	1×30	ピット, 弥生土器
15	2×10	ピット, 住居跡?, 落ち込み, 弥生土器, 石錘, 凹石
16	2×7	住居跡, ピット, 鉄製鋤先, 弥生土器, カマド石, 凹石
17	1×5	
18	1×12	溝状遺構 2条(道路?), ピット, 弥生土器
19	1×13	溝状遺構 2条, ピット, 弥生土器, 土師器
20	1×5, 1.5×7	溝状遺構, ピット, 銅鏡, 弥生土器, 土師器
21	1×2	
22	1×12	
23	1×15	
24	2×5	溝状遺構, ガラス小玉, 弥生土器, 土師器, 凹石
25	2×5	溝状遺構, 弥生土器, 土師器
26	2×5	
27	2×5	
28	2×5	ナイフ形石器
29	1×10	
30	1×10	
31	0.5×9	溝状遺構, 弥生土器
32	1×3	
33	1×10	
34	1×10	
O区	400(m <sup>2</sup> )	ピット(建物跡?), 弥生土器, 土師器, 鉄鎌, 凹石

### (3) 遺構

遺構が確認された試掘場について順次説明を加えたい。

#### ① O区（第6図）

O区は、原の辻遺跡が所在する舌状台地のはば中央に位置し、標高も約17mで付近では最も高い。このため、この場所からは遺跡全体のみならず平野「深江田原」のはば全城を眺望することができる。平成5年度からの調査で台地を取り巻く環濠が確認されたことで、原の辻遺跡が大規模環濠集落であることが明らかになったが、この環濠内の中心地としては地理的にみてこの場所が最も有力であると考えられている。今回は、この台地の北側半分にあたる400m<sup>2</sup>を調査した。

調査の結果、表土下10~20cmで基盤層を堀り込んだビットが126個確認された。ビットは、後世の著しい削平を受けており、底の部分がかろうじて残存しているものが多くいた。確認されたビットの平均直径は約47cm、深さは約17cmで黒灰色土が入っているものが多い。ビットの分布は、北側から西側にかけて多く、東側ではほとんど確認されていない。これは旧地形にそった掘削によるものではないかと推測される。ビット内からは弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての土器が出土した。各ビットの遺物出土状況については表4のとおりである。ビット22で鉄鏃が出土している。土器は細片が多く、各ビットが埋没した年代などを細かく把握することはできない。ただ、弥生土器が単独で出土したビットと土師器を伴って出土したビットではその分布状況に若干の差が認められた。弥生土器が単独で出土したビットは、O区の東側を除いてはば均一に分布しているが、土師器を伴ったものは北側の台地先端部に集中する傾向が認められた。遺物が出土していないビットも多く推測の域を出ないが、建物の配置の変遷を考える上では興味深い結果といえよう。

また、この北側先端に近い部分で焼土が確認されたが、ビットが削平されている状況からすると直接的に被熱したものとは考えにくい。さらに弥生土器が出土したビットがこの焼土を切っていることから考えて、弥生時代中期から後期にかけて何らかの事情で堆積した焼土層であると考えられる。この他にもビット8、42、43、46などで炭化物が出土している。

これらの結果をふまえて、この場所の性格を検証・推測してみたい。第一に問題になるのが、確認されたビットから建物や構造物を復元できるかどうかということであろう。先にも述べたようにビットの上部は削平を受けており、時期を判断することが困難になっている。このため一つの建物・構造物を構成した柱穴の配列を決定していくことは考古学的には非常に難しい。

宮本長二郎氏は、このO区のビット出土状況から板塀で囲まれた祭儀的空间を想定している。そして、その空間内には数軒の掘立柱建物の存在を考えている。宮本氏によればこの地区で確認されたビットは、一般的には竪穴式住居との複合集落において倉庫群としてとらえられる規模を示しているという。しかし、遺跡内で最も高所であるという立地条件と周囲を屏で囲むという形式、また焼土の堆積が認められることなどから前述のような性格を導いている。

確かに、首長層の存在を前提とすれば祭儀や占いといった要素は首肯されるものである。しかし、立地条件に根拠を限定するならば、視界的な卓越性から軍事的な拠点としての性格も指摘されうるの



第6図 ○区平面図 ( $S = 1/150$ )

ではないだろうか。どの方向から来る敵にたいしても見張ることが可能であったことが考えられよう。当調査区のように遺跡内でも重要性が高い場所である場合、より多角的な見地から遺跡の性格を考えることが必要である。今後の調査によって、さらなる検討が期待される。

#### 参考文献

1. 宮本長二郎「弥生時代の祭儀建築と外来文化」『邪馬台国への海の道』大阪弥生文化博物館1995
2. 武末純一「九州の掘立柱建物Ⅰ」『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化研究会1991
3. 「吉野ケ里」 佐賀県文化財調査報告書第113集 佐賀県教育委員会1992

表4 O区ピット一覧表

No.	直 径 / 深さ (cm) / 土色	出 土 良 物 等	No.	直 径 / 深さ (cm) / 土色	出 土 良 物 等
1	35.5/15.5/ 黒褐色	寄生・上 鋸 器 32	64	29.0/48.0/ 黒灰色	寄生・上 鋸 器 3
2	58.0/3.0/ 黄褐色	寄生 1	65	70.0/45.0/ 黒褐色	寄生・土 鋸 28
3	60.0/28.0/ 黑灰色		66	30.0/26.0/ 黒灰色	
4	60.0/28.0/ 黑灰色		67	54.5/17.5/ 黒灰色	
5	29.0/8.0/ 黄褐色		68	30.0/15.0/ 黒灰色	
6	36.5/16.0/ 黑灰色	寄生 1	69	44.0/2.0/ 黑灰色	
7	66.0/12.5/ 黑灰色		70	30.0/24.0/ 黑灰色	
8	40.5/11.0/ 黑灰色	炭化物	71	39.0/22.5/ 黑灰色	寄生 3
9	45.0/12.0/ 黑灰色	寄生 2	72	48.0/7.0/ 黑灰色	
10	22.0/8.0/ 黄褐色	寄生 11	73	33.5/1.0/ 黑灰色	
11	48.0/28.0/ 黑灰色	寄生・土 鋸 25	74	39.0/13.5/ 黑灰色	
12	50.0/14.0/ 黄褐色	寄生・上 鋸 器 10	75	40.0/16.0/ 黑灰色	
13	25.0/7.5/ 黄褐色		76	48.0/1.0/ 黑灰色	
14	157.0/18.0/ 黄褐色	寄生・上 鋸 器 55	77	43.0/6.0/ 黄褐色	寄生 1
15	40.0/45.0/ 黑灰色	寄生・上 鋸 器 8	78	30.0/9.0/ 黑灰色	
16	35.0/15.0/ 黑灰色	寄生 16	79	59.0/44.0/ 黑灰色	
17	15.0/15.0/ 黑灰色	寄生・土 鋸 20	80	33.0/12.0/ 黑灰色	
18	30.0/27.0/ 黑灰色		81	48.0/9.5/ 黑灰色	寄生・上 鋸 器 4
19	20.0/52.0/ 黑灰色	寄生・土 鋸 19	82	58.0/31.0/ 黑灰色	寄生 12
20	30.0/22.0/ 黑灰色		83	40.0/11.0/ 黑灰色	
21	30.0/45.0/ 黑灰色	寄生 14(中期1)	84	60.0/11.0/ 黑灰色	寄生 1
22	52.0/13.0/ 黑灰色	寄生 8・鉢底	85	70.0/29.0/ 黑灰色	
23	90.5/15.0/ 黑灰色		86	178.0/8.0/ 黑灰色	寄生・上 鋸 器 19
24	44.0/41.0/ 黄褐色		87	19.0/6.0/ 黑灰色	
25	79.0/11.0/ 黄褐色		88	50.0/5.5/ 黑灰色	
26	40.0/5.0/ 黄褐色		89	50.0/13.5/ 黑灰色	
27	32.0/2.5/ 黄褐色		90	50.0/14.5/ 黑灰色	
28	25.0/4.0/ 黄褐色		91	126.0/33.0/ 黑灰色	寄生 8
29	55.0/4.0/ 黑灰色	寄生・土 鋸 8	92	52.0/5.0/ 黑灰色	
30	44.0/17.5/ 黑灰色		93	30.0/14.0/ 黑灰色	
31	18.0/60.5/ 黑灰色		94	42.0/8.0/ 黑灰色	
32	57.0/21.5/ 黑灰色	寄生・上 鋸 器 45	95	80.0/8.5/ 黑灰色	
33	30.0/5.5/ 黑灰色	寄生 1	96	51.0/38.0/ 黑灰色	寄生 10・上 鋸 器 12
34	59.0/10.0/ 黑灰色	寄生 8(中期1)	97	58.0/27.0/ 黄褐色	
35	20.0/10.0/ 黑灰色		98	80.0/31.0/ 黑褐色	
36	26.0/6.0/ 黑灰色		99	55.0/15.5/ 黑灰色	寄生・上 鋸 器 12
37	31.5/14.0/ 黑灰色		100	38.0/19.5/ 黑灰色	寄生 3
38	27.0/4.0/ 黑灰色		101	29.5/6.0/ 黑灰色	
39	108.0/29.0/ 黑灰色	寄生・上 鋸 器 107	102	53.0/30.0/ 黄褐色	寄生 2
40	25.0/7.0/ 黑灰色		103	53.0/17.0/ 黄褐色	寄生 4
41	77.0/21.5/ 赤褐色	寄生 21(中期2)	104	39.0/13.5/ 黑灰色	
42	52.0/20.0/ 赤褐色	寄生 2・炭化物	105	56.0/19.0/ 黄褐色	
43	47.0/18.0/ 黑灰色	炭化物	106	42.5/10.0/ 黑灰色	
44	50.0/28.0/ 黑灰色		107	47.0/5.0/ 黑灰色	
45	38.0/30.0/ 黑灰色		108	39.0/10.2/ 黑灰色	
46	44.0/20.0/ 赤褐色	寄生 1・炭化物	109	40.0/8.0/ 黑灰色	
47	40.0/10.5/ 黑灰色		110	57.0/23.0/ 黑灰色	
48	80.0/14.0/ 黑灰色	寄生・上 鋸 器 14	111	54.0/8.0/ 黑灰色	
49	35.0/17.5/ 黄褐色		112	35.0/4.0/ 黑灰色	
50	27.0/15.0/ 黑灰色		113	43.5/6.0/ 黑灰色	寄生 1
51	27.0/15.0/ 黑灰色	寄生・土 鋸 器 5	114	54.5/8.5/ 黑灰色	
52	51.5/25.0/ 黑灰色	寄生 8	115	40.0/13.0/ 黑灰色	
53	66.0/15.0/ 黑灰色	寄生・土 鋸 器 4	116	10.0/1.0/ 黑灰色	
54	25.0/19.0/ 黑灰色		117	41.0/5.5/ 黑灰色	
55	39.5/19.0/ 黑灰色	寄生 1	118	36.0/12.0/ 黑灰色	
56	57.0/17.5/ 黑灰色	寄生 4	119	22.0/5.5/ 黑灰色	
57	66.0/71.0/ 黑灰色	寄生・上 鋸 器 9	120	30.0/4.0/ 黑灰色	
58	77.5/20.0/ 黄褐色	寄生・上 鋸 器 19	121	30.0/5.0/ 黑灰色	
59	55.0/12.0/ 黑灰色	寄生・土 鋸 器 10	122	48.0/10.0/ 黑灰色	
60	45.0/6.0/ 黑灰色		123	40.0/8.0/ 黑灰色	
61	40.0/47.0/ 黑灰色	寄生 1	124	52.0/4.0/ 黑灰色	
62	43.0/15.0/ 集灰土	寄生・上 鋸 器 28	125	47.5/27.0/ 黑灰色	
63	34.0/10.0/ 黑灰色		126	49.0/13.5/ 黑灰色	



第7図 時期別ビット分布図 ( $S = 1/300$ )

② T P. 4 (第8図)

台地の北東側、標高約8.5mの地点に設定した試掘場で、東側への落ち込みが確認された。落ち込みの下の方では、弥生中期から後期の土器が溜りのような状況で出土した。土器は第4層の暗茶褐色土層と、第5層の黒茶褐色土層から出土したが、出土土器の形態からは層位的な時期差は認められなかった。旧地形は東側にゆるやかに傾斜していたものと考えられるが、生活とともにう平坦化によって所々に段があったと考えられる。削平等により埋没したものと考えられる。

③ T P. 5 (第8図)

T P. 4のすぐ隣に設定した。遺物は同様に第4層と第5層から出土したが、第6層に切り込まれた溝状遺構が確認された。溝は試掘場付近で三叉路になっており、中には第5層の黒茶褐色土が入っていた。時間的な制約の為、溝内の掘り下げは行わなかった。溝の上付近の第4層からは、弥生中期から後期の土器が出土している。溝は、おそらく標高の高い西側から下りて試掘場付近で分岐し、さらに下の環濠へ下り合流するものと推定される。

④ T P. 6～8 (第9図)

T P. 6から8は、台地の中央や北東寄りの標高約11mの地点に連続して設定した。第4層の黒褐色土が遺物包含層で弥生中期から後期の土器が出土した。また、第4層の灰褐色土を切り込んだビット群が確認された。ビットは時間的な制約の為、掘り下げは行わなかった。ビット内の土は、黒色のものが1, 9, 12, 14, 16, 40, 41, 45, 46, 52、黒褐色のものが5, 6, 8, 11, 18, 19, 20, 21, 22, 30, 32, 36, 38, 42, 43, 44, 47, 48, 49, 53、暗茶褐色のものが2, 3, 4, 7, 10, 13, 15, 17, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 31, 33, 34, 35, 37, 50, 51, 54である。T P. 8の南側には性格不明の落ち込みがあり、黄灰褐色土が入っていた。弥生土器が出土したが、土層の堆積状況からみて後世のものと思われる。

#### ⑤ T P. 10 (第9図)

台地頂上O区のすぐ南側、標高約13.7mの地点に設定した。第5層に切り込んだビットが確認されたが、上部は削平されたものと考えられる。中には黒褐色土が入っており、弥生土器の小片が出土した。

#### ⑥ T P. 11~13 (第10図)

台地頂上O区の北西側に隣接する標高約16mの地点に連続して設定した。第3層の暗茶褐色土層から弥生中期から古墳時代初頭にかけての土器が出土している。TP. 11では第4層を切り込んだビット群が確認された。深さは10~20cmで、中にはいづれも黒褐色土が入っていた。ビット1からは弥生土器片が9点、ビット3からは20点、ビット5から6点が出土した。時期がわかるものが含まれていたものでは、ビット4から中期のもの2点を含む弥生土器が11点、ビット6から土師器を含む弥生土器12点が出土した。

TP. 13では、ビット1~10が確認された。第4層に切り込まれ、深さは10~20cmであった。1には黒褐色土が入っており、中期のものを含む2点の弥生土器が出土した。4には暗茶褐色土が入り、中期のもの、丹塗りのものを含む弥生土器と土師器が22点出土した。6にはやはり暗茶褐色土が入り、丹塗りのものを含む弥生土器と土師器が20点出土した。7は黄茶褐色土が入っているが、若干の炭化物が混ざっており、弥生土器2点が出土した。うち、1点は中期の甕の口縁部であった。

#### ⑦ T P. 14 (第11図)

O区の北東側に隣接する標高14.5~15.5mの地点に設定した。表土の下はすぐに地山となったが、地山に切り込まれたビット群が確認された。深さは10~20cmで黒褐色土が入っており、弥生土器の小片が出土した。

#### ⑧ T P. 15 (第11図)

TP. 14から東側にやや下った標高約10.5mの地点に設定した。第4層の黒褐色土層から弥生土器が出土している。ビットは1~44が確認されている。深さは10~20cmで、第5層の地山に切り込まれ第4層と同じ黒褐色土が入っている。9から中期のものを含む弥生土器6点が出土している。18からは、弥生土器2点と黒耀石1点が出土した。36からは、中期のものを含む弥生土器6点が出土した。また、試掘壙の中央付近から東側が丸く落ち込んでおり、住居跡である可能性がある。

#### ⑨ T P. 16 (第10図)

O区の西側に隣接する標高約16mの地点に設定した。ビット1~7と住居跡と考えられる遺構が確認された。ビットは深さ10~30cmで1~4には暗茶褐色土が入っていた。4から弥生土器片5点が出土した。試掘壙の西半分は約40cm程落ち込んでおり、隅がやや丸い角が認められることから住居跡であると思われる。遺構内からは、弥生時代中期から後期にかけての土器、不明鉄製品、カマド石などが出土したが、土層の状況や上層と下層で土器の新旧が逆転していることなどから、複数の遺構が切り合っているものと考えられる。試掘壙の幅が狭いため、切り合いの把握ができなかった。住居跡内の床面にはビット5~7が確認され、黒褐色土が入っていた。5は、深さ約40cmで後期の甕の口縁部

を含む弥生土器が2点出土した。6, 7は、深さ10~20cmで遺物は出土しなかった。

⑩ T.P. 18 (第14図)

O区の西側、標高約13mの地点に設定した。溝状遺構A, Bと浅いピットが確認された。溝は、約1mの幅で平行して南北に走っている。Aは、幅約25cm、深さ約5cmで底はV字形になっている。Bは、幅約30cm、深さ約10cmで底は平坦である。第4層の黄褐色粘質土層を切り込んでおり、第3層の黒褐色土層によってほぼ同時期に埋没していると考えられる。第3層からは弥生時代後期後葉の土器が出土している。遺構の性格としては、両側に排水機能を持たせた道路、あるいは単に排水路などが考えられよう。ピットは浅く遺物は出土しなかった。

⑪ T.P. 19 (第12図)

O区の南西側で、県道の西側に隣接して設定した。昭和51年に県教委が実施した調査で確認された溝状遺構を追跡するために設定したもので、標高は約12.5mである。溝状遺構A, Bとピットが確認された。溝Aは、幅約4mで第5層の明茶褐色土層を切り込み、黒灰色土が入っていた。時間的な制約の為、掘り下げなかった。溝Bは、幅約2.7mだが西側ほど広くなっている。やはり、第4層を切込み、黒灰色土が入っていたが、掘り下げは行わなかった。溝A, Bは約3.2mの間隔で北東から南西方向に平行して走っているが、機能していた時期などは今後の調査による検討が必要であろう。昭和51年確認の溝は、規模と方向から考えると溝Aと結ばれるものと思われる。

溝A, Bの間では、ピット1~3が確認された。1は、溝Aの南側のそばにあり直径約40cm、深さ28cmで、ピットの底の中心付近に柱の痕跡と思われる直徑約10cmの浅い凹みが認められた。ピット内には黒灰色土が入っていたが、遺物は出土していない。2, 3は溝Bの北側のそばに東西に約50cmの間隔で並んでおり、2は直徑約17cm、深さ27cm、3は直徑約28cm、深さ34cmで共に黒灰色土が入り、遺物は出土していない。これらのピットは時期などは不明であるが、その位置から考えると溝に関連した何らかの機能を持つ遺構である可能性が高い。溝A内の北側には黒灰色土を切り込んだピット4が確認され、中には暗黒褐色土が入っていたが未掘である。また、溝Aの北側は円形の落ち込みを切っているが、この落ち込みは住居跡とも考えられる。

⑫ T.P. 20 (第12図)

やはり、昭和50年の調査で確認された溝を追跡するために設定した。県道の西側そばの標高約14mの地点である。第2層のやや赤味をおびた茶褐色土層を切り込んだ幅約3.6m、深さ約1.6mの溝が確認された。溝の形状は、北側が急斜面なのに対して南側はゆるやかな傾斜で、レの字形になっている。溝内の土層は4層に分かれている。溝内の第1層である黒褐色土層(図では第3層)からは大量の弥生土器が出土した。時期は後期を主体とするが中期のものも含まれている。また、銅鏡が1点出土した。土の中には炭化物がやや多く含まれていた。溝内の第2層である暗茶褐色土層(図では第4層)からはやはり多くの弥生土器が出土したが、時期的には中期を主体としている。溝内の第3層(図では第5層)は、炭化物層であるが、堆積状況からみると溝内第2層の下部として包括されるように思われる。溝内の第4層は、茶褐色土層(図では第6層)でやや粘質である。土は不純物が少なく、土

器は細片が少し含まれていたが、時期などは不明である。溝の位置や規模から考えて、昭和50年に確認された溝と結ばれるものと考えられよう。溝の北側約3mの場所にピットが確認されたが、遺物などは出土せず性格は不明である。

#### ⑬ T.P. 24 (第13図)

台地頂上のO区の南側に設定した。標高はO区よりもやや高く約17.2mである。第2a層の暗赤褐色土層を切り込んだ落ち込みが確認された。この落ち込みは東西に直線的に伸びていることから、溝状遺構の一部であると考えられる。溝内の土層は3層に分かれていた。溝内第1層は黒褐色土(図では第2b層)で、弥生時代後期(中期も混入)を主体とする土器、ガラス玉1点が出土した。土の中には炭化物が多く含まれていた。溝内第2層は暗茶褐色土層(図では第3層)で、弥生時代中期を主体とする土器が出土した。溝内第3層は茶褐色土層(図では第4層)でやや粘質である。弥生時代中期の土器が出土したが、量的には少なかった。

この溝は、土器の出土状況から考えると、今回の調査で確認されたT.P. 19の溝A、T.P. 20の溝そして昭和50年確認の溝と同一のもののように思われる。ただし、位置的に標高差が3mもあること(T.P. 20と比較)、T.P. 20との距離が25mあり、その間で方向が変わることも否定できないことなどから今後の調査による検討を待ちたい。

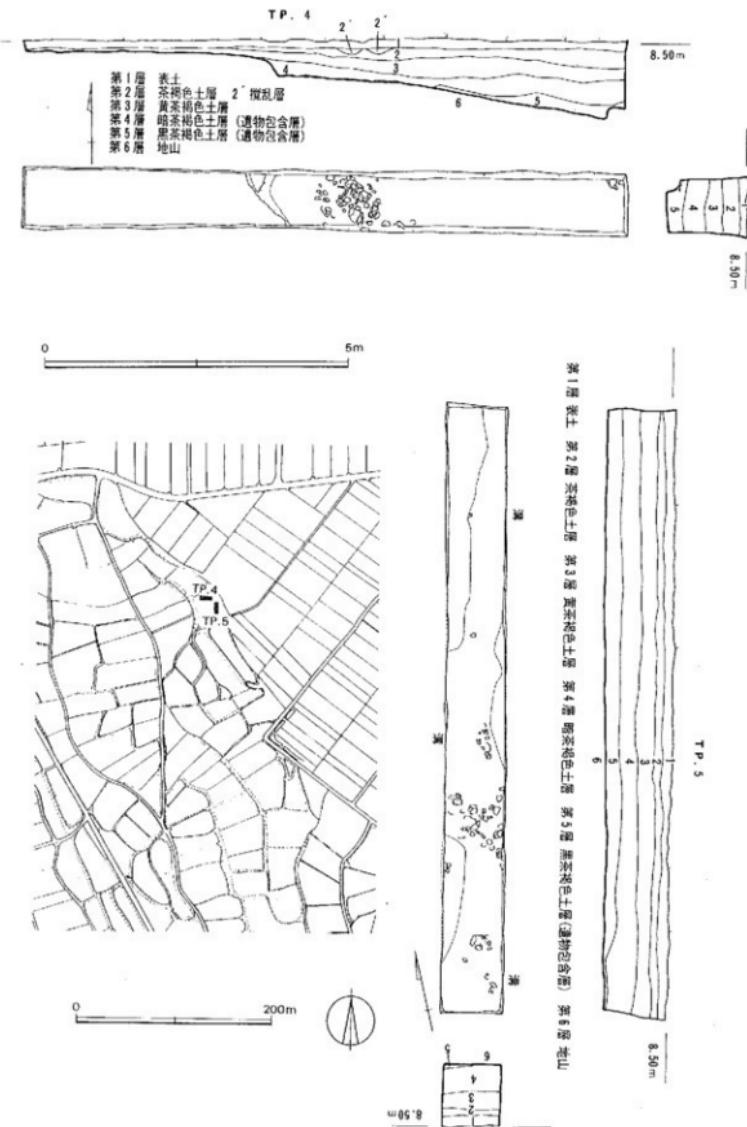
#### ⑭ T.P. 25 (第13図)

T.P. 24の南東側に隣接した地点に設定した。ここでも第2a層を切り込んだ落ち込みが確認された。やはり、溝状遺構の一部と考えられる。全体の規模は不明であるが、T.P. 24の溝とはほぼ平行して走っているように思われる。溝内は2層に分かれており、溝内第1層は暗茶褐色土層(図では第2b層)で弥生土器が出土した。溝内第2層は黒褐色土層(図では第3層)でやはり弥生土器が出土している。2つの層の時期的な差ははっきりしなかった。

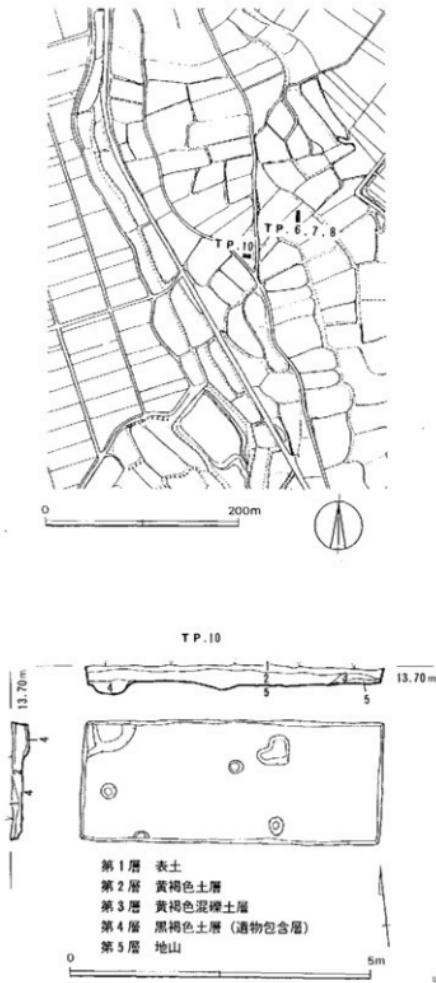
確認された2条の溝の全体の規模は今のところ不明であるが、台地頂上を区画または防御する目的で造られたものと考えられる。防御用とすれば、比較的見通しのきかない台地の南側のつけ根からの侵入に対するものであったのだろう。溝の間は平行して走っているとすれば、5~6mの間隔になると考えられるが、同時期に機能していたのかなどの問題もあり、今後の調査による検討を待ちたい。

#### ⑮ T.P. 31 (第14図)

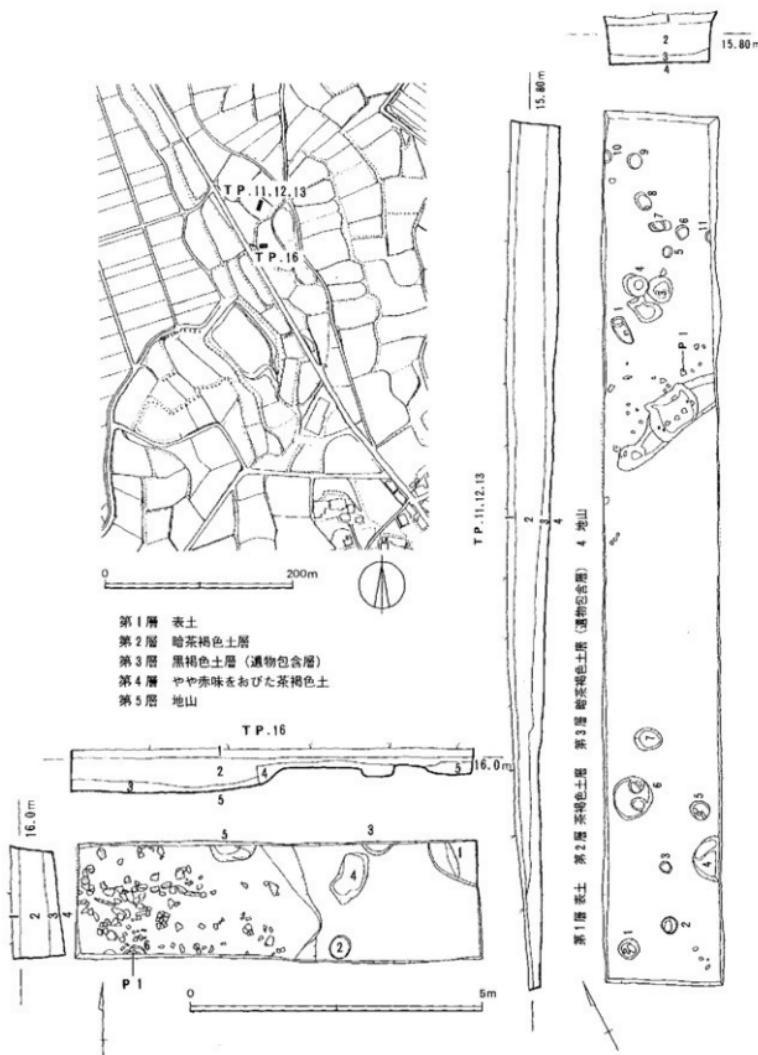
O区の南側約180mの地点に設定した。今回の調査では、最も南側で遺構が確認された試掘場で、標高は約15mである。県道の切り通しの壁面に観察できる溝を確認することが目的であったが、第4層の黄褐色の地山を切り込んだ幅約2.5mの東西に走る溝が確認された。中には第2層の黒褐色土と第3層の暗茶褐色土が入っていたが、時間的な制約の為にそれから下は掘り下げなかった。遺物は弥生土器細片が出土した。溝の性格については、環濠との比較など今後の検討が必要である。



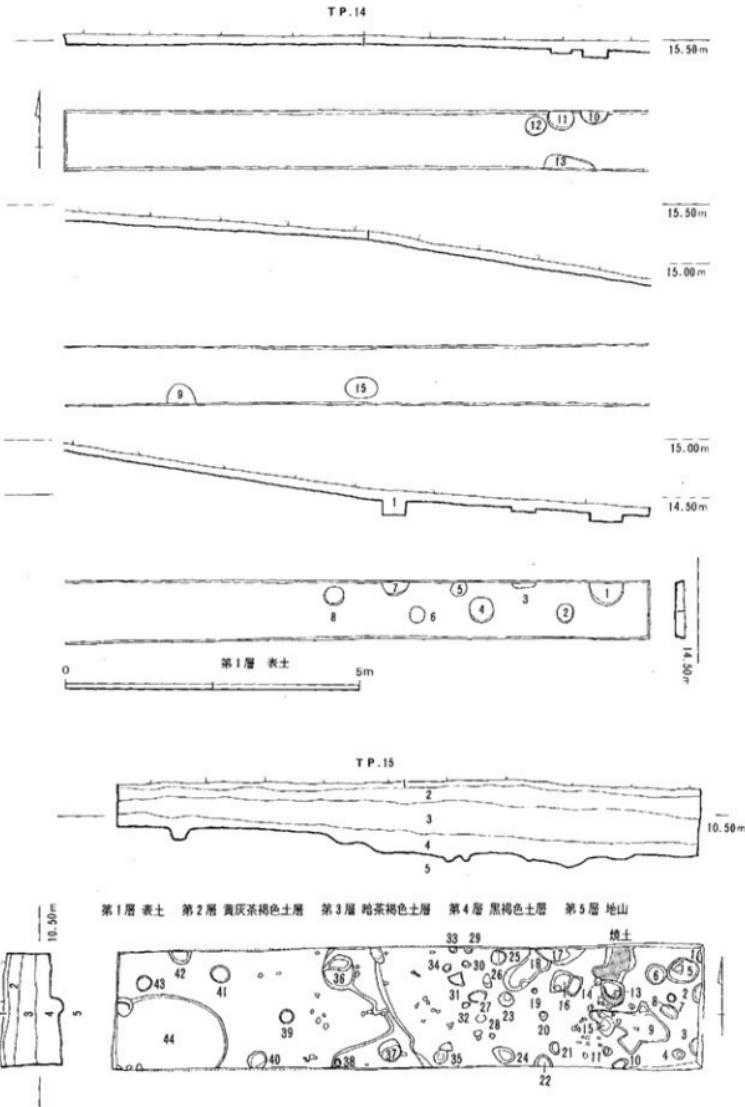
第8図 遠探TP. 4・5 ( $S = 1/80$ )



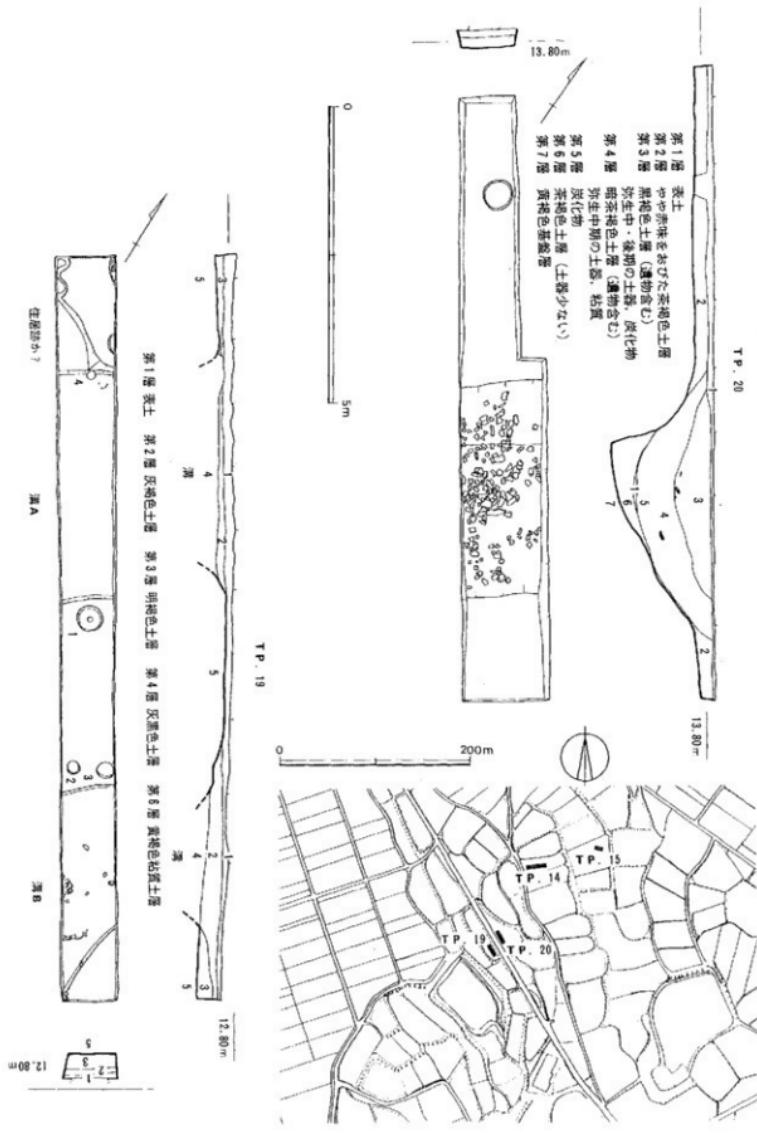
第9図 遺構 T.P. 6・7・8・10 (S = 1/80)

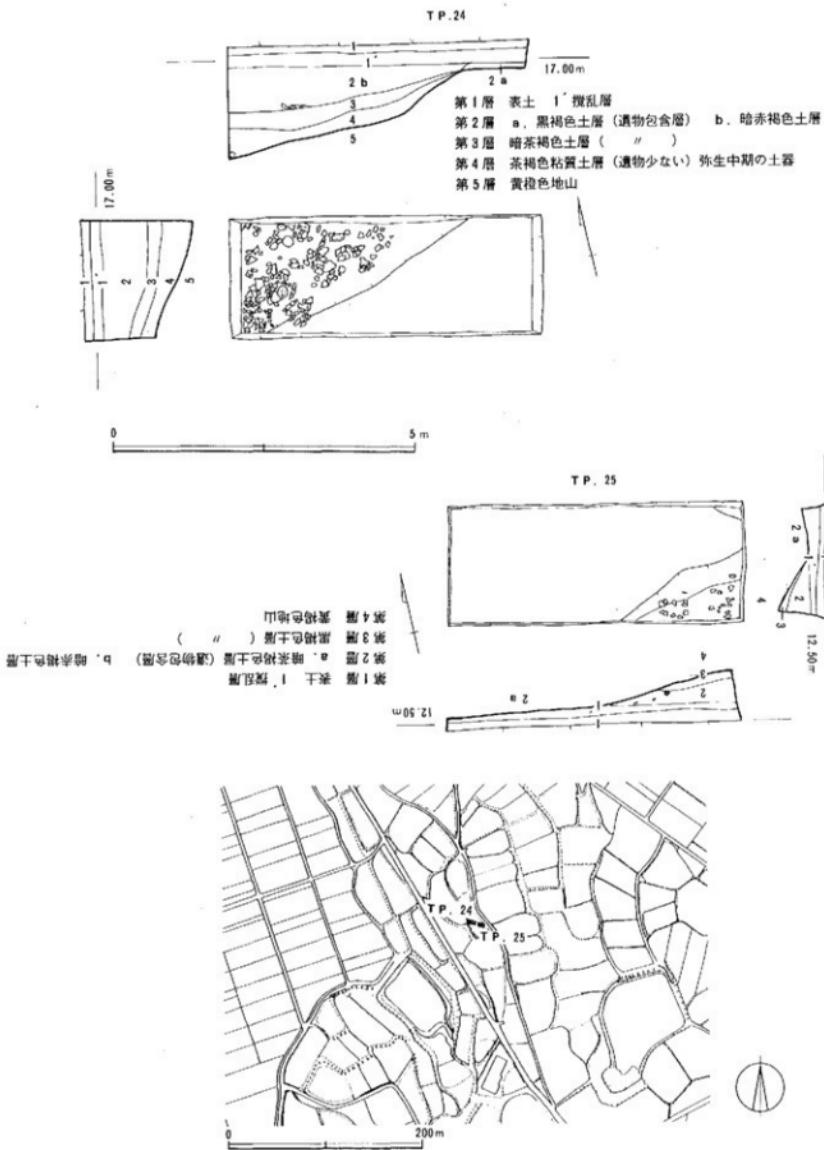


第10図 遺構 T.P. 11・12・13・16 (S = 1/80)

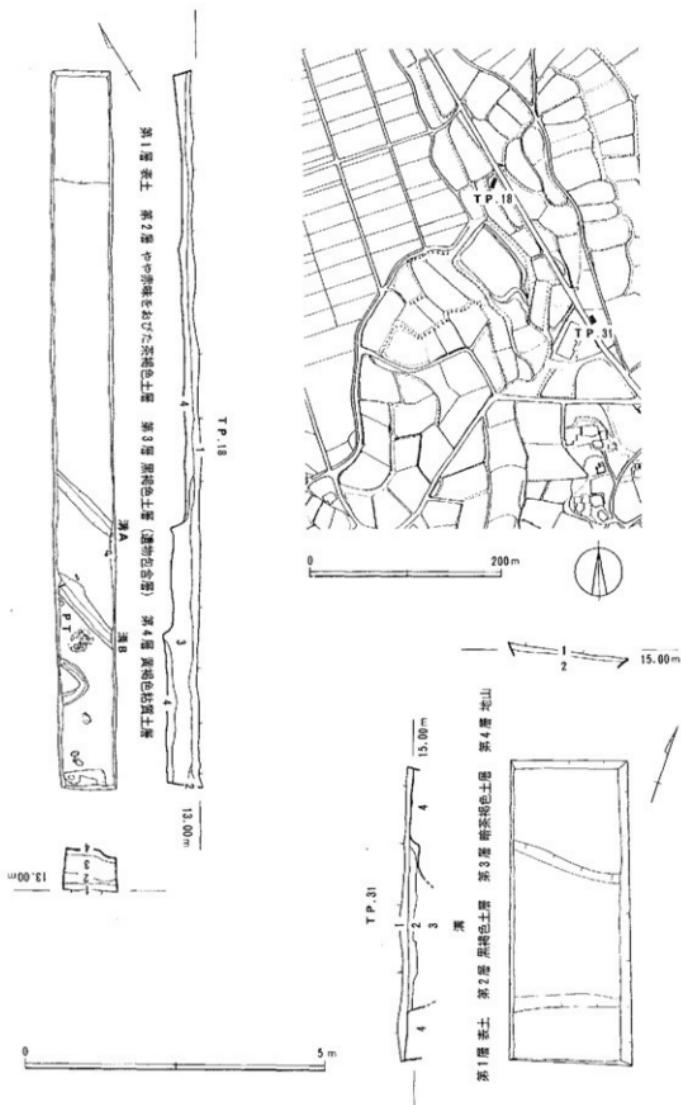


第11図 遺構 TP. 14・15 ( $S = 1/80$ )





第13図 造構 TP. 24・25 (S = 1/80)



第14図 遺構 T.P. 18・31 (S = 1/80)

#### (4) 遺物

##### a. 遺構出土の土器

###### ① O区ピット内出土（第15図）

1は、O区のピット85出土の高杯である。復元口径30.2cmで器面は橙色、やや風化が認められる。胎土には石英と金雲母の粒子を含み、焼成は普通である。上体部はやや外反しながらゆるやかに立ち上がる。体部内面と外面にそれぞれ一条の沈線を施し、体部外面はナデ調整である。古墳時代初頭のものと考えられる。

2は、ピット95出土の鼓形器台で、上部と下部を欠いている。器面はにぶい黄橙色で風化が進んでいる。胎土には石英と金雲母の粒子が含まれており、焼成は普通である。器肉は薄く均一で、体下部はハの字形に開く。上体部は逆ハの字形に開くが、その角度は体下部より広い。上部と下部の連結部はくびれており、2条の凸帯が付く。古墳時代初頭のものと考えられる。

3は、ピット91出土の甕の口縁部である。器面は橙色で風化している。胎土には石英と金雲母の粒子が含まれており、焼成は普通である。口縁部は直角に折れ曲がり、口唇部は丸くなっている。口縁部内側は、丸みをおびた三角形状に張り出す。弥生時代中期に位置づけられる。

4は、ピット48出土の壺である。器面は茶白色で風化が進んでいる。胎土はやや粗く石英粒、砂粒を多く含んでいる。器肉は薄く、胴部は丸みをおびている。口縁部はやや長めで、逆ハの字形に外に立ちあがる。古墳時代初頭に位置づけられよう。

5は、ピット39出土の甕の口縁部である。器面は黄白色で風化が進んでおり、胎土は砂粒を含んでいる。器肉は薄く、胴部から口縁部にかけては、くの字形に折れ曲がる。口唇部はやや厚く丸みをおびている。古墳時代初頭のものと考えられる。

###### ② T.P. 4落ち込み出土（第15図）

1, 2, 4は甕である。1は橙色を呈し、風化が進んでいる。胎土には砂粒を多く含み焼成は普通である。2は橙色だが器面の風化が進んでおり、焼成は甘い。4も焼成がやや甘く、風化が進んでいる。以上は弥生時代中期の須歎I～II式に位置づけられるものである。

3は甕で器面はにぶい褐色を呈し、かなり風化している。胎土には砂粒を多く含み、焼成は普通である。中期のものであろう。

5は甕の底部でにぶい橙色を呈し風化している。胎土には石英、長石の粒子を含んでおり、焼成は普通である。中期の須歎式のものと考えられる。

6は壺の底部で外面は丹塗りを施す。胎土には石英、長石、金雲母の粒子を含んでおり、焼成は良好である。中期のものと考えられる。

###### ③ T.P. 16住居跡内出土（第16図）

1～3は弥生時代中期の甕の口縁部で、須歎I～IIに位置づけられる。1は黄白色で焼成がやや甘く砂粒を多く含む。2は橙褐色で砂粒を含み凸帯を持つ。3は口唇部が下に垂れるタイプである。4, 7は後期の甕の口縁部である。4は橙色で砂粒を多く含み、口縁部外側にツメ形の押痕がめぐる。7

は、にぶい橙色で胴部と口縁部の境に凸帯を持つ。5, 6, 9は古墳時代初頭の甕の口縁部である。いづれも黄白褐色で器肉は薄い。6は胴部外側に平行につけられた条痕が残る。9は小形の鉢である。器面は橙色で風化しており、胎土に石英と金雲母を含んでいる。底部はやや平坦で体部は丸くやや内湾ぎみに立ち上がる。後期に位置付けられるものと思われる。

④ T.P. 18溝直上出土（第16図）

1は壺で、溝Bのすぐ西側で第4層直上に横たわった状態で出土した（P1）。この壺を含む第3層は溝A, Bを埋めており、溝の埋没時期を推定する資料である。壺の口径は18.6cm、高さは36.7cmで器面はにぶい橙色を呈し風化している。胎土はやや粗く石英、長石、金雲母の粒子を多く含み、焼成は普通である。底部はほぼ丸く、やや急に立ち上り胴部中ほどが張出している。肩から口縁部にかけてなだらかにすぼまる。口縁部はやや外反ぎみにゆるやかに立ち上り、口縁部下には凸帯がめぐる。弥生時代後期後葉に位置付けられよう。

⑤ T.P. 19溝B第2層上出土（第16図）

1は高杯で器面は橙色を呈し風化が進んでいる。胎土には石英の粒子を含み焼成は普通である。復元口径は28.8cmで器肉は薄くゆるやかに開く。古墳時代初頭に位置付けられるものと思われる。

2は小形の壺で口径は10.4cmである。器面は橙色で石英、金雲母、角閃石の粒子を含み、風化している。器肉はやや厚く胴部は丸みをおび、口縁部は逆八の字形に開く。弥生時代後期のものと考えられる。

3も壺で口径は17.8cm、高さ14.6cmである。器面は橙色で風化しており、胎土に石英、金雲母の粒子を含む。底部はわずかに平坦で胴部丸く、口縁部はやや外反ぎみに開く。後期のものと考えられる。

⑥ T.P. 20溝第3層出土（第17図）

1は甕で器面はにぶい橙色を呈し風化している。口径22.8cm、高さ32.2cmで胎土は石英と金雲母の粒子を含み、焼成は普通である。底部は平底でやや胴部が張り、口縁部はくの字形にややきつく折れ曲がる。胴部外面は刷毛目調整、内面はナデ調整である。弥生時代後期前葉に位置付けられる。

2～4は後期の甕の口縁部で、いづれも口縁部がくの字形に折れ曲がる。2, 3は屈曲の角度がゆるやかであるが4は1と同様にきつい。

5は壺で器面は橙色を呈し風化している。胎土には石英、長石、金雲母の粒子を含み、焼成は良好である。頸部は外反しながら立上り、口縁部はくの字形に内側に折れ曲がる。後期に位置付けられる。

6は高杯で口径は18.6cmである。器面は橙色を呈し風化している。胎土には石英粒を含み、焼成はやや甘い。脚部は端部が欠けているが、ゆるやかに開き丸い孔を穿つ。杯部は薄く、丸みをおびてやや内湾しながら立ち上がる。弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのものであろう。

7は複合口縁壺で器面は橙色で風化しており、胎土には石英、長石、金雲母の粒子を含む。後期後葉のものと思われる。

8は大型の壺で復元口径は45.4cmである。器面は橙色で石英粒を含み、焼成は普通である。後期後葉のものと思われる。

半のものか。

⑦ TP. 20溝第4層出土（第18図）

1は小型の甕で口径22.6cm、高さ26.4cmである。器面は浅黄色で風化しており、石英、金雲母の粒子を含んでいる。焼成は普通で、外面に刷毛目調整、内面にナデ調整を施している。底部は平底だが中央部がやや凹み、胴部はあまり張らない。口縁部は直角に折れ曲がり、内側が張り出している。口唇部は水平に長く伸びる。弥生時代中期の須歎I～II式に位置付けられる。

2～4は甕の口縁部である。2は復元口径27.2cmで器面は橙色を呈し、風化している。胎土には石英、黒雲母の粒子を含み、焼成は普通である。口縁部は直角に折れ曲がり、内側が張り出す。口唇部はやや下に垂れる。口縁部の下に断面三角形の凸帯がめぐる。3は復元口径27.8cmで外面明赤褐色、内面がにぶい橙色で胎土には石英、長石、金雲母の粒子を含んでいる。焼成は良好で外面に刷毛目が残る。口縁部は直角に折れ曲がり、内側が張り出す。口唇部はやや下に垂れ、口縁部下には凸帯がめぐる。4は復元口径25.8cmで器面は明赤褐色を呈し、胎土には石英、金雲母の粒子を含む。焼成は普通で、口縁部は直角に折れ曲がり内側が張り出す。口唇部はやや下に垂れ、口縁部下に凸帯がめぐる。2～4は中期の須歎I～II式であると考えられる。

5は甕の口縁部で復元口径26.4cmである。器面はにぶい橙色で、胎土には石英、長石、金雲母の粒子を含む。焼成は普通で、口縁部はくの字形に折れ曲がる。口唇部は内側がほねあがり、外側との間に沈線を有する。中期後半に位置付けられるものと思われる。

6は有頸壺の頸部で表面には丹塗りを施している。器面はやや風化しており、胎土には石英、長石、金雲母の粒子を含んでいる。焼成は良好である。外側には3条の凸帯がめぐるが、中央部が凹み断面がM形を呈する。中期の袋状口縁壺ではないかと思われる。

7は中期の無頸壺で表面には丹塗りを施している。胎土には石英、金雲母を含み焼成は良好である。器面は平滑で丁寧な仕上げである。

8は甕棺の口縁部である。器面は橙色を呈し平滑な仕上げである。胎土には石英、長石、金雲母の粒子を含んでおり、焼成は良好である。橋口達也氏の分類によるKIIIaに属するものと考えられる。同類は弥生時代中期後半に位置づけられている。

9、10は中期須歎I式に分類されと思われる。9は甕の口縁部で外面はにぶい橙色、内面は橙色を呈し、胎土には石英と金雲母の粒子を含んでいる。焼成は普通である。口縁部は外側に直角に折れ曲がるが、内側の張出しあはほとんど認められない。折れ曲がった口唇部は短く垂れない。10も甕の口縁部で器面はにぶい橙色を呈し、胎土は石英と金雲母の粒子を含む。口縁部の特徴は9に似る。

11～14は甕の底部である。11はにぶい橙色で胎土に石英と金雲母の粒子を含んでいる。底部は平底だが中央部がやや凹んでいる。外面には刷毛目調整を施す。須歎I～II式に位置づけられる。12は浅黄橙色で焼成がやや甘い。13はにぶい橙色で底がより凹む。14はにぶい橙色で焼成が甘い。底部は平底だがやや張出している。これらは須歎I～II式に位置づけられるものと考えられる。

⑧ T.P. 24第2・3層出土の土器（第19・20図）

1は甕で口径29.5cm、高さ29.6cmで器面は灰白色を呈し風化が進んでいる。胎土には石英、長石、金雲母の粒子を含み、焼成は普通である。底部は平底で胴部はやや張り、口縁部はくの字形にやや外反しながらきつく折れ曲がる。口唇部は丸みをおびている。後期初頭に位置づけられるものと考えられる。

2は後期の甕で器面はにぶい褐色を呈し胎土に砂粒を含む。胴部はあまり張らず口縁部はくの字形に折れ曲がるが屈曲は1に比すとゆるやかである。

3は鉢で口径14.6cm、高さ13.5cmで器面は橙色を呈し、胎土には石英、長石のやや粗い粒子を含む。焼成は甘い。底部は平底でやや内湾しながら立上り、口唇部は丸い。後期前葉の在地系のものと考えられる。

4は壺で口径14.6cm、高さ30.3cmで器面は橙色を呈し風化が進んでいる。胎土には石英、長石の粒子を含み、焼成は普通である。底部は凸レンズ状で胴部は丸く張り、口縁部はやや外反しながらくの字形に折れ曲がる。後期の中葉に位置づけられるものと考えられる。

5は小型の壺で器面は橙色を呈し風化している。胎土には石英と金雲母の粒子を含み、焼成はやや甘い。底部は丸く胴部は張る。口縁部を欠くが外に開くものと考えられる。後期後葉のものか。

6はその大きさから、台付き鉢の台部と思われる。橙色で風化している。後期後葉のものか。

7～9は器台である。7は橙色で外面に刷毛目が残る。下部は円錐形で上部は断面くの字形に折れ逆ハの字形に開く。8は組み合わせて用いたもので器面には指で形成した痕がのこる。9は形状は7に似る。刷毛目が外面と上部内面に残る。これらは後期中～後葉のものと考えられる。

10は高杯で器面はにぶい橙色を呈し風化している。胎土には石英粒を含み、焼成は普通である。後期中～後葉のものと思われる。

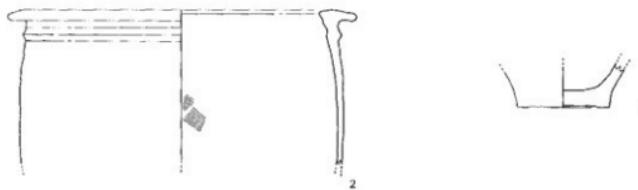
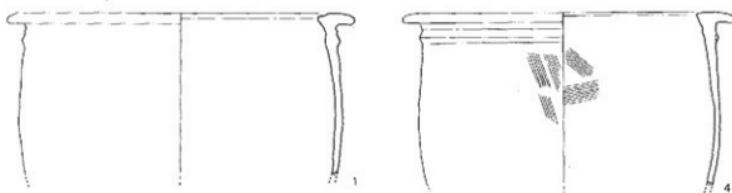
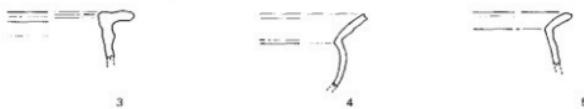
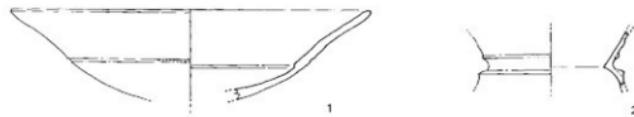
⑨ T.P. 24第4層出土（第20図）

1は甕で器面はにぶい橙色を呈し焼成はやや甘い。胎土には石英、長石、金雲母の粒子を含む。2も甕で器面は橙色で風化している。ともに中期須恵I～II式に位置づけられる。3は甕の底部で中央部が凹んでいる。須恵Iに位置づけられるものと考えられる。

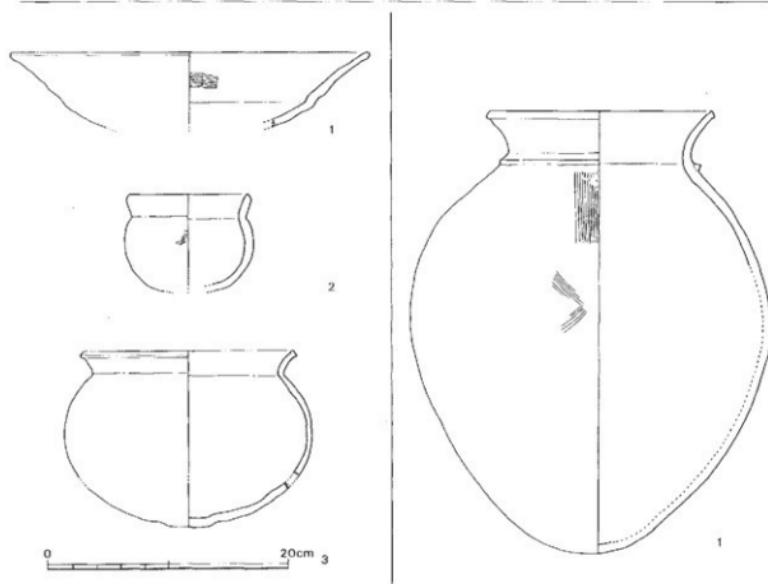
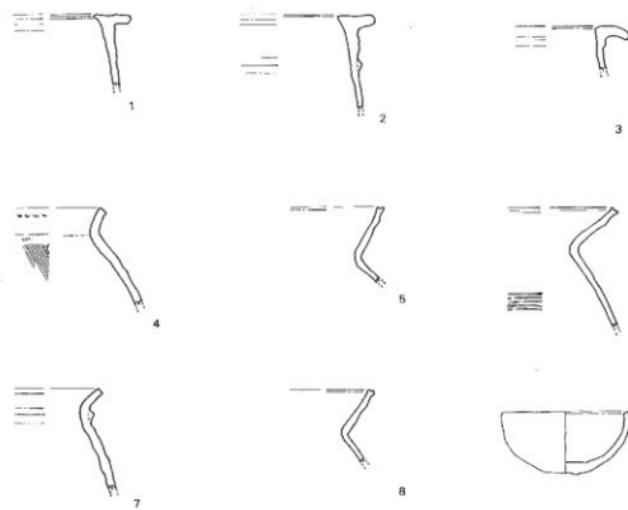
⑩ T.P. 25第2層出土（第20図）

1は甕で器面はにぶい橙色を呈し、胎土には石英、金雲母の粒子を含んでいる。器肉は薄く口縁部はくの字形に折れ、逆ハの字形に立ち上がる。古墳時代初頭に位置づけられよう。

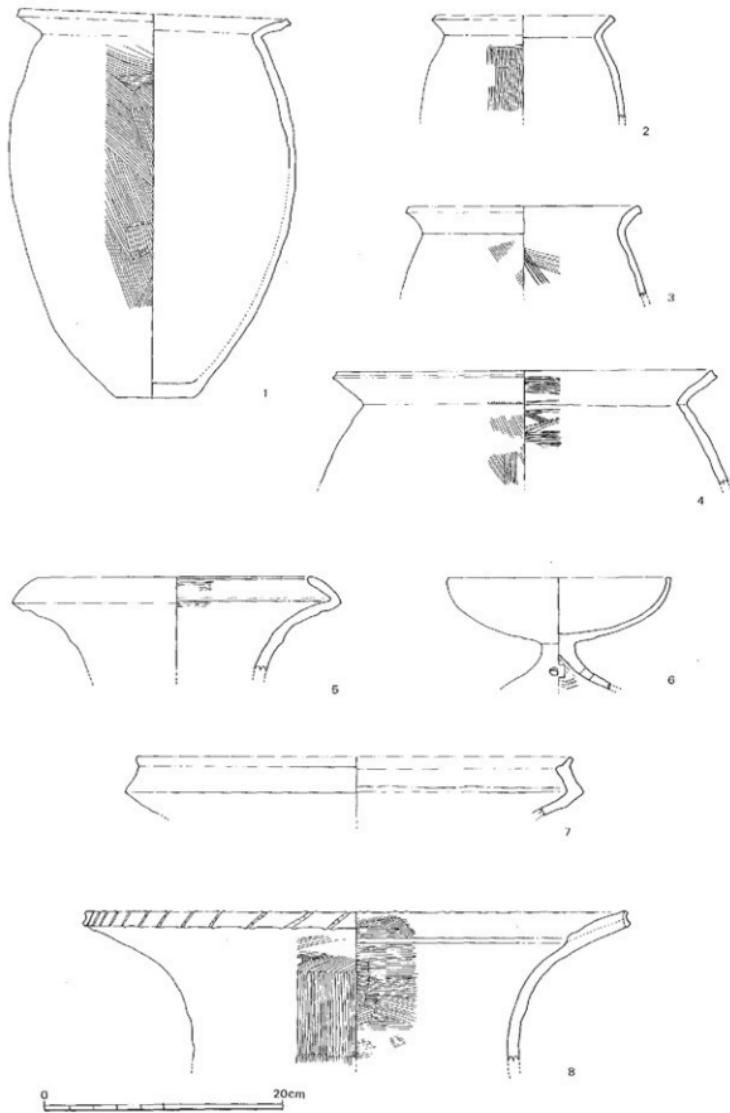
2は高杯で浅黄橙色を呈し風化が進んでいる。胎土に石英、金雲母の粒子を含む。脚柱部に縦に並んだ2つの孔がある。古墳時代初頭のものであろう。



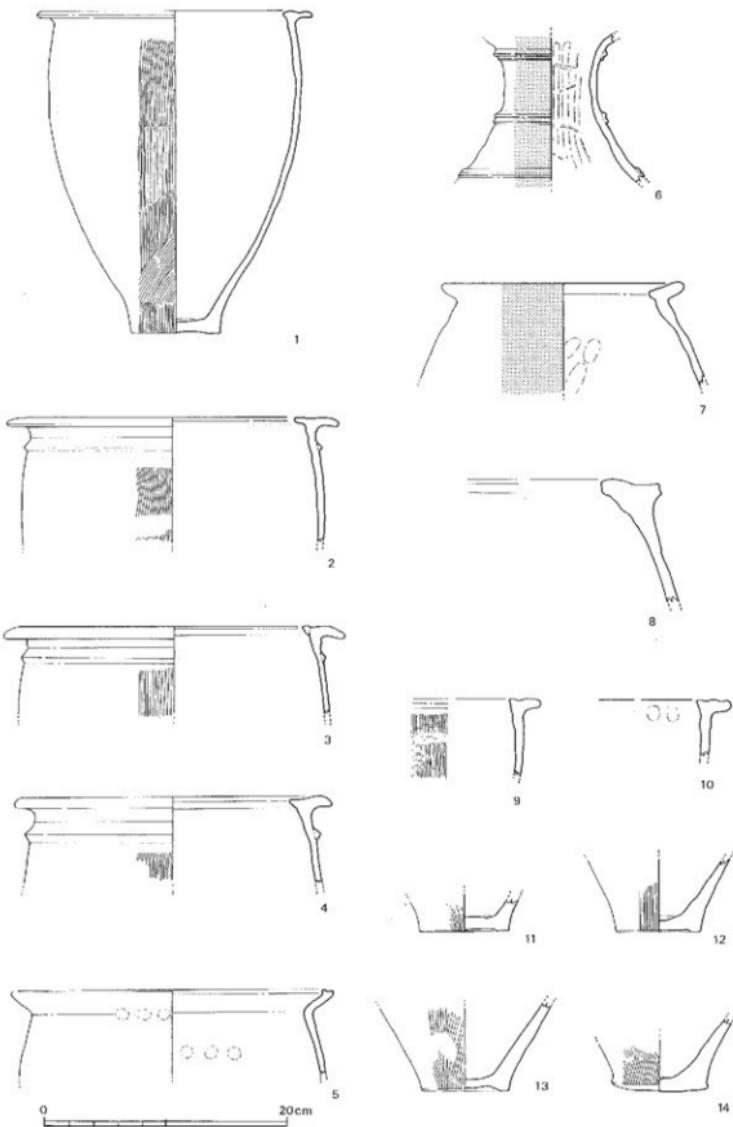
第15図 遺構出土の土器(I) (1/4)



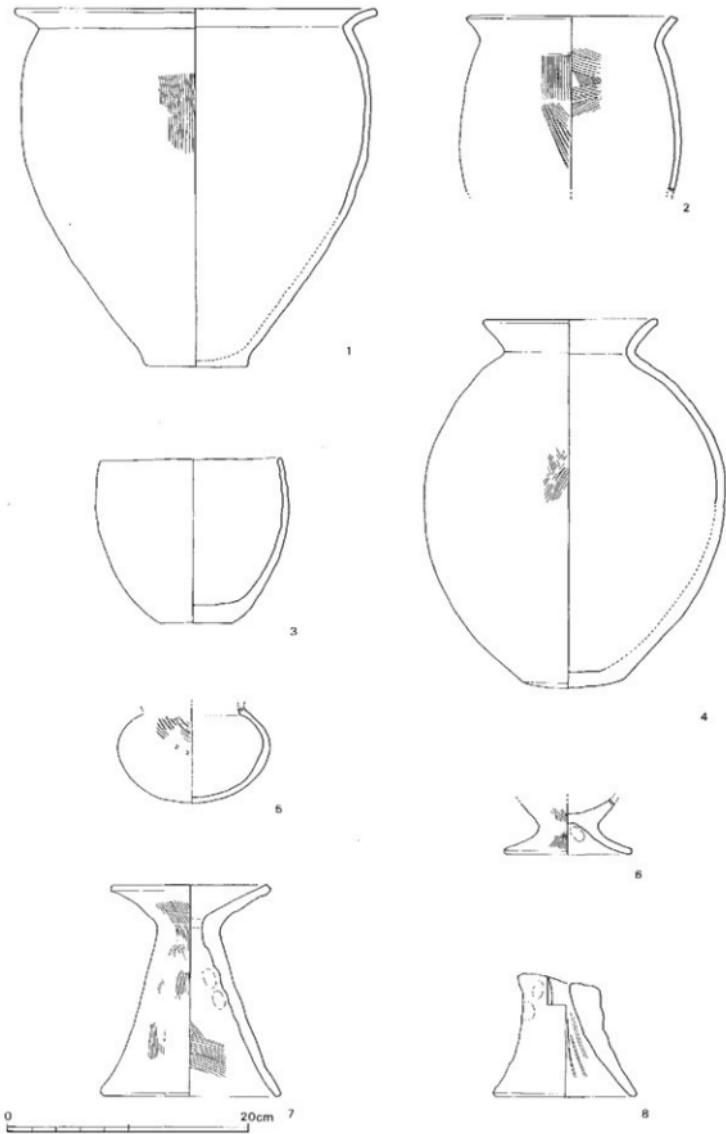
第16図 遺構出土の土器(2) (1／4)



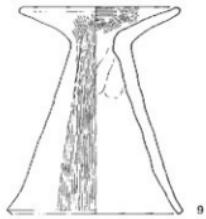
第17図 遺構出土の土器(3) (1 / 4)



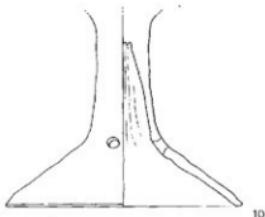
第18図 遺構出土の土器(4) (1/4)



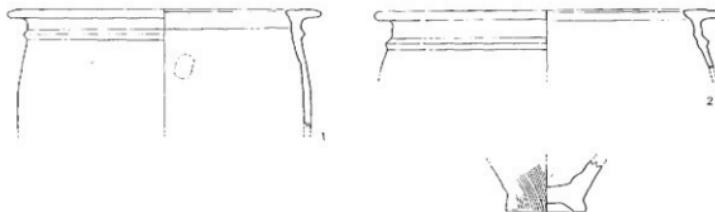
第19図 遺構出土の土器(5) (1 / 4)



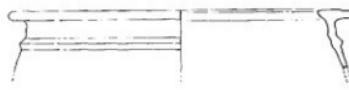
9



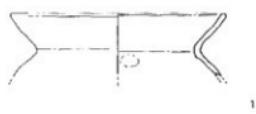
10



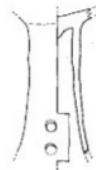
1



2



1



2



第20図 遺構出土の土器(6) (1/4)

### b. 各地区出土の土器（第21図）

遺構内での出土層位が不明なものや包含層出土のものを図化した。

1は高杯でTP. 20の溝上付近で出土した。器面は浅黄橙色で風化している。杯部はゆるやかに立上がり中ほどで屈曲してやや外反しながら開く。口唇部は丸くやや外反ぎみである。杯部内側には屈曲部に沈線が入る。後期後葉に位置づけられよう。

2はTP. 11の第3層から出土した（P 1）。形状からすると高杯の杯部と考えられるが、複合口縁壺である可能性もある。断面は内側にくの字形に折れ、端部はやや外反ぎみに上に伸びる。外面屈曲部には貼り付けの凸帯がめぐり、刻み目が施されている。外面上部には刷毛目が残る。後期のものか。

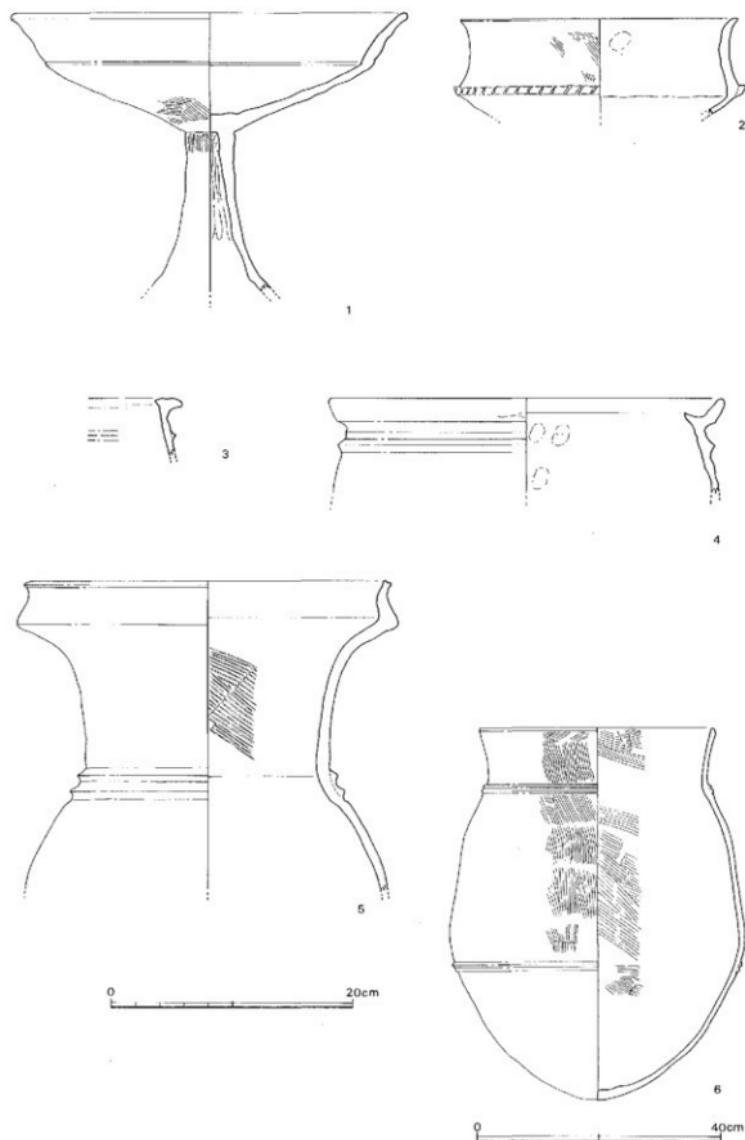
3は甕の口縁部でTP. 6の第3層から出土した。中期須式の特徴を示すが端部外側に刻み目を施している。4も甕でTP. 20の溝上付近で出土した。器面はにぶい橙色で胎土に石英、長石の粒子を含んでいる。口縁部は外側にくの字形に折れるが、内側にもかえり状の突起がのびる。つくりは須式に似るが搬入品の影響をうけたものであろうか。

5は大型の複合口縁壺でTP. 24の溝上付近で出土した。器面はにぶい橙色で風化している。胎土には砂粒を多く含み、焼成は甘い。頸部と胴部の境に2条の凸帯がめぐる。口縁部は外反して内側にくの字形に折れるがふたたび外反する。後期後葉の壺棺か。

6は甕棺でTP. 16の住居跡上付近で出土した（P 1）。口径74.0cm、高さ126.0cmで器面はにぶい橙色を呈する。底部は丸く胴部は卵形で、口縁部はやや外向きにまっすぐにのびる。口縁部と胴部の境に2条、胴部下半に2条の凸帯がめぐる。内外面には刷毛目が残る。後期後葉のものであろうか。

### 参考文献

1. 田崎博之「須式土器の再検討」『史淵』第122号 九州大学文学部1984
2. 常松幹雄「伊都国・奴國の土器」『古代探叢III』 早稲田大学出版部1991
3. 柳田康雄「土師器の編年・九州」『古墳時代の研究』 雄山閣1991
4. 橋口達也「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告』福岡県教育委員会1979
5. 高倉洋彰「原ノ辻上層式土器の検討」『森貞次郎博士古稀記念文化論集』1982
6. 下田章吾「原の辻遺跡」芦辺町文化財調査報告書第6集 芦辺町教育委員会1993
7. 町田利幸「原の辻遺跡」石田町文化財保護協会調査報告書第1集 石田町文化財保護協会1993



第21図 各地区出土の土器 (1/4)

c. その他の遺物

① 金属器 (第22図)

1は銅鎌で、TP. 20の溝内から出土したが層位は不明である。長さ4.0cm、厚さ0.3cm、重さ2.0gを計る。表面は緑白色の錆が進行してもろくなっている。刃部は三角形で側面から先端部にかけて薄く鋭利に加工されている。両平面には先端部から下端部にかけては稜線が走る。取付け部は端部が欠けている。

2は不明鉄製品でTP. 6の第3層から出土した。長さ7.3cm、重さ31.8gを計る。表面は厚い錆に覆われているが、原形は薄い刀子のようなものと考えられる。

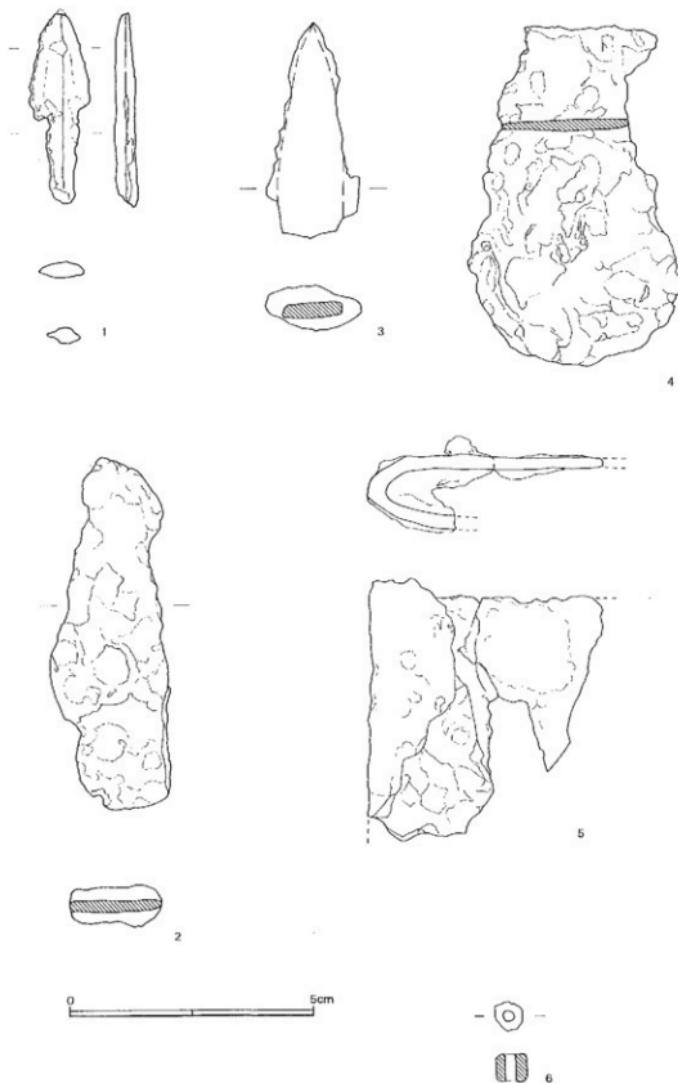
3は鉄鎌でO区のピット22から出土した。長さ4.4cm、重さ8.3gを計る。表面は錆で覆われるが、原形は平たく0.4cm程の厚さである。先端は鋭利である。

4は不明鉄製品でTP. 11の第3層から出土した。長さ7.0cm、重さ46.8gを計る。表面は厚い錆に覆われるが原形は薄く、平坦である。

5は鉄製鋤先の一部でTP. 16の住居跡内の第3層から出土した。重さは25.6gである。錆に覆われるが原形は薄く、U字形に曲がっている。

② ガラス製品 (第22図)

6はガラス小玉でTP. 24の溝内から出土した。直径は約6mmのリング形で径約2mmの孔がある。重さは0.3gである。形状はややいびつで半透明の濃い青色を呈す。



第22図 その他の遺物 (1/1)

## 4. まとめ

### (1) 調査のまとめ

今回の調査の目的は台地上における遺跡の展開、とくに頂上付近の様相を明らかにすることにあった。調査の結果、頂上部分では多くのピットが確認され、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけてこの場所が利用されていたことを裏付けることとなった。しかし、この場所の性格や機能については遺構の残存状態が良くないため不明な点を多く残している。今後の調査に期待したい。

また、頂上周辺においても溝状遺構や住居跡などが確認されたことで、付近一帯が生活空間として機能していたことがわかった。特に溝は複雑に伸びていることが予想され、環濠内における溝の機能がどのようなものであったのかという問題を提起している。現段階では防衛、区画、排水といった要素が考えられるが、今後の調査や自然科学分析などによって明らかになることが期待される。頂上付近から離れたTP. 5とTP. 31でも溝が確認されたが、これらは環濠との関係が注目される。環濠内の溝は環濠と合流するのかという問題は、これらの溝を追跡することで明らかになるものと考えられる。

これらのこととふまえると、台地の頂上周辺には遺構・遺物包含層が相当の密度で残っているものということができるであろう。

### (2) 遺跡の範囲・取り扱いについて

今回の調査結果にもとづいて、遺跡範囲における重要度を段階的に図化した（第25図）。

#### ① Aゾーン

原の辻遺跡の中心部である。台地をとりまく環濠とその周辺域で、台地上を中心広がる。この区域は弥生時代から古墳時代初頭にかけての「タニ」の中心と考えられ、現状のまま保存し国の史跡指定が望まれるゾーンである。

#### ② Bゾーン

環濠の一部と周辺の墓域などを含んでいる。一部が宅地化されているが、遺構・遺物包含層が残る区域である。工事等の開発計画に際しては保存の為の協議を必要とし、現状保存が望ましいが、やむをえない場合は緊急調査を実施すべきゾーンである。



第23図 原の辻遺跡ゾーニング図

図 版



図版 1. 原の辻遺跡空中写真  
(版権 建設省 国土地理院)

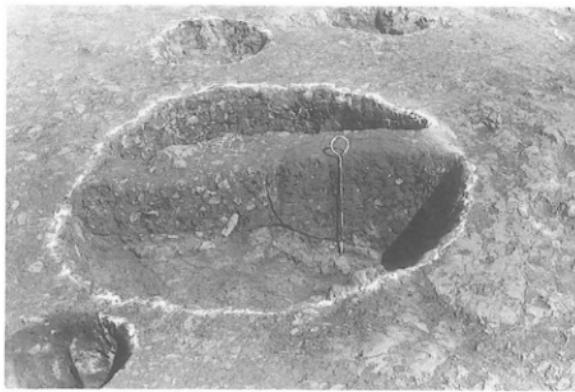
図版2



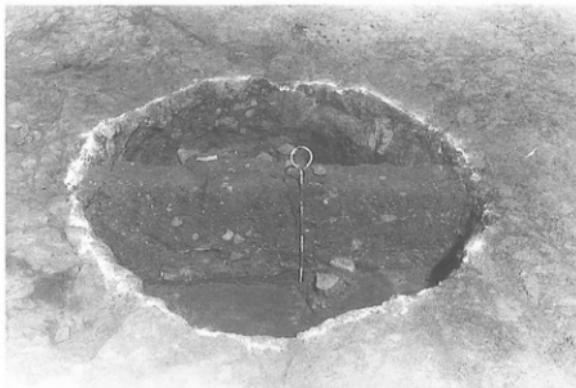
O区遠景



O区調査風景



O区 ピット91



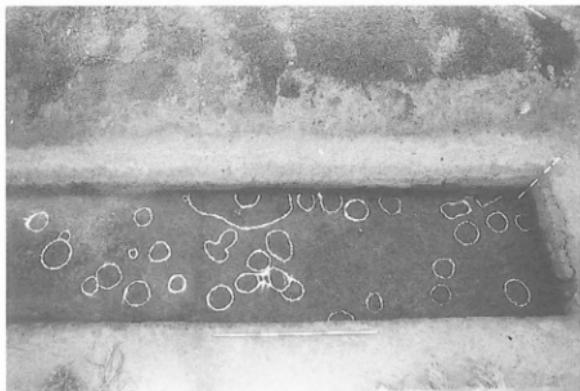
O区 ピット39



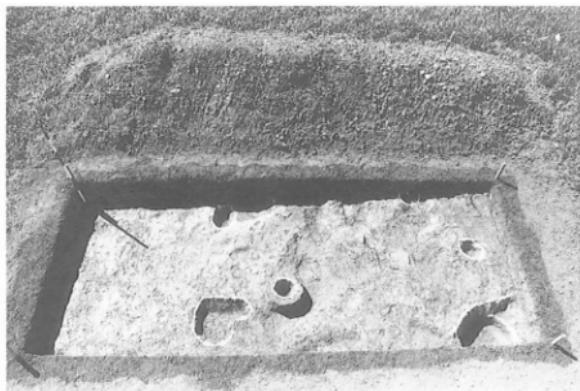
T.P. 4



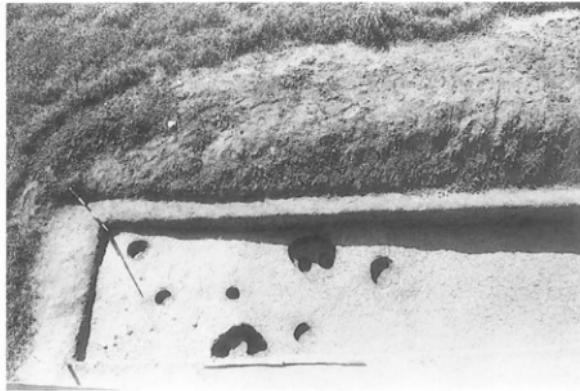
T.P. 5



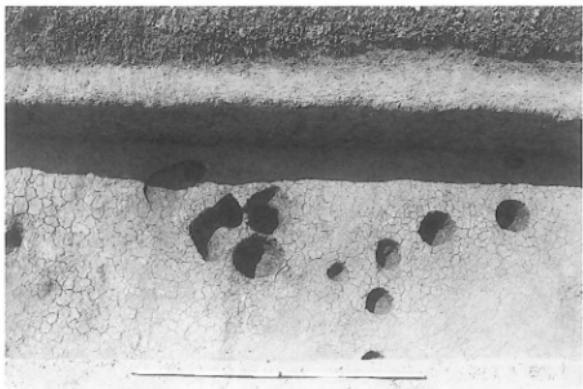
T P. 6



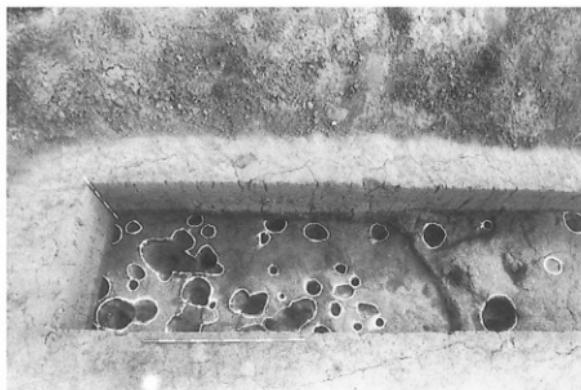
T P. 10



T P. 11



図版 6



T P. 15



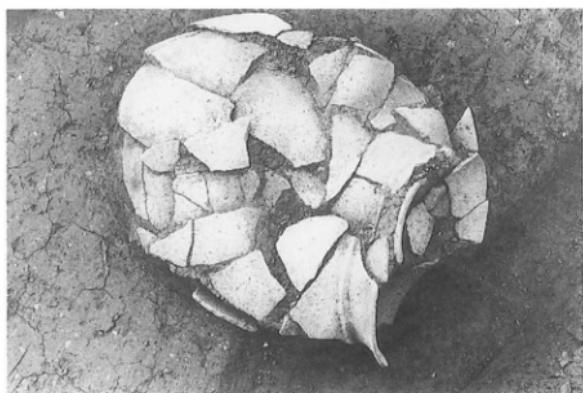
T P. 16



T P. 16

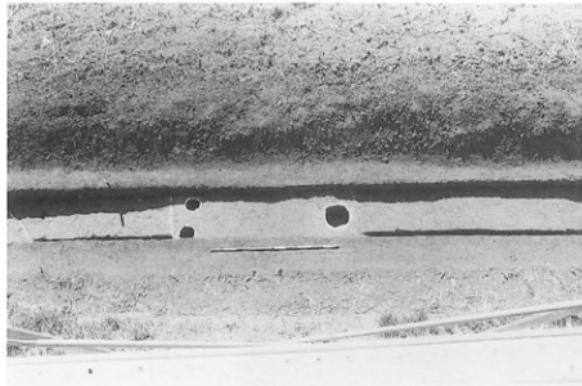


T P. 18

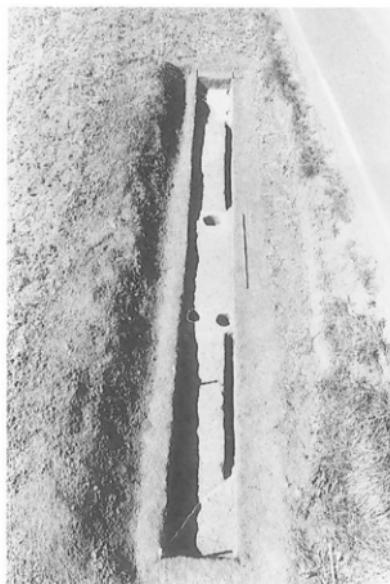


T P. 18 遺物出土狀況

図版 8



T P. 19



T P. 19



T P. 19, 20



T P. 20



T P. 20

図版10



T P . 20



T P . 24



T.P. 24, 25



T.P. 24西壁

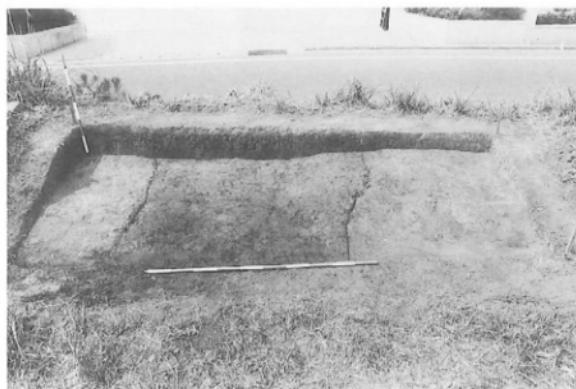


T.P. 24

図版12



T P. 25



T P. 31



調査風景



第16図-9



第16図TP. 出土



第17図-1



第17图-6



第18图-1



第19图-1



第19图-3



第19图-4



第19图-5



第19図-6



第19図-7



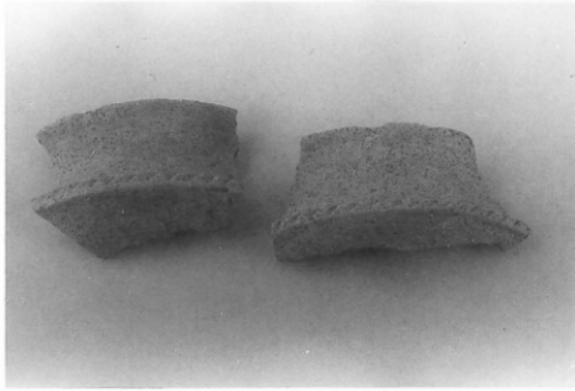
第19図-8



第20図 TP. 24出土



第21図-1

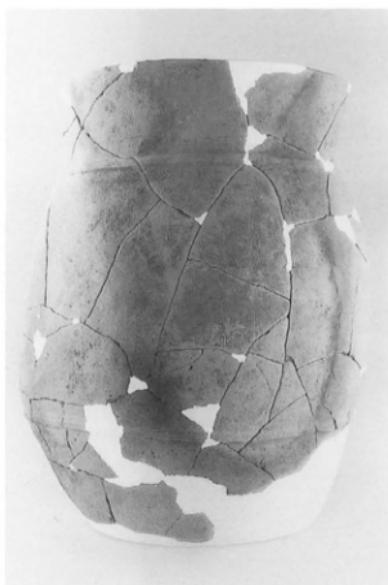


第21図-2

図版18

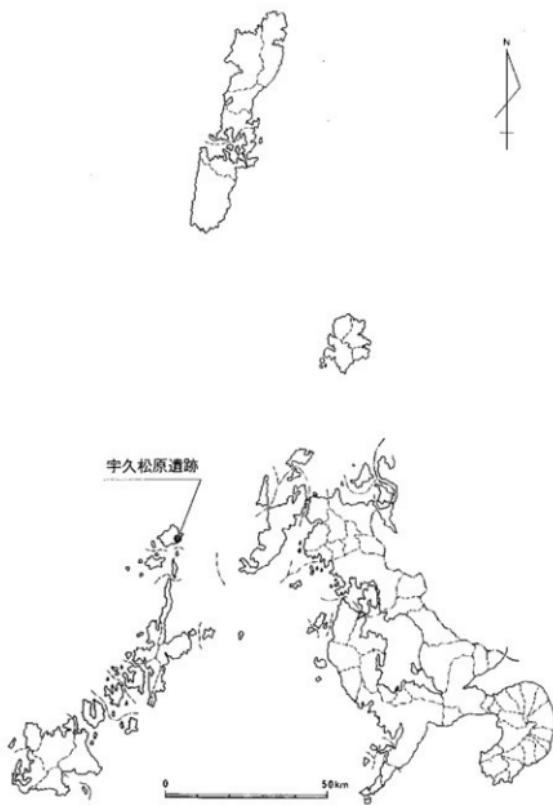


第21図-5



第21図-6

## II 宇久松原遺跡



## 例　　言

1. 本報告は平成6年に実施した長崎県北松浦郡宇久町平郷字松原に所在する宇久松原遺跡の重要遺跡範囲確認調査の報告書である。
2. 調査は長崎県教育庁文化課が事業主体となり、宇久町教育委員会の協力を得て、平成6年7月25日～8月3日まで実施した。
3. 調査関係者は次の通りである。

調査担当	長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	本田秀樹
同		文化財調査員	高原 愛
調査協力	宇久町教育委員会	教育次長補佐	樋口 忠
同		社会教育係	泊 吉弘

4. 本書における遺物・写真・図面等は県文化課立山分室で保管している。
5. 本書の執筆・編集は本田による。

## 本文目次

1. 遺跡の立地と環境	69
(1) 地理的環境	69
(2) 歴史的環境	71
2. 調査の経緯	72
3. 重要遺跡範囲確認調査の概要	75
(1) 調査の目的と方法	75
(2) 調査の概要	76
(3) 出土遺物	79
4.まとめ	84
(1) 遺跡の時代別変遷について	84
(2) 遺跡の範囲・取り扱いについて	85

## 挿図目次

第1図 宇久松原遺跡と周辺遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)	69
第2図 これまでの調査区全国 (S.43 S.52 H.7)	72
第3図 昭和52年度調査遺構 (宮崎1983 より抜粋)	73
第4図 昭和52年度出土遺物 (宮崎1983 より抜粋)	74
第5図 今回の試掘坑配置図 (S = 1 / 2,000)	76
第6図 土層図(1) (S = 1 / 40)	77
第7図 上層図(2) (S = 1 / 40)	78
第8図 出土遺物(1) (S = 1 / 3)	81
第9図 出土遺物(2) (S = 1 / 3)	82
第10図 出土遺物(3) (34・35はS = 1 / 3, 36・37はS = 1 / 2, 38はS = 1 / 1)	83
第11図 宇久松原遺跡ブーニング図 (S = 1 / 2,500)	84

## 表 目 次

表1 周辺遺跡地名表.....	70
表2 調査遺構一覧表.....	75

## 図 版 目 次

図版1 遺跡遠景・遺跡近景・TP.4南壁土層.....	89
図版2 TP.7東壁土層・TP.9東壁土層・TP.11東壁土層.....	90
図版3 出土遺物(1) (S=1/2).....	91
図版4 出土遺物(2) (S=1/2).....	92
図版5 出土遺物(3) (S=1/1).....	93

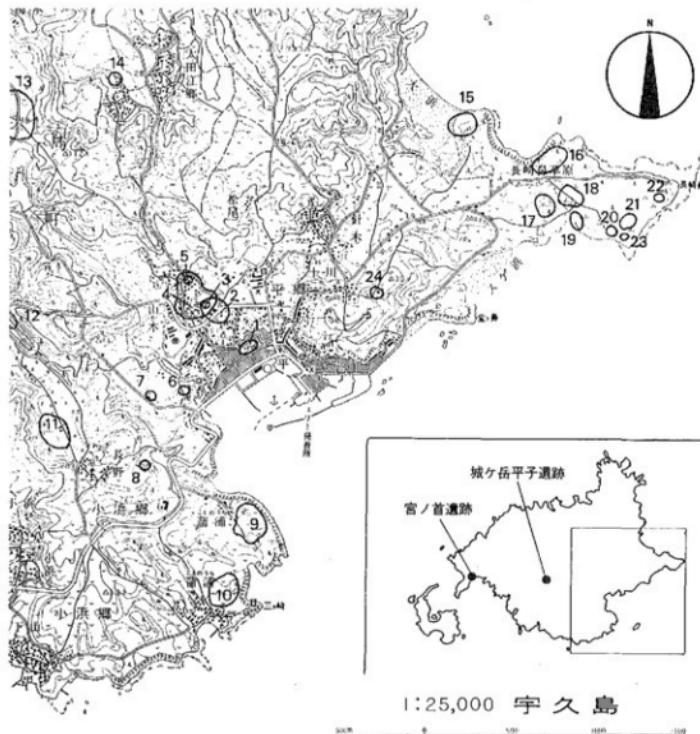
## 1. 遺跡の立地と環境

### (1) 地理的環境

遺跡の所在する宇久町は、五島列島の最北端に位置する、面積26.6km・周囲37.7kmの島である。東方約35kmには平戸島が、南方約7.5kmには小値賀島があり、行政的には佐世保市以北の一帯と同じ北松浦郡に属する。交通の便からか、文化的経済的な交流は長崎市よりも佐世保や福岡方面とのつながりが多い。

気候は対馬海流の影響もあって典型的な海洋性気候を呈し、冬は暖かく夏は比較的涼しい。冬場は季節風が強いが、霜が降りることはほとんどない。海流にのってイルカやクジラの回遊も多く見られ、複雑な海底地形は魚貝類の生育にも適するため、水産業が生業の主体となっている。

島の中央部には最高峰・城ヶ岳（標高258.6m）があり、周囲の山麓にかけてなだらかな溶岩台地



第1図 宇久松原遺跡と周辺遺跡位置図 ( $S = 1/25,000$ )

が広がっている。山がちな五島列島の島々の中では珍しく、農業に適した地形で、他に放牧地としても利用されている。ただし大きな河川はなく、水源には乏しい。水系で2級河川に指定されているのは、町の南東部を流れる江端川（流域面積1.95km）のみである。この川の河口には島の玄関口である平港があり、海岸低地が開けている。現在は人工埋立地となっているが、古くからこの島の中心となっていた。宇久松原遺跡付近も海岸低地であり、背後は低位溶岩台地となっている。

表層地質の主体をなすのは玄武岩と安山岩である。安山岩は新生代新第三紀（鮮新世～中新世）の火山性岩石で、平郷以東の海拔50～70mの台地面は安山岩溶岩により形成されている。

島の南東や南西の海岸部で発達している海浜砂・古砂丘砂は、新生代第四期の完新世（沖積世）～更新世（洪積世）のものである。地質柱状図で見ると、表土が粘土混じりの砂疊で、それ以下5～7mまで貝殻混じりの砂が延々と続く。以降は粘土、玄武岩となるようである。

No.	遺跡名	所在地	種別	立地	時代
1	松原遺跡	宇久町平郷字松原	墳墓	砂丘	弥生
2	山本遺跡	宇久町平郷字山本	遺物包含地	丘陵	縄～中
3	久保様遺跡	宇久町平郷字山本	石造物	丘陵	中世
4	宇久城跡	宇久町平郷字山本	城跡	丘陵	中世
5	山本五輪塔群	宇久町平郷字山本	石造物	丘陵	中世
6	舜谷寺貝塚	宇久町平郷字岡平	貝塚	丘陵	中世
7	富本遺跡	宇久町平郷字富本	石造物	丘陵	中世
8	唐松遺跡	宇久町平郷字境目切絵	石造物	丘陵	中世
9	萱場崎遺跡	宇久町小浜郷字萱場崎	遺物包含地	台地	縄文
10	蒲ノ浦遺跡	宇久町小浜郷字蒲浦三ヶ崎	遺物包含地	丘陵	縄文
11	長野遺跡	宇久町小浜郷字長野原	遺物包含地	丘陵	先・縄
12	招魂場遺跡	宇久町平郷字南風栗	遺物包含地	丘陵	先土器
13	大鉢遺跡	宇久町木場郷字大鉢	遺物包含地	平地	先・縄
14	丸の松積石塚	宇久町太田江郷字丸の松	積石塚	丘陵	
15	大浜遺跡	宇久町平郷字長崎鼻	遺物包含地	砂丘	弥生
16	長崎鼻A遺跡	宇久町平郷字長崎鼻	遺物包含地	砂丘	先土器
17	長崎鼻F遺跡	宇久町平郷字七郎女瀬	貝塚・遺物包含地	砂丘	縄文
18	長崎鼻E遺跡	宇久町平郷字長崎鼻	遺物包含地	砂丘	縄文
19	長崎鼻D遺跡	宇久町平郷字長崎鼻	遺物包含地	砂丘	古墳
20	長崎鼻C遺跡	宇久町平郷字長崎鼻	遺物包含地	砂丘	古墳
21	長崎鼻B遺跡	宇久町平郷字長崎鼻	遺物包含地	砂丘	縄文
22	長崎鼻積石塚A	宇久町平郷字長崎鼻	積石塚	砂丘	
23	長崎鼻積石塚B	宇久町平郷字長崎鼻	積石塚	砂丘	
24	柏岳遺跡	宇久町平郷字平岳	石造物	台地	中世

表1 周辺遺跡地名表

## (2) 歴史的環境（第1図、表1）

宇久町内でこれまで知られている遺跡数は52遺跡ある（平成7年3月現在）。種別の内訳は、集落・散布地が44、貝塚2、城館跡2、墳墓1、近世以降3となっている。時代別では旧石器15、縄文20、弥生6、古墳10、中世15、近世4という割合（のべ数）である。

旧石器・縄文時代の遺跡はほぼ全島に分布しているが、代表的なものでは城ヶ岳平子遺跡と長崎鼻遺跡があげられよう。城ヶ岳南麓にある平子遺跡は、多数の石器が採集されることで古くから注目されていた。昭和57年と59年には長崎県立美術博物館によって発掘調査が行われ、第一層では細石器に隆線文・押引文土器が共伴して出土し、第三層ではナイフ形石器が出土した。当遺跡の細石核は特徴があり、「宇久島型細石核」の名で呼ばれている。長崎鼻遺跡は島の東端部にある標高10m前後の砂丘上に立地する。構造は明確ではないが、縄文中期の包含層と小貝塚があり、石鋸の良好な資料が得られている。

弥生時代になると遺跡は本飯良郷・飯良郷と平郷の東西に二極分化する。本報告の松原遺跡が代表的であるが、詳細は本文を参照されたい。

古墳時代では五島列島全体に遺跡が稀薄となる。特に墳丘を持つ古墳は小値賀島を除いては見つかっていない。宇久島でも弥生後期以降は平郷の遺跡は少なくなり、小値賀島に対面する本飯良郷・飯良郷・神浦郷地域に中心が移動する。宮ノ首遺跡は島の西端部にあり、南面する入江に形成された遺跡である。古墳～中世にかけての遺物包含層と貝塚が砂丘の後背地に広がっており、須恵器・土師器のほか玄海灘式製塩土器が出土している。貝塚からは大量のアワビ貝と馬骨がみつかり、古代に干しアワビを貢納した可能性が指摘されている。

中世になると遺跡の半数以上が平郷に集中する。文治三年（1187）に平忠盛の子・家盛が下向し、在地豪族宇久氏の始祖となったと伝えられ、家盛ゆかりの寺院の大半が当地には所在する。宇久氏は山本に館を構えて居住したといい、宇久城の別名がある。平成7年12月に実施された山本遺跡の試掘調査では、中世の包含層から多数の青磁片が出土したといいう。

近世では一変して本飯良郷・神浦郷・大久保郷など島の南西部に遺跡が多くなる傾向がうかがえる。宇久氏は永徳三年（1383）に福江島の岐宿に本拠地を移して五島氏を名のり、以後宇久島は五島藩領となる。

## 参考文献

- 離島振興開発地域『土地分類基本調査－肥前江ノ島・小値賀島・立串・肥前赤島』長崎県 1982  
下川達彌・立平進『長崎県北松浦郡宇久町所在 城ヶ岳平子遺跡－第一次調査概報』長崎県立美術博物館 1983  
宮崎貴夫ほか『宮ノ首遺跡』宇久町文化財調査報告書第二集 宇久町教育委員会 1991  
『角川日本地名大辞典 42 長崎県』 1987  
瀬尾泰平「長崎県宇久島の考古遺跡」『長崎県の考古学Ⅱ』長崎県考古学会 1984

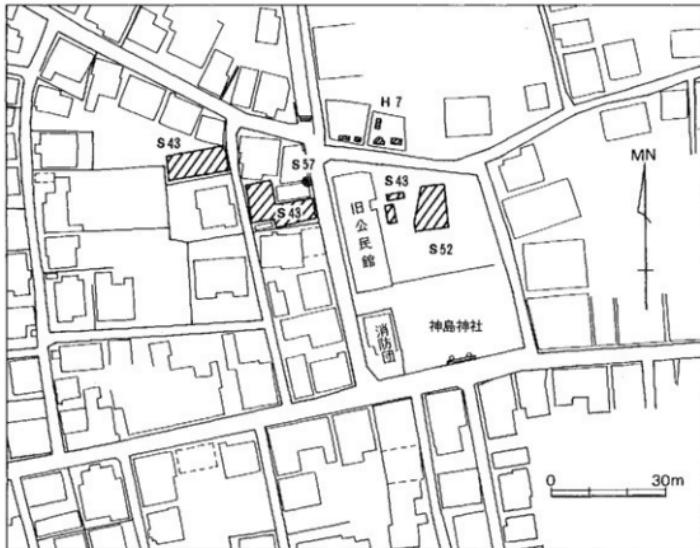
## 2. 調査の経緯（第2・3・4図、表2）

宇久松原遺跡についての知見は古く、明治5年（1872）にまでさかのぼる。平郷2519番地において支石墓1基が掘り起こされ、中から人骨と剣が出土したとある。豈1枚ほどもある上石は今でも現地で祭られており、昭和37年に来島した五島遺跡調査団の桑山龍進氏の目に止まることになった。宇久島における支石墓発見の報は第28回日本考古学協会総会の場で発表され、関係者の注目を集めることとなる。

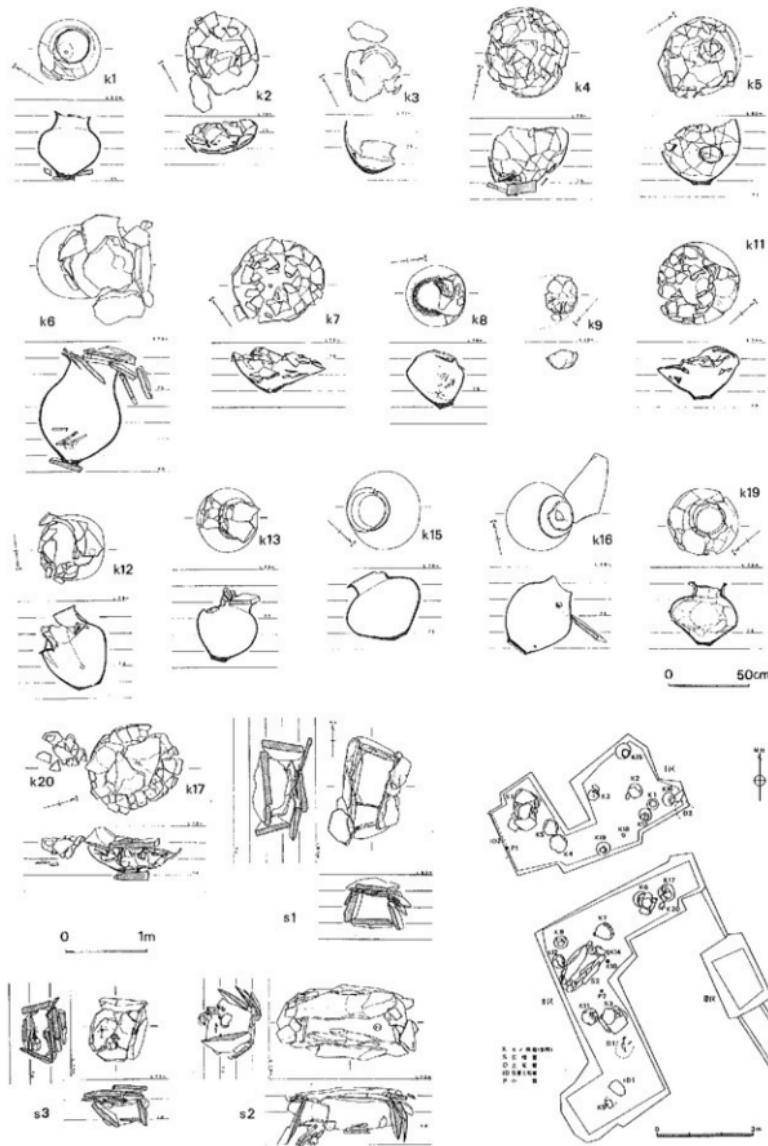
それと前後するように、昭和25年・同26年（1950・51）頃には井戸の掘削中に大きな壺が発見され、中から板付I式の小壺が出土したという。<sup>(註4)</sup>町教育委員会に保管されていた小壺は、大陸系墓制の流入時期等の諸問題を提起するものであったため、後日小田富士雄氏ら大学等の研究機関による発掘調査の契機となった。

初めての本格的な発掘調査は、昭和43年（1968）に長崎大学医学部の内藤芳篤氏・別府大学の小田富士雄氏らによって行われた。<sup>(註5)</sup>調査では支石墓のはか、新たに甕棺墓・箱式石棺墓・土壙墓など12基の埋葬構造が確認され、弥生時代の多様な墓制が入り混じった墳墓遺跡であることが判明した。

昭和52年（1977）には遺跡の中心地にある神島神社社殿改築工事に伴い、県文化課と町教育委員会が主体となって緊急発掘調査が実施された。<sup>(註6)</sup>調査区はわずか39㎡であったが、狭い範囲に甕棺墓20基をはじめとする27基の遺構が集中して埋葬されている状況がうかがえた。



第2図 これまでの調査区全図 (S43, S52, H7)

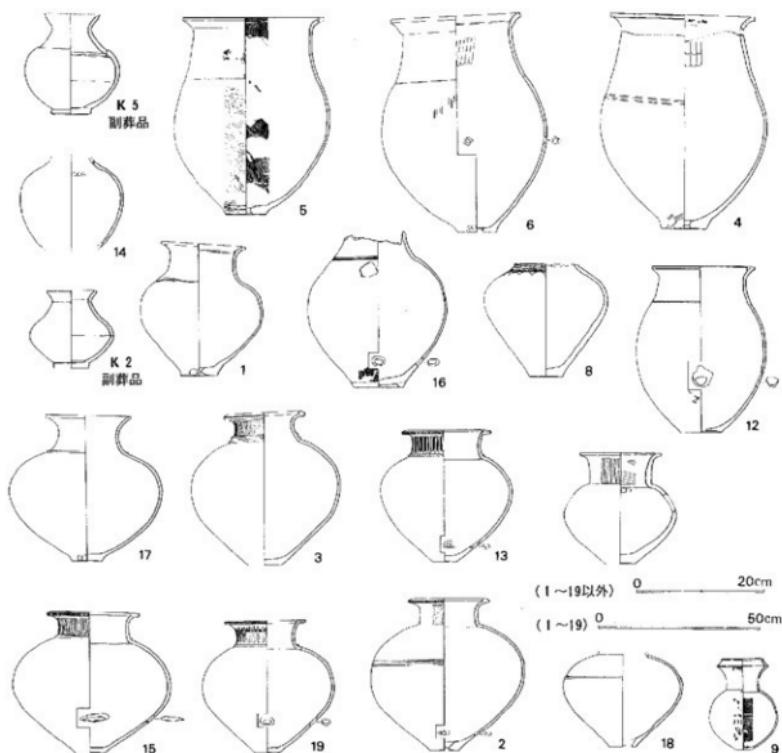


第3図 昭和52年度調査遺構（宮崎1983より抜粋）

続く昭和57年（1982）には、旧公民館西側の下水道工事に際して支石墓2基が発見されている。平成7年（1995）3月にも、神島神社北側で焼失した住宅の再建に先立ち試掘調査が実施され、ここでも2基の支石墓が良好な状態で出土した。<sup>(註7)</sup>

今までに確認されている遺構は、弥生初頭から中期前半にかけてと後期に至るもので、内訳は表2のとおりである。表からは甕棺墓の数だけが突出する傾向がうかがえる。長崎県下で普遍的に見られる弥生時代の墓制は石棺墓・土壇墓で、五島列島でも基本的には変わらない。甕棺墓が多数を占める埋葬遺構のあり方は本県では特異な存在で、北部九州的な様相を示しているともいえる。

一方、遺構の分布については、支石墓が神島神社の北～北西部に多いものの、甕棺墓は土壇墓や石棺墓等と混在して見られる。埋葬方法で墓域を隔てるようなことはないようである。遺構の時期的な変遷でも、また副葬品の有無でも、墓域内の相違は特には見られない。



第4図 昭和52年度出土遺物（宮崎1983より抜粋）

註

- 註 1 宇久町郷土誌編纂委員会  
『宇久町郷土誌』 1967
- 註 2 瀬尾泰平 「長崎県宇久島の考古遺跡」『長崎県の考古学Ⅱ』 長崎県考古学会 1984
- 註 3 桑山龍進 「五島列島の埋葬遺跡」  
『日本考古学協会第28回総会研究発表要旨』 1962
- 註 4 宮崎貴夫 「宇久松原遺跡」『長崎県の原始・古代』 長崎県教育委員会 1996刊行予定
- 註 5 小田富士雄 『五島列島の弥生文化総説篇』長崎大学医学部解剖学第二教室人類学考古学研究報告第2号 長崎大学医学部 1970
- 註 6 正林護・宮崎貴夫 「宇久松原遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅵ』長崎県文化財調査報告書第66集 長崎県教育委員会 1983
- 註 7 註 2・註 6に同じ
- 註 8 安楽勉 『松原遺跡範囲確認調査の結果について』 長崎県教育庁文化課 1995

	S. 43	S. 52	S. 57	II. 7	計
支石墓	2	0	2	2	6
甕棺墓	7	20	0	0	27
石棺墓	2	3	0	0	5
石蓋土壙墓	0	2	0	0	2
土壙墓	1	2	0	0	3
計	12	27	2	2	43

表2 調査遺構一覧表

### 3. 重要遺跡範囲確認調査の概要

#### (1) 調査の目的と方法

長崎県内には約3,500か所の遺跡が『長崎県遺跡地図』に記載され、周知の徹底化が図られている。しかしながら、それぞれの遺跡の内容や範囲など不明な部分が多く、工事中に発見されて取り扱いに苦慮するというような事態も招いている。遺跡に関する基礎資料が不足しているような現状では、今後もこうした問題が相次ぐであろうことは想像に難くない。開発事業に伴う調整・協議のためのみならず、遺跡保護のためにも、文化財行政サイドとして事前に遺跡を的確に把握できるようなデータの蓄積が急務となっている。

長崎県教育委員会は遺跡のなかでも特に155か所を重要遺跡として選定し、平成3年度より範囲確認調査を実施して台帳の整備を行ってきた。平成6年度は宇久町の松原遺跡、有川町の浜郷遺跡、芦辺町と石田町にまたがる原の辻遺跡をその対象とした。

宇久松原遺跡では前述したように、過去3回にわたって発掘調査が実施されているほか、開発行為等に伴って幾度となく遺構・遺物の発見が報告されている。遺跡が町の中心部に立地し、周囲は住宅密集地となっていることも、遺跡発見や調査が頻繁にある要因となっている。

遺跡はこれまでの調査から、神島神社を中心として東西90m・南北40mの範囲に及ぶものと推定されている。しかしながら地域住民の生活と直結した工事は何時おこるかわからず、遺跡規模の明確化

は必修課題となっていた。

## (2) 調査の概要（第5・6・7図）

現地に赴くと、遺跡周辺は宅地化が著しく、住宅が建て込み、道路も小さな裏路地に至るまで舗装されているような現状であった。特に遺跡の中心付近では、発掘調査を実施できるような余地はほとんど見あたらず、調査区の設定場所にはかなりの制約を受けた。地権者の方々のご厚意で、家庭菜園の一部などが発掘可能となったが、試掘調査の大半は遺跡推定域から外れた空閑地などでしか行うことことができなかった。

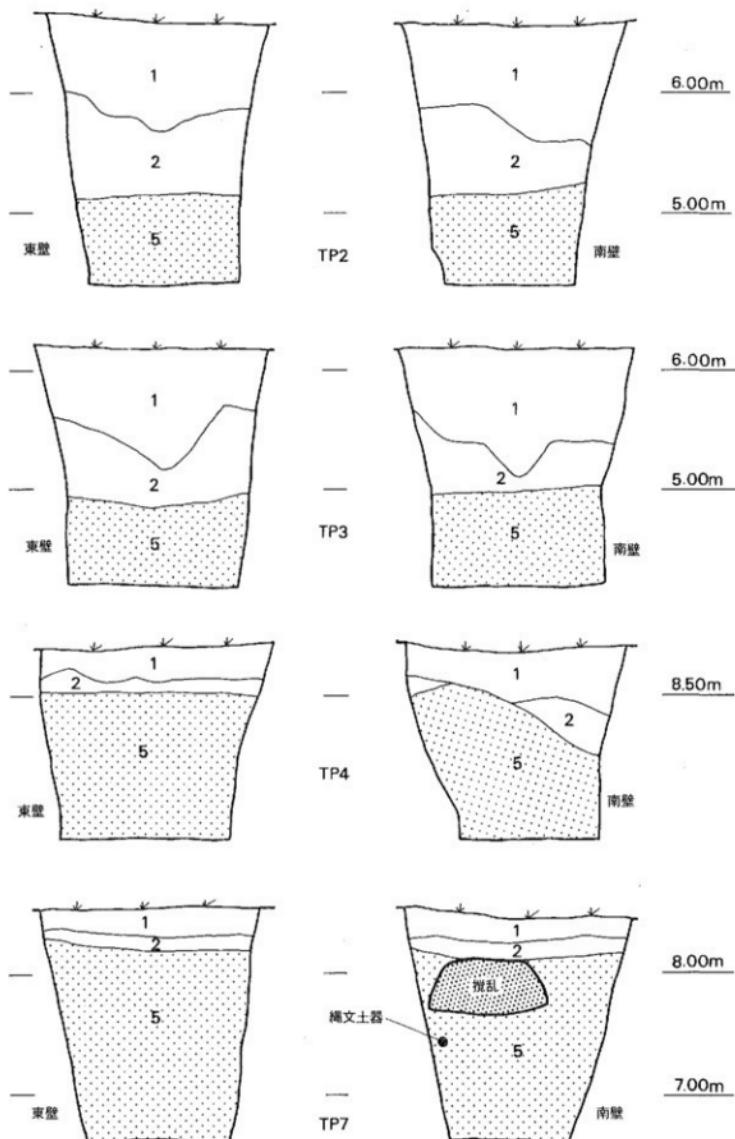
調査は宇久町教育委員会の協力を得て、平成6年7月25日から同年8月3日にかけて実施した。神島神社の周間に2m×2mの試掘場を11か所（TP. 1～11）設定し、合計44m<sup>2</sup>を調査対象とした。

調査区の層位は基本的に5層に大別できた。第1層は暗茶褐色砂質土の表土層である。第2層は灰茶色砂層で、近世陶磁器や貝類などを包含する。昭和52年度調査の1層に相当する。第3層は黄褐色砂層で、無遺物層である。第4層は灰黒色砂層で、中世の包含層と思われる。アワビなど貝類も混在する。昭和52年度の2層に該当するものである。第5層は第3層に似た、サラサラした細粒の黄色砂層である。埋葬遺構は從来この層内に形成されるとあるが、今回の調査では遺構・遺物ともに確認できなかった。

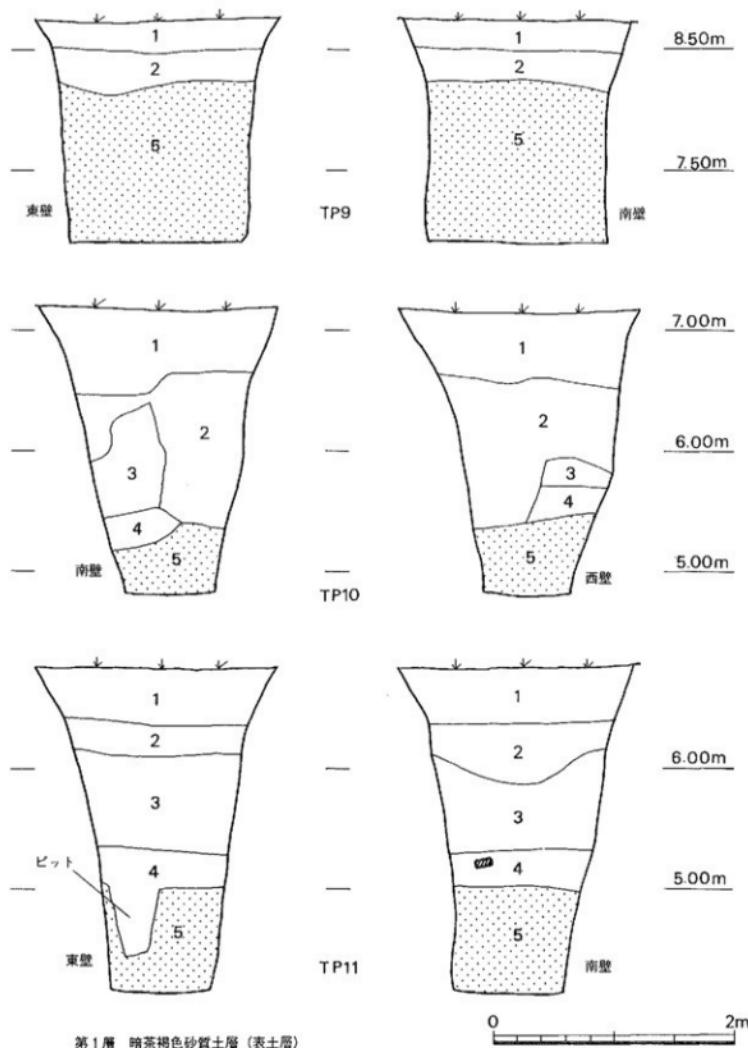
TP. 1～TP. 3では第1層が厚く堆積し、近現代の搅乱が著しい。搅乱の一部は第2層にまで及んでいる。第2層以下はすぐに第5層となる。TP. 4は地表下40cmほどで第5層となるが、遺構・遺物は出土していない。TP. 5では砂丘より一段高い所にあるためか砂層は全く見られず、客土が大半を占めていた。TP. 6～TP. 9は基本的にTP. 4と同じである。ただTP. 7で第5層より縄文晩期の土器片が1点だけ出土している。TP. 10とTP. 11では中世の包含層である第4層が見られた。特にTP. 11では土層断面にピットの掘込み跡がうかがえ、付近に遺構が存在することを確認できた。



第5図 今回の試掘坑配置図 (S : 1/2,000)



第6図 土層図(1) (S : 1/40)



第1層 暗茶褐色砂質土層（表土層）  
 第2層 灰茶色砂層  
 第3層 黄褐色砂層  
 第4層 灰黑色砂層（中世の遺物包含層）  
 第5層 黄色砂層

第7図 土層図(2) (S : 1/40)

### (3) 出土遺物 (第8・9・10図・図版3・4・5)

本遺跡ではこれまで弥生時代初頭から中期前半と後期の甕棺や副葬小壺ほか、古墳時代末から鎌倉時代前葉の須恵器や土師質土器、龍泉窯系青磁、波佐見焼などの近世陶磁器が出土している。今回は量的には少ないが、縄文土器と中近世の土器・陶磁器類が出土し、弥生から古代の遺物は全く見られなかった。試掘調査で得られた遺物総点数は100点にも満たなかった。

縄文土器 (1) 晩期の口縁部片である。器面の内外面には横方向の条痕で調整を加え、外側から径12mmほどの穿孔を行う。口縁端部には刻目が施される。胎土がバサバサで粗く、焼成も甘い粗製品である。T P. 7 の第5層出土。

瓦質土鍋 (2~8) いわゆる周防型足鍋とよばれるものである。<sup>(注1)</sup> 2のように口縁が肥厚し端部を上方に跳ね上げるタイプと、3・4のように口縁をく字状や袋状に内側へ大きく屈曲させるタイプとがある。内面の口縁部と体部の境も、2では不明瞭だが、3・4では明瞭に仕上がっている。内面には細かいハケ調整がなされる。5~7は体部片である。外面下半に粗い格子目タタキが施され、内面は横ハケ調整が見られる。8は土鍋の足で、体部との接合部分にはススが付着する。3~8などは焼成良好で、比較的硬く焼き上がる。

いざれも15世紀から16世紀にかけての時期と考えられている。長崎県内では大村市坂口館跡や吉井町直谷城跡などに出土例がある。<sup>(注2)</sup> 全てT P. 11の第4層出土。

瓦質すり鉢 (9) すり鉢の口縁部片である。外面体部は中位以下は縦ハケ、内面は口縁部まで横ハケを施す。摺目はかろうじて見える程度である。端部はナデで端正につくられる。T P. 3 の第2層出土。

瓦質陶器 (10) 器種は不明だが胴部片である。外面はヘラナデ、内面は横方向のハケ目が見られる。焼成は良好である。T P. 3 の第2層出土。

瓦質こね鉢 (11) 底部片である。底の器壁はかなり薄い。内面は磨滅しており、使用された形跡がうかがえる。外面は風化が著しいが、縦ハケを施している。T P. 3 の第2層出土。

茶釜 (12) 茶釜の肩部に貼り付く環の部分である。中央には径6mm程の穿孔が水平方向に施される。胎土は土師質で、橙褐色を呈する。16・17世紀のものか。T P. 11の第3層出土。

火舎 (13・14) いざれも瓦質火舎の体上部破片である。13は隆帶の上下に円文を型押ししている。内面には横ハケを施す。口縁部付近は器表面が剥落している。胎土に砂粒が目立ち、作りも粗雑な感がある。T P. 3 の第2層出土。14は玉縁状に肥厚した口縁下に6条+αの縦沈線が施される。内面は横ハケで、胎土に砂粒もなく、作りは13より丁寧である。T P. 3 の第1層出土。

唐津系陶器 (15~21・24~27) 15は唐津系の甕か。口縁部は逆L字形に屈曲し、その下位に浅い沈線を2条ほど巡らす。胴部外面は格子目タタキ、内面は青海波タタキが施される。口縁部を除き、胴部内外面ともに鉄泥釉がかかる。T P. 3 の第2層出土。16は壺である。口縁はほぼ直立し、端部がやや膨らむ。釉は外面にのみかかり、内面は露胎となる。成形はタタキかと思われる。T P. 2 の第2層出土。17~21は破片のため器種は不明である。

17は小形の壺胴部片か。外面に藁灰釉がかかり、胴部下位から底部にかけては露胎となる。内面は青海波のタタキか。T P. 3 の第2層出土。18は甕の胴部片とした。所々に焼きぶくれが生じているが、器壁は全体に薄く、焼成も堅緻である。外面には平行タタキが見られる。釉は鉄泥釉が内外面ともに均等にかかる。T P. 11の第4層出土。19も甕の胴部片か。器壁は18よりもさらに薄く、焼成も堅緻に仕上がる。調整は不明だが、外面に2条の条痕が見え、内面は青海波タタキかと思われる。釉は外面に灰釉が、内面には透明釉がかかる。T P. 3 の第1層出土。20も甕の胴部片であろうか。器壁が厚く、大形甕の一部であろう。外面に格子目タタキ、内面に青海波タタキが見られる。釉は内外面ともに鉄泥釉が施される。T P. 3 の第1層出土。21は甕の底部片と思われる。全体に堅く焼き上がり、底端部近くには貝目の跡がつく。内外面に自然釉がかかる。T P. 3 の第1層出土。

24は天目碗である。口縁部のくびれは弱く、器高が低い。外面体部下半～高台部を除き、鉄釉が厚くかかる。全体にボッタリとした感がある。T P. 3 の第2層出土。25は皿の口縁部片である。器高が低く、内湾気味にのびた口縁は端部でやや肥厚する。内端部には胎土日の跡が残る。透明釉が全面にかかる。T P. 11の第4層出土。26は京焼風陶器の碗である。体部に錆絵で山水文を描く。17世紀後半の資料である。T P. 3 の第1層出土。27は碗の底部である。見込みと高台内は兜巾状に削られ、疊付には砂目跡が4か所つく。胎土はきめ細かな淡黄白色で、透明釉が全面に施されている。佐賀県嬉野町の内野山窯などで見られるという。T P. 1 の第2層出土。

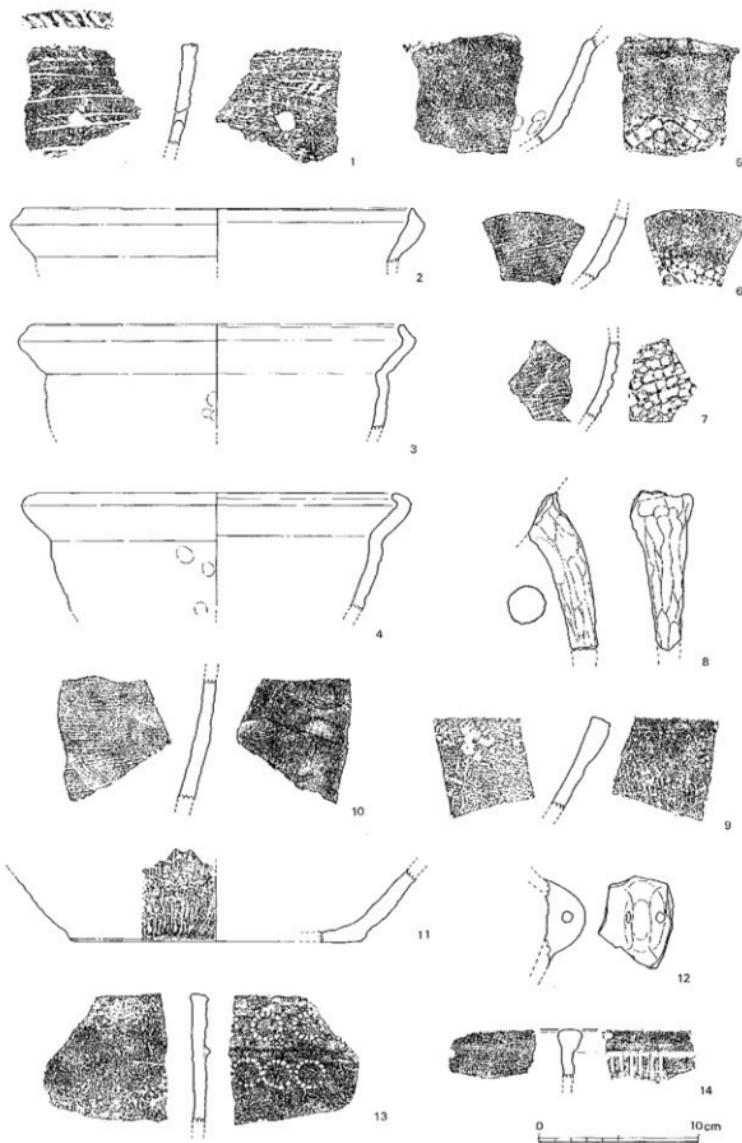
插鉢（22・23） 22は長めの玉縁口縁をもつ備前系の插鉢である。内面に8条単位の筋目が入り、色調は明赤褐色を呈する。胎土には大粒の白色砂が含まれ、堅く焼き締められている。荻野繁春氏の（註6） XI期（16世紀後葉～17世紀前葉）に相当する資料であろう。T P. 11の第4層出土。23は全体に磨耗が著しいが、插鉢の胴部片である。内面に12条単位の筋目が入る。T P. 2 の第2層出土。

中国製青磁（28・29） 28は細蓮弁文の碗である。蓮弁が簡略化したもので、亀井明徳氏のB2類に相当する。緑色のガラス質の釉が割と厚くかかり、貰入も見られる。15世紀後半～16世紀前半の資料である。T P. 11の第4層出土。29は龍泉窯系碗の腰部か。内面に3本の縱沈線が彫り込まれる。T P. 2 の第2層出土。

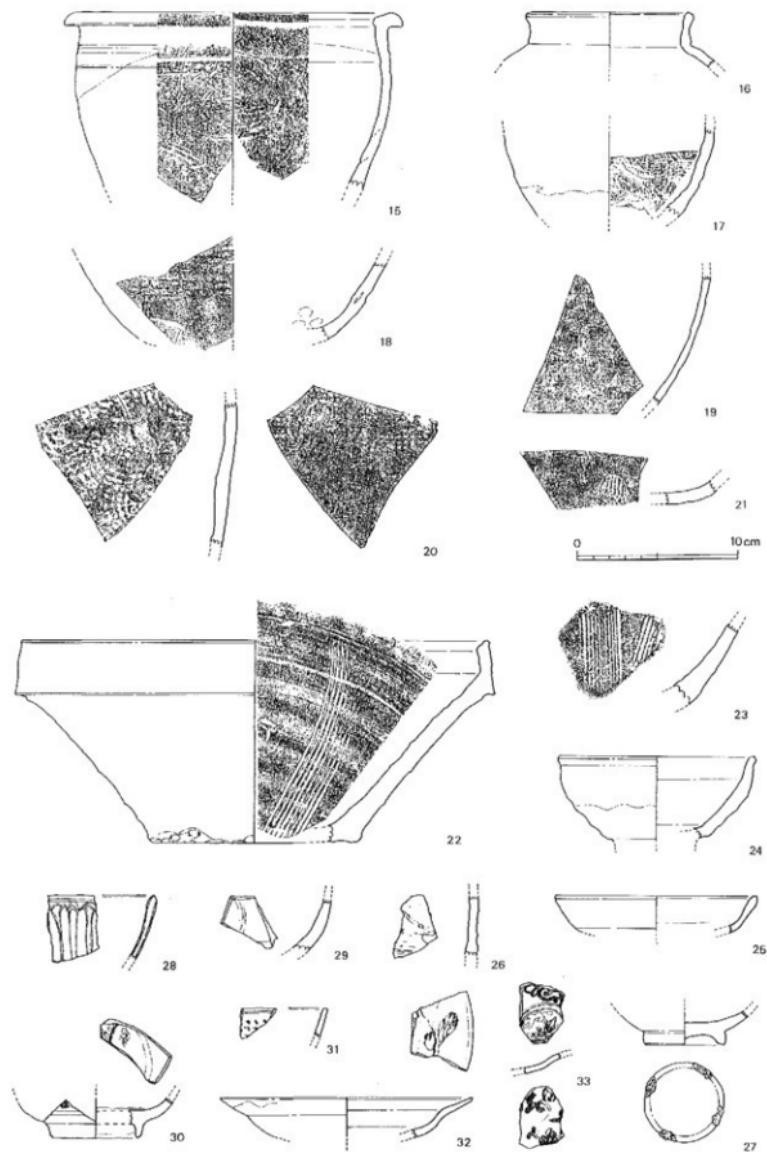
中国製青花（30・31） 30は碗の体部～底部にかけての破片である。高台は高く、疊付は丁寧に釉を削られ、細く尖る。見込みに梅花文、体部外面に唐草文と腰部に圈線を巡らす。小野正敏氏の碗B群で、15世紀代のものである。T P. 11の第4層出土。31は碗の口縁部片か。外面に梵字文、内面は（註8） 圈線を巡らす。小野氏の碗C群で、16世紀代であろう。T P. 2 の第1層出土。

国産磁器（32・33） 32は折縁皿の口縁部である。口縁の周囲には唐草文を描き、見込みには二重圈線が巡る。T P. 2 の第1層出土。33は口縁が外反する皿である。外面に唐草文、内面は花唐草文を濃みで塗りつぶす。T P. 2 の第2層出土。

砥石（34・35） いずれも表面が剥落しているが、石の目は細かく、仕上げ用の砥石かと思われる。34は横幅6.5cm・厚さ1.5cmで、T P. 10の第1層出土。35は横幅5.4cm・厚さ2.2cmで、T P. 2 の第1層出土。



第8図 出土遺物(1) (S : 1 / 3)

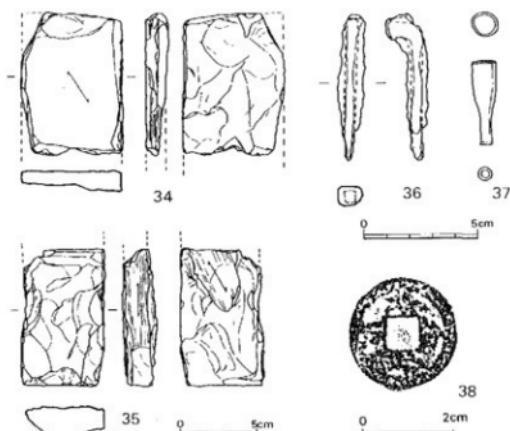


第9図 出土遺物(2) (S : 1 / 3)

鉄釘 (36) 厚さ5mm四方の角釘である。頭部が直角に折れ曲がり、全長は6cm(2寸)を測る。T.P.11の第2層出土。

煙管 (37) 銅製の吸い口である。全長3.6cmで、吸い口は径0.4cmを測る。T.P.3の第1層出土。

錢貨 (38) 中国北宋代の元豐通宝(行書体)である。T.P.10の第1層出土。



第10図 出土遺物(3) (34, 35は1/3, 36, 37は1/2, 38は1/1)

註

註1 肥前では玄海灘から唐津湾沿岸地域にかけての海沿いの遺跡に出土する傾向があると、佐賀県教育委員会徳永貞紹氏からご教示いただいた。

(徳永貞紹 「肥前における中世後期の在地土器」『中近世土器の基礎研究VI』 日本中世土器研究会 1990)

註2 宮崎貴夫 「坂口館」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅴ』長崎県文化財調査報告書第99集 長崎県教育委員会 1991

註3 宮崎貴夫・村川逸朗『直谷城跡』吉井町文化財調査報告書第1集 長崎県吉井町教育委員会 1991

註4 註1と同じ。

註5 平成8年2月の第6回九州近世陶磁学会会場にて、佐賀県教育委員会東中川忠美氏・家田淳一氏に実見していただき、内野山窯と考えてよいのではとのご指摘をうけた。

(家田淳一 「内野山北窯跡」『第5回 九州近世陶磁研究会資料』 佐賀県立九州陶磁文化館 1995 発表資料)

註6 萩野繁春 「『財産目録』に顔を出さない焼物」『国立歴史民俗博物館研究報告第25集』 国立歴史民俗博物館 1990

註7 亀井明徳 「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古希記念 古文化論攷』 1980

註8 小野正敏 「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No.2』 日本貿易陶磁研究会 1982

註9 註8と同じ。

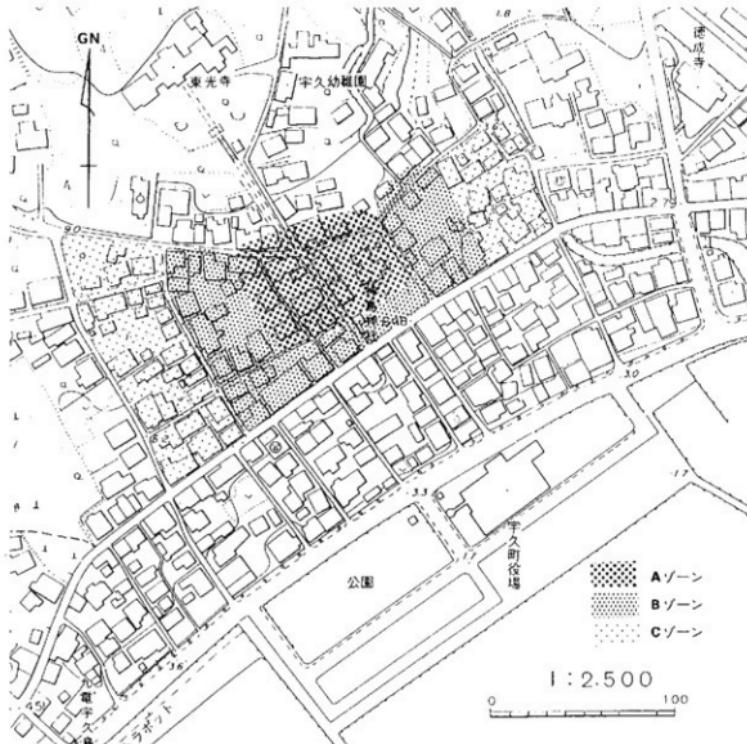
註10 九州帝京短期大学の櫻木晋一先生よりご教示いただいた。

## 4. まとめ

### (1) 遺跡の時代別・時期別変遷について

遺跡中心地に隣接する T.P. 1～T.P. 3 は、遺物包含層こそ大きく搅乱を受けているが、第 1・2 層から貝類に混じって中近世の遺物がまとまって出土している。一部中断はあるものの、中世・近世と継続して集落が営まれていたことがうかがえる。搅乱は深部まで及んでいないようで、今後弥生時代の遺構が見つかる可能性も残されている。

神島神社の北側に設けた T.P. 4 と T.P. 6～T.P. 9 では、地表下の比較的浅いところで黄色砂層があらわれ、若干標高が高くなる。遺物は T.P. 7 で縄文晚期の土器片が、T.P. 4 と T.P. 9 で近世陶磁器が数点出土した外は全く見られなかった。T.P. 6～T.P. 8 は昭和43年度調査区や平成7年3月の試掘地点にも近く、付近に埋葬遺構の存在を否定できないが、今回の調査結果からは判断し得なかった。



第11図 宇久松原遺跡ゾーニング図 (S : 1/2,500)

確実な中世の包含層はTP.10とTP.11で見られる。本遺跡との直接的なつながりは考えにくく、西方約300mにある中世の舜谷寺貝塚との関連を思わせる。ここは豪族の江氏の館跡といわれ、滑石製石鍋片や龍泉窯系の青磁が出土している<sup>(註1)</sup>。神社背後の東光寺をはじめ周辺の丘陵部には五輪塔・宝篋印塔も数多く、当時この一帯が有力者の勢力下にあったことが想定される。

調査の結果、TP.1～TP.4とTP.9～TP.11から近世の陶磁器類が、TP.7からは繩文晚期の土器1点が出土した。TP.11からは中世から近世にかけての遺物10数点と、遺構の存在を確認できた。しかしながら、弥生時代の遺構・遺物については何ら検出することはできなかった。遺跡範囲を特定するという当初の目的を達し得なかつたことになる。

神島神社周辺が住宅密集地帯であるため調査区の設定が困難で、面積も不十分であったことは否めない。ただし、弥生時代の埋葬遺構の拡がりを把握するには至らなかったものの、別の見方をすれば、遺跡はそれほど広い範囲に及ばないことが明確になったといえる。

(註2)  
結果的に遺跡は從来の見解どおり、神島神社とその周辺に限定されるものと思われる。唯一、繩文晚期の土器片の出土により、弥生前期初頭と考えられていた遺跡の形成時期が若干さかのぼることとなつたのが新しい成果といえよう。

## (2) 遺跡の範囲・取り扱いについて

範囲確認調査の結果に基づき、本遺跡の範囲と重要度を段階別に示したものが第11図である。重要性の高い場所から順にA・B・Cゾーンとした。

Aゾーンはこれまでの調査で遺構・遺物が確認されている神島神社を中心とした区域である。古くから集落の中心地であり、墓域イコール聖域として認識されていたものと思われる。各種工事に際しては事前に確認調査を行う必要があり、特に神社境内は現状保存が望まれる。

Bゾーンは本遺跡の墓域が拡がった場合、新たな遺構が発見される可能性があると思われる区域である。調査区での遺物包含状況はあまり良好ではなかったが、中近世の層が残っていることも考えられる。開発行為に際しては試掘調査を行う必要がある。

Cゾーンは古砂丘の周縁部に位置し、本遺跡に直接係わるものではないが、中世の遺物包含層と遺構の拡がりが推測される区域である。西側部分では舜谷寺貝塚の遺跡範囲に含まれることも考慮しなくてはならない。工事等に際しては西側一帯では確認調査が、その他の部分では工事立会もしくは慎重工事を行う必要がある。

## 註

註1 濱尾泰平 「長崎県宇久島の考古遺跡」『長崎県の考古学Ⅱ』長崎県考古学会 1984

## 参考文献

正林護・宮崎貴夫編 「宇久松原遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅵ』長崎県文化財調査報告書第66集 長崎県教育委員会 1983

図 版



T P. 4 南壁土層

図版 2



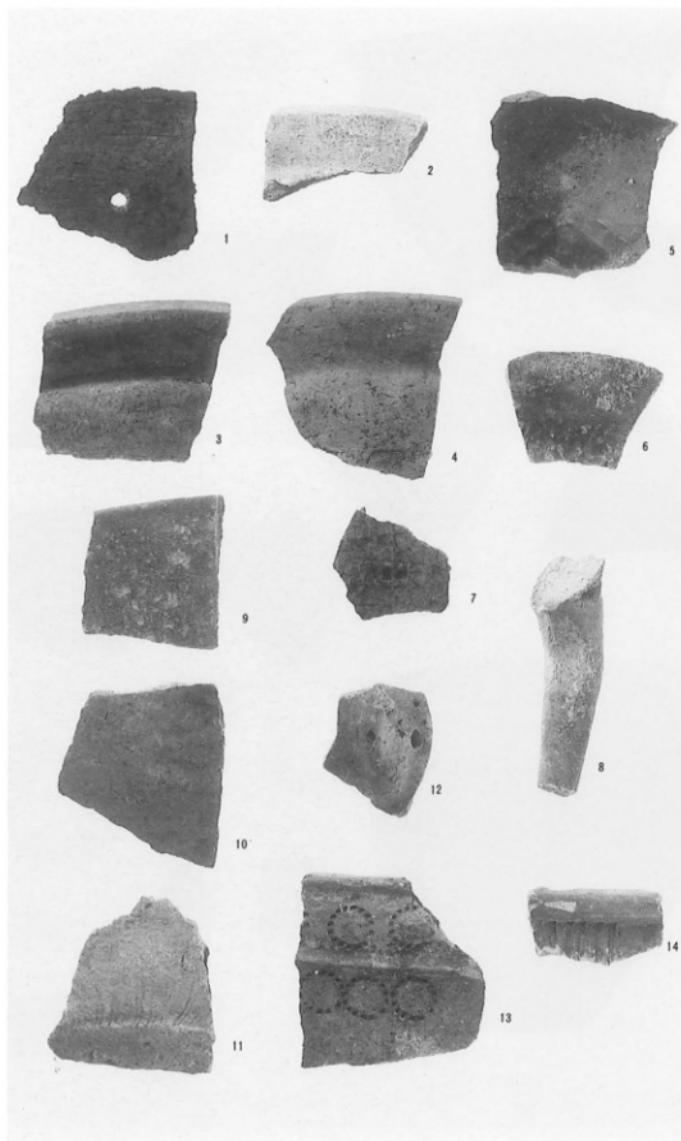
T.P. 7 東壁土層



T.P. 9 東壁土層

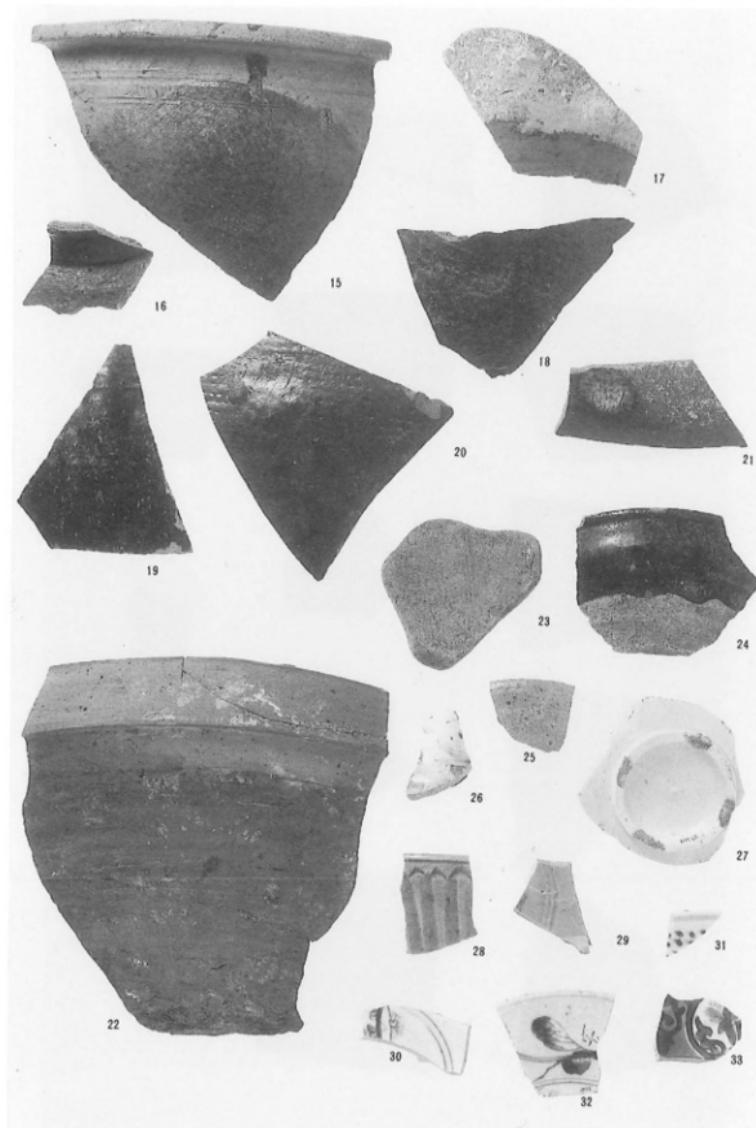


T.P. 11 東壁土層

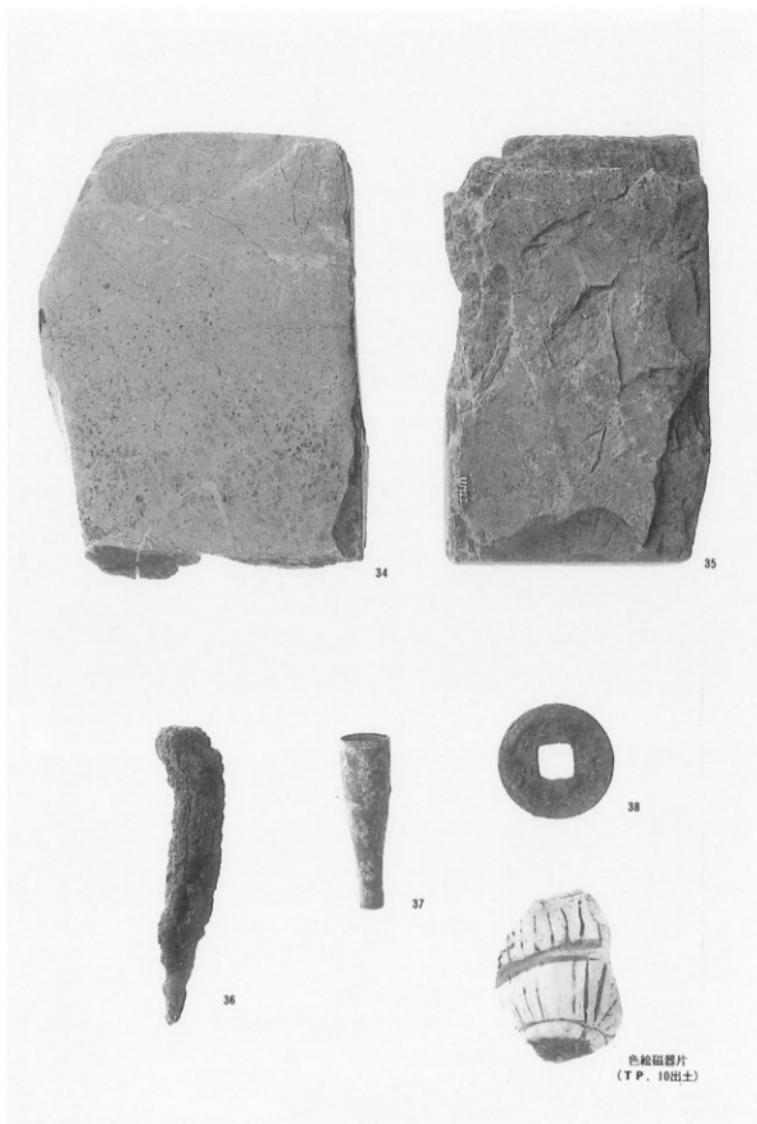


出土遺物(1) ( $S = 1/2$ )

圖版4



出土遺物(2) (S = 1 / 2)



色绘磁器片  
(TP. 10出土)

出土遺物(3) (S = 1 / 1)

### III 浜郷遺跡



## 例　　言

1. 本報告書は南松浦郡有川町有川郷字浜村に所在する浜郷遺跡(浜遺跡)と浜第2遺跡の重要遺跡範囲確認調査の報告書である。
2. 調査は、長崎県教育庁文化課が事業主体となり、有川町教育委員会の協力を得て、平成6年7月25日から8月3日にかけて実施した。
3. 調査担当  
長崎県教育庁文化課  
文化財保護主事 古門 雅高  
〃 寺田 正剛(現 長崎市立小島中学校教諭)
4. 調査協力  
有川町教育委員会  
教育長 原 雄覺  
事務局長 宗 吉範  
事務局長補佐 山下利平次  
生涯学習係長 原 光康  
(土地所有者) 上田 岩助, 佐々木ヨシ子, 中島 碩義,  
前田 裕正
5. 本報告の執筆・編集は古門による。

## 本文目次

1. 遺跡の立地と環境	99
(1) 地理的環境	99
(2) 歴史的環境	100
2. 調査の経緯	102
(1) 経緯	102
3. 重要遺跡範囲確認調査の概要	103
(1) 調査の目的と方法	103
(2) 調査の概要	103
(3) 出土遺物	105
4. まとめ	109
(1) 遺跡の時代別・時期別変遷について	109

## 挿 図 目 次

第1図 浜郷遺跡と周辺の遺跡・地形 (S = 1 / 75,000) .....	101
第2図 浜郷遺跡試掘坑配置図 (S = 1 / 4,000) .....	102
第3図 浜郷遺跡試掘坑土層図 (S = 1 / 40) .....	104
第4図 陶磁器実測図 (S = 1 / 3) .....	107
第5図 陶磁器・金属製品など実測図 (S = 1 / 2 煙管は 1 / 3) .....	108
第6図 浜郷遺跡ゾーニング (S = 1 / 3,000) .....	110

## 表 目 次

第1表 遺物出土試掘坑、土層一覧表 .....	106
-------------------------	-----

## 図 版 目 次

図版 1 遺跡遠景・試掘坑土層 .....	113
図版 2 遺跡近景・陶磁器① .....	114
図版 3 陶磁器② .....	115

# 1. 遺跡の立地と環境

## (1) 地理的環境（第1図）

浜郷遺跡が所在する長崎県南松浦郡有川町は中通島のほぼ中央部に位置する。東は五島灘に面し、西は青方を介して南松浦郡上五島町、北は浦桑を介して南松浦郡新魚日町、南は南松浦郡若松町の荒川・榆木に隣接し、浜串を介して南松浦郡奈良尾町と境を接する。町域は東西約6km、南北約32km、面積約57.01km<sup>2</sup>である。有川町の座標は北緯32°59' 東経129°8'であり、人口は男3,749人、女4,271人、計8,020人、世帯数は2,984世帯である（平成8年1月末日現在）。有川町は、夏季（7月～8月）の平均気温が26.4℃、冬季（1月～2月）は2.5℃で冬は温かく夏は比較的涼しい気候であり、年間の降水量は2,300mmほどである。

有川町の地勢は有川湾と鯛之浦沿岸に海岸低地があるのみで、ほとんどが山地あるいは丘陵地である。有川湾沿岸の低地としては木場川・大川（おおかわ）の谷底低地とその河口のデルタと砂州の合流による海岸低地がある。鯛之浦の湾奥部には奥浦海岸低地が存在する。

山地は南北に走る3本の断層によって三群に分割されている。東から太田断層、鯛之浦断層、桂山断層である。太田断層東側には丹那山（標高364m）を中心とする丹那山地があり、太田断層と鯛之浦断層の間には桜ヶ岳（標高324m）を中心とする桜ヶ岳山地がある。いずれも準平原の遺物とみなされている。鯛之浦断層と桂山断層間の中央には相河川（あいこがわ）が流れ、流域の山地を矢倉岳（標高384m）を中心とする矢倉岳山地と三峰山（標高343m）を中心とする三峰山山地に区分している。矢倉岳は準平原面上のモナドック（残丘）とされ、三峰山山地も準平原上の山地とされる。

低地としては有川湾沿岸の低地のほか、小川原・赤尾に小規模な谷底低地と海岸低地が存在する。北部海岸では、太田に海岸低地と太田川の谷底平野があり、江ノ浜・友住には局的に海岸低地が存在する。

河川は極めて短小である。2級河川に指定されている木場川・大川は有川湾の河口付近で合流する。

また、表層地質は前述の三本の断層によって分割され、太田断層より東は五島層群といわれる陸水成層である砂岩に覆われ、太田断層から鯛之浦断層にかけては鎌田泰彦によって築地層と命名された火山性碎屑岩が広がる。鯛之浦断層と桂山断層間は矢倉岳の中腹より上は安山岩で構成され、相河川上流や桂山付近には流紋岩が広く分布する。有川町蛤浜やその東方の茂串海岸は砂浜が発達し、有川湾沿岸にはデルタとともに疊・砂・泥が堆積する。

土壤は太田断層より東は褐色森林土壤（赤褐系）または乾性褐色森林土壤（赤褐）で、太田断層から鯛之浦断層にかけては黄褐系の褐色森林土壤ならびに乾性褐色森林土壤が広がる。いずれもスキ・ヒノキ造林に活用されている。鯛之浦断層と桂山断層間には先述の赤褐系・黄褐系の褐色森林土壤ならびに乾性褐色森林土壤が混在する。

低地では大川中流域に粗粒褐色低地土、鯛之浦の奥浦低地に粗粒グライ土が分布する。

また、海岸部に五島層群の風化物を母岩とする黄色土壤が散在し、畑地として利用されている。

本遺跡は、中通島のほぼ中央にある有川湾に面した大小の入江のうち、平串鼻東側の入江奥に形成された標高5～6mの砂丘上に位置する。周辺は宅地化が進み空閑地は極めて少ない。遺跡の中心は2箇所であり、入江の南より「浜郷遺跡（浜遺跡）」「浜第2遺跡」として周知されている。

## （2）歴史的環境（第1図）

旧石器時代の遺跡としては赤尾郷字小櫃越（こびつごえ）から過去、細石核・細石刃・ナイフ形石器が表採されている（下川1979）。

縄文時代の遺跡としては、友住郷頭ヶ島（かしらがじま）の白浜遺跡がある。1967（昭和42）年に長崎大学などによって調査が行われている。長崎県文化課（以下、県文化課）の分布調査によても縄文前期（轟式・曾畠式）、中期（並木式・阿高式系）、後期（南福寺式・出水式・鐘崎式・北久根山式）、晩期（黒川式・夜臼式）の土器が表採されている。また、1995（平成7）年には町営あわび養殖場の移設にともない県文化課と有川町教育委員会（以下、町教委）による緊急調査がおこなわれており、報告書の刊行が予定されている。頭ヶ島の浜泊遺跡は、頭ヶ島大橋の工事に伴う緊急調査が県文化課によって1976（昭和51）年に実施され、縄文土器（曾畠式・阿高式系）を出土している。また、未調査であるが小河原（おがわら）郷字立石の立石遺跡からは、縄文前期（轟式・曾畠式）、中期（阿高式系）、後期（北久根山式・鐘崎式）の土器や、石鋸・敲石・石鎌などの遺物が表採されている。その他の散布地としては、赤尾郷の赤尾B遺跡、有川郷浜村の浜海中遺跡、有川港海中遺跡、有川郷字西原の西原A遺跡、同西原B遺跡、有川郷字絶所（ぜっしょ）の絶所遺跡（旧海老川遺跡）、神之浦郷の佐野原岬遺跡などがある。また、鯛之浦阿瀬津（あぜつ）郷には鯛之浦貝塚が存在する。

弥生時代の遺跡としては著名な有川郷浜村の浜郷遺跡（浜遺跡・浜第2遺跡）がある。弥生時代の散布地としては、有川中学校の敷地や周辺の墓地からなる有川郷字上原の上原遺跡や、先述の浜泊遺跡や赤尾A遺跡、赤尾B遺跡、浜海中遺跡、有川港海中遺跡、鯛之浦阿瀬津郷の阿瀬津（あぜつ）遺跡がある。

古墳時代の遺跡は少なく、散布地としては、先述の白浜遺跡や、赤尾A遺跡、赤尾B遺跡がある。

中世の遺跡としては江ノ浜郷字カセゴに、薬師堂より移設したといわれる五輪塔群がある。有川郷後半田（うしろむた）にも堂前様石塔群と呼ばれる五輪塔部品ならびに宝鏡印塔が存在する。太田郷字中筋には太田石塔群があり、永享3（1431）年銘の宝鏡印塔の部品が残存する。散布地としては、赤尾A遺跡がある。

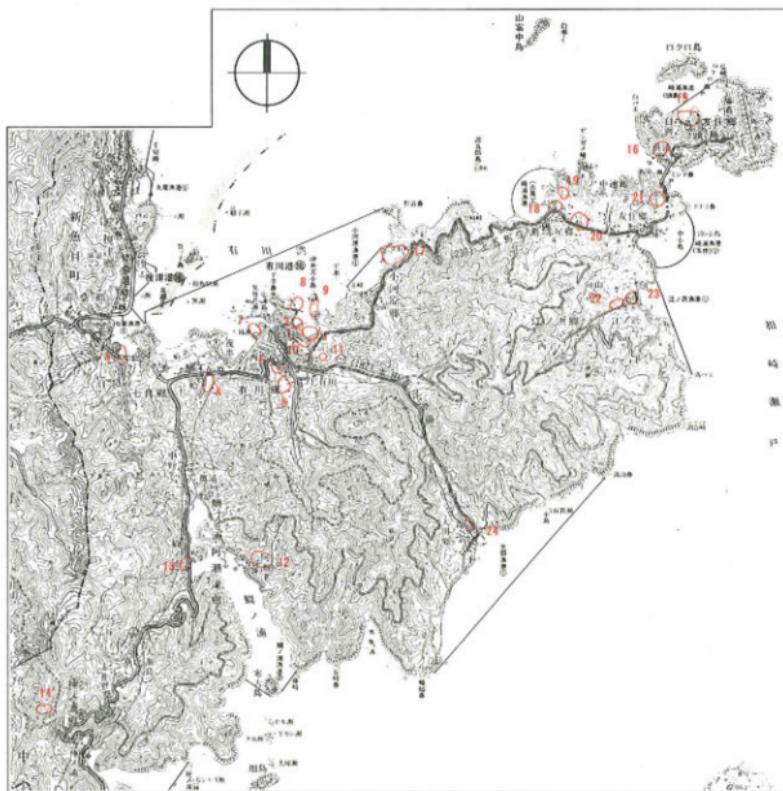
近世においては先述の頭ヶ島白浜遺跡より45体の人骨が出土している。副葬品としては、六道鏡・かんざし・数珠などがあった。また、友住郷字操出しには1647（正保4）年に五島藩によって設置された番所跡がある。

## 【引用・参考文献】

有川町郷土誌編集・編纂委員会1995『有川町郷土誌』有川町

長崎県土地対策室1982「有川・漁生浦・佐尾」『離島振興開発地域土地分類基本調査』長崎県

下川達彌1979「日本最西端の旧石器資料」『考古学ジャーナル』167号



第1図 浜郷遺跡と周辺の遺跡・地形 (S = 1/75,000)

- |              |            |             |              |
|--------------|------------|-------------|--------------|
| 1. 浜郷遺跡（浜遺跡） | 8. 鯨見山遺跡   | 15. 頭ヶ島白浜遺跡 | 22. 江ノ浜石塔群   |
| 2. 浜第2遺跡     | 9. 浜海中遺跡   | 16. 頭ヶ島浜泊遺跡 | 23. 江ノ葉師堂石塔群 |
| 3. 七日遺跡      | 10. 上原遺跡   | 17. 立石遺跡    | 24. 太田石塔群    |
| 4. 絶所遺跡      | 11. 堂前様石塔群 | 18. 赤尾B遺跡   |              |
| 5. 西原B遺跡     | 12. 阿瀬津遺跡  | 19. 赤尾A遺跡   |              |
| 6. 西原A遺跡     | 13. 鮎之浦貝塚  | 20. 赤尾C遺跡   |              |
| 7. 有川港海中遺跡   | 14. 佐野原岬遺跡 | 21. 供栖遠見番所跡 |              |

## 2. 調査の経緯

### (1) 経緯

浜郷遺跡では、1957（昭和32）年に個人住宅庭内の地下貯水槽工事中に貝輪20数点と貝製垂飾品10数点が発見され、1966（昭和41）年には水道管埋設工事の際、弥生時代の箱式石棺や人骨が確認された。翌年、長崎大学・別府大学・九州大学による第1次合同調査がおこなわれ、1969（昭和44）年には第2次調査が行われている。その際、壇棺、甕棺、石棺、土坑墓などの遺構と、人骨が出土しており、出土遺物より弥生時代前期後半から中期前半の時期の墓地と判明した。1973（昭和48）年には防火貯水槽工事中に遺物が出土し、県文化課によって緊急調査が実施された。この遺跡は前述の浜郷遺跡と区別され、浜第2遺跡と称している。いざれも正式な調査報告書が刊行されていないため、その詳細は不明である。今回の調査は平成3年度から実施している、重要遺跡の範囲確認調査の一貫として実施した。



第2図 浜郷遺跡試掘坑配置図 (S = 1/4,000)

### 3. 重要遺跡範囲確認調査の概要

#### (1) 調査の目的と方法

今回の調査は、浜郷遺跡の範囲確認を目的として実施した。本年6月におこなった発掘地点の選定作業で予定した9箇所のうち、地権者の同意が得られた6箇所に試掘坑（TP）を設けた。

しかしながら、遺跡の上には民家が密集し、極めて空閑地が乏しかったため、試掘坑の選定は困難をきわめた。設定した試掘坑も地権者の同意が得やすいという点を優先せざるをえなかったため、範囲確認調査といいながらも試掘坑の選定地は妥当とはいえない。

#### (2) 調査の概要（第2図）

浜第2遺跡の南側から西側にかけてTP. 1～TP. 5、浜郷遺跡の南東部にTP. 6を設定した。調査の結果、TP. 1、2、4より近世遺物が出土したが、全試掘坑を通じても弥生時代の墳墓遺構や遺物は検出できなかった。

TP. 1は浜公民館前の道路を隔てた空閑地に設定した。表土の砂利（第0層）下に近代以降の明赤褐色粘質土層（第1層）があり、その下に江戸後期の暗褐色砂質土層（第2層）があり、さらにその下に江戸中期の褐色砂層（第3層）が堆積する。第2・3層からは陶磁器が出土し、とくに褐色砂層（第3層）からは寛永通宝など12点の銀貨、18世紀前半とみられる煙管が出土した。試掘坑の北西部には性格不明の配石と落ち込みがみられた。さらに黄白色砂層（第4層）を掘り下げたが、2mほど掘り下げたところで湧水を生じた。第4層は無遺物層である。

TP. 2では近代以降の赤褐色土層（第1層）の下に、江戸後期から明治時代の整地層（第2・3層）を確認したが、その下は黄褐色粘質土の地山で砂層はなかった。第2・3層は砾を含んだ締まった土層で、TP. 1の整地層と同質のものである。

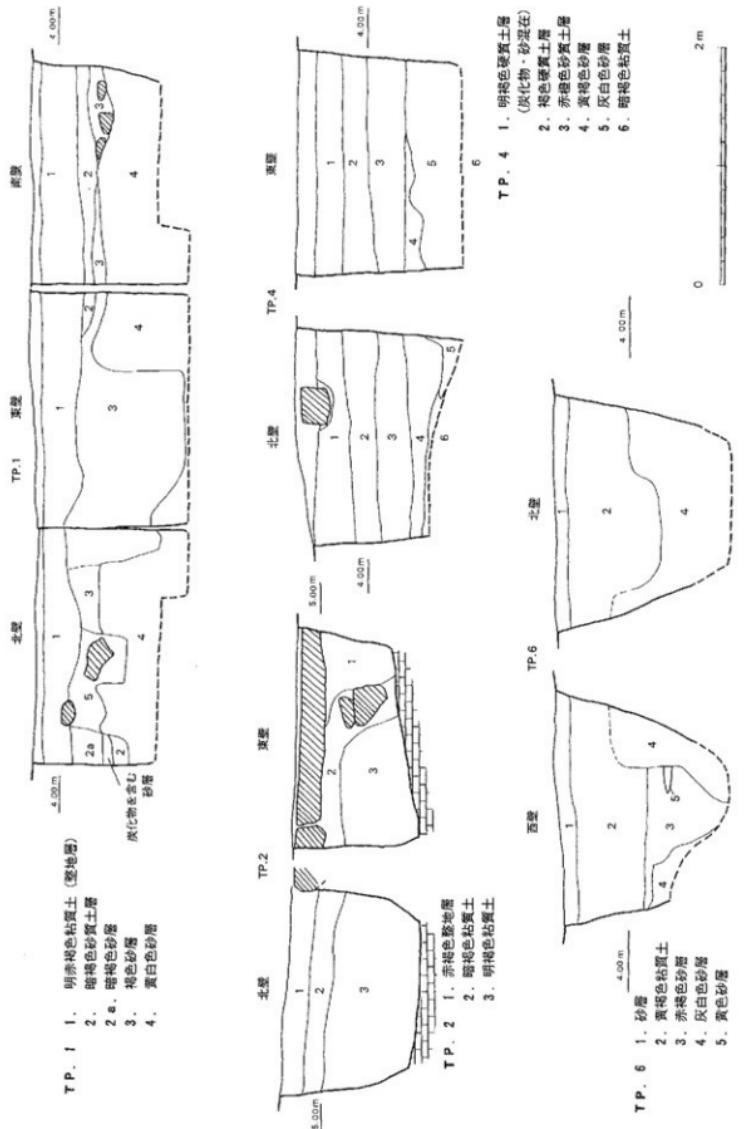
また、第2層中から東西方向に直径40～50cmほどの石を並べた列石遺構が出土した。列石の南側は落ちており、遺構の性格としては排水施設の一部とも考えられた。

TP. 4では近代以降の整地層（第0層）の下に幕末から明治にかけての明褐色硬質土層（第1・2層）が堆積し、さらにその下は17世紀後半から18世紀にかけての赤褐色砂質土層（第3層）が堆積していた。暗褐色粘質土（第6層）は地山であるが東側（海岸寄り）に落ちており、その部分に灰白色砂層（第5層）および黄褐色砂層（第4層）が堆積していた。いずれも無遺物層である。

出土遺物としては試掘坑の南東隅の第1層から胞衣莖3点が出土した。

TP. 6は表土が砂層（第1層）で、その下に黄褐色砂層（第2層）が堆積していた。50cm掘り下げたところで黄褐色砂層（第4層）の落ち込みに堆積する赤褐色粘質土（第3層）がみとめられ、この土層より近世遺物が出土した。地形は南東方向に傾斜しているため、そこに投げ込まれた埋土と考えられた。第3層の出土遺物は18世紀から19世紀の陶磁器である。

TP. 3とTP. 5はいずれも表土の直下が暗褐色粘質土の地山であった。



第3圖 洪鄉遺跡試驗坑土壤圖 ( $S = 1/40$ )

### (3) 出土遺物

#### 1. 磁器（第4・5図、図版2・3）

##### ① 碗（1～7、9、21、23～25、27）

1は口径12.8cmで外側面に松竹梅をほどこす。地貫入がみられ、色調は灰白色である。2は復元口径11.3cmで、外側面には草花文をほどこす。釉調は1と同様である。3は口径10.4cm、高台径4.7cm、器高11.0cmをはかる。二重網目文をもち、表面は灰白色である。4は高台径5cm、文様は草花文で、裏銘をもつ。釉色は青みがかった灰色である。5は復元口径10.4cm、高台径3.2cm、器高10.6cmである。高台の径が小さく、見込みには灰がかかっている。色調は灰白色である。9は高台径4.3cm、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされている。釉調は白色である。21は外側面に絞杉変形文、口縁部内面に四重の圈線を施す。端反り口縁で、器面は青みがかった灰色である。23は内面に水裂文がえがかれ、色調は白色である。24は、くらわんか茶碗である。25は外側面に網目文を施し、内側面に四重の圈線をめぐらす。口縁は端反りで、釉調は灰白色である。

3、4、9は江戸中期、5、6は18世紀後半、1、2、24、27は江戸後期、21・25は19世紀前半、23は幕末、にそれぞれ比定できる。5・6・7は有田系であろうか。

##### ② 盆（11～13・26・28）

11は輪花型の盆である。復元口径15.6cmで、口縁部内面に雷文繫ぎをもつ。色調は灰白色で、江戸末の製品である。12は復元高台径6.4cmで、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。伊万里系の製品で江戸中期のものであろう。釉色は青みがかった灰色である。13は復元高台径8.6cmで江戸後期のくらわんか手の深盆である。色調は12と同様である。26は中心に花文を描き、裏文様は唐草を配する。具須もよく、上物である。表面は青みがかった灰色である。28は縁に割地で文様を描く。高台内に圈文、窯印らしきものがみえ、ハリ支えである。見込みには花文を配する。色調は灰白色である。

26・28は17世紀後半から18世紀に比定できる。

##### ③ 小碗（8・22）

8は復元高台径4.3cmである。外面は鹿の子地に蓮華文をもつ。色調は灰色で幕末の製品である。22は復元口径6.2cmで、口縁部は内傾する。外面に菊散らし文、内面に圈文をもつ。釉調は明青灰色である。18世紀後半ころのものであろう。

##### ④ 蓋物（10）

10は口径11.6cm、外面に松を配する。口縁内側は口唇部から0.6cmの幅で釉剥ぎされている。器壁は青みのある灰色である。

##### ⑤ 蓋（20）

復元口径は6.2cmである。幕末から明治にかけての製品である。色調は灰白色である。

##### ⑥ 紅猪口（19）

19は口径6.0cm、高台径2.8cm、器高2.2cmである。色調は灰白色である。

##### ⑦ その他

伊万里系の青磁片が出土している。

## 2. 陶器（第4・5図、図版3）

### ① 碗（14）

14は復元口径12.3cm、器高4.0cm、復元高台径4.6cmである。色調は浅黄色で唐津焼と磁器の過渡期の製品と考えられる。外面は高台および高台付近が露胎で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされている。17世紀後半であろう。

### ② 壺（15）

15はオリーブ色系の釉がかかる短頸の壺である。復元口径は8.5cmで、琉球産の可能性もある。

### ③ 土瓶（17, 18）

唐津系の三足がつく土瓶である。いずれも暗褐色の釉がかけられている。17は丸形、18は胴折形である。17は口径9.1cm、器高14cmで、18は口径8.2cm、器高10.2cmである。この種の土瓶は戦前まで使用された。本遺跡では出産の際、胞衣（えな）を納める胞衣土瓶として用いられていた。

### ④ 土瓶蓋（16）

17の蓋である。口径6.8cm、器高3.5cmである。

### ⑤ その他（29～31）

29は唐津系の陶器で徳利の口である。復元口径3.0cmで、江戸中期から後期にかけての製品であろう。30は唐津系陶器のこね鉢である。内面に刷毛目文様をもつ。18世紀代の製品である。31は土製品で、鶏の尾の部分であろうか。

## 3. 金属製品（第5図）

### ① 煙管（32～35）

銅製の煙管である。首部が6点、吸口部が3点出土した。18世紀前半頃のものと推定される。

### ② 錢貨

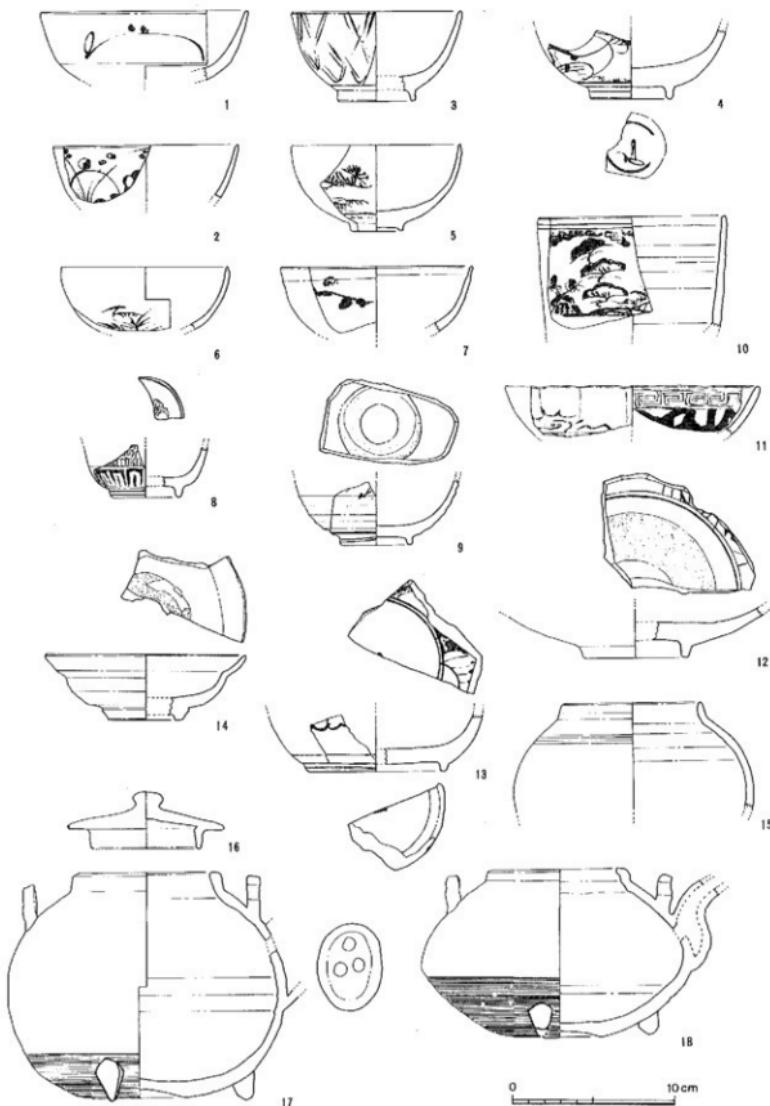
T P. 1 の第3層より寛永通宝が12点出土した。腐食が進み、判読できたものは合わせて5点で、いずれも新寛永である。そのうちの1点は文銭である。

### ③ 他の金属製品

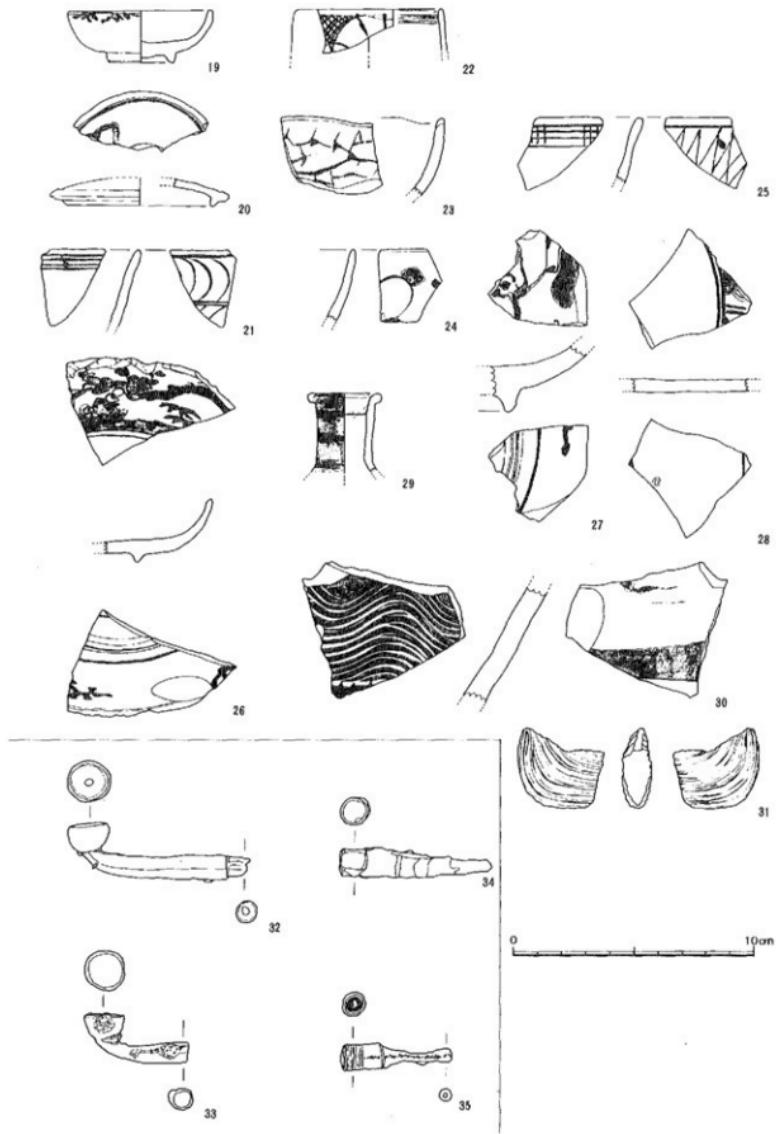
図示しなかったが、青銅製の金具、鏡の一部とみられるものなどがT P. 1 の第3層から出土している。

表1 遺物出土層位一覧表

試掘坑番号	遺物番号	土層
T P. 1	1, 2, 13, 15, 19, 27, 31	第2～3層
	3, 4, 9, 12, 32, 33, 34, 35	第3層
T P. 2	20	第3層
T P. 4	16, 17, 18	第1層
	8, 11, 21, 23, 24, 25	第1～2層
	10, 14, 28, 30	第3層
T P. 6	5, 6, 7, 22, 26, 29	第2～3層



第4図 陶磁器実測図 (S = 1 / 3)



第5図 陶磁器・金属製品など実測図 (S = 1/2・煙管は 1/3)

## [引用・参考文献]

長崎県発見試験場1982年『波佐見古陶磁文様集』肥前波佐見焼振興会

大橋康二1989年『考古学ライブリー55 肥前陶磁』ニューサイエンス社

古泉 弘1987年『考古学ライブリー48 江戸の考古学』ニューサイエンス社

佐賀県立九州陶磁文化館1984年『北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁』

井汲隆夫1992年「第2章 検出遺物の概要と整理方法」『東京都新宿区 内藤町遺跡－放射5号線

整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』第II分冊<遺物編>東京都建設局 新宿区内藤町遺跡調査会

## 4.まとめ

### (1) 遺跡の時代別・時期別変遷について

今回の調査では、弥生時代の遺構・遺物は検出されなかった。しかし、そのことによって浜郷遺跡の弥生時代の包含層が極めて限定された範囲にしか広がらないことが明らかとなった。浜郷遺跡も浜第2遺跡も旧砂丘のそれぞれ最高所に立地するようである。<sup>(注1)</sup>したがって、有川中学校敷地を中心とする上原台地（弥生時代の住居跡が存在）から続く丘陵斜面には広がらない可能性が強い。海岸部への広がりについては今回の調査では、適切な発掘地点が設定できなかつたため明らかにできなかつたが、旧地形を推察するかぎり、弥生時代の埋葬遺構が存在する範囲は遺跡地図等で周知されている範囲に限定されるものと思われる。

また、浜郷遺跡周辺では近世以降、人工的な地形の改変作業が活発におこなわれたようで、それが今回の試掘坑で確認された近世の整地層や埋土であろう。

### (2) 遺跡の範囲・取り扱いについて（第6図）

今回の範囲確認調査の結果をうけて、遺跡範囲における重要性を段階別にゾーンで示した。

#### ① Aゾーン

浜郷遺跡および浜郷第2遺跡の中心部である。弥生時代の前期から中期にかけての墓地が広がると推定される区域である。現段階では最も重要な区域であり、現状のまま保存し、将来史跡指定、環境整備を行うのが望ましいゾーンである。

#### ② Bゾーン

Aゾーンと今回の範囲確認調査における試掘坑との間の区域をBゾーンとした。工事などの開発計画に際しては保存のための設計変更の協議を必要とし、現状保存が望ましいが、やむを得ない場合には緊急調査を実施すべきゾーンである。

#### ③ Cゾーン

工事などの開発行為に際しては、工事立会または慎重工事を必要とするゾーンであるが、浜郷遺跡に関しては、遺跡範囲が限定されているためCゾーンの設定はおこなわなかった。

[註]

註1 浜郷遺跡と浜第2遺跡の中間地に試掘坑を設定したかったが宅地が密集し、果たせなかった。

範囲確認調査の結果や地形を勘案すると、それぞれ独立して営まれた墓域のようである。

[引用・参考文献]

小田富士雄1970年「五島列島の弥生文化」『長崎大学人類学考古学研究報告』第2号（のちに小田富士雄著作集『九州考古学研究 弥生時代編』学生社1983所収）



第6図 浜郷遺跡ゾーニング ( $S = 1/3,000$ )

図 版

浜郷遺跡遠景  
(東から)



T.P. 1 北壁



T.P. 4 北壁

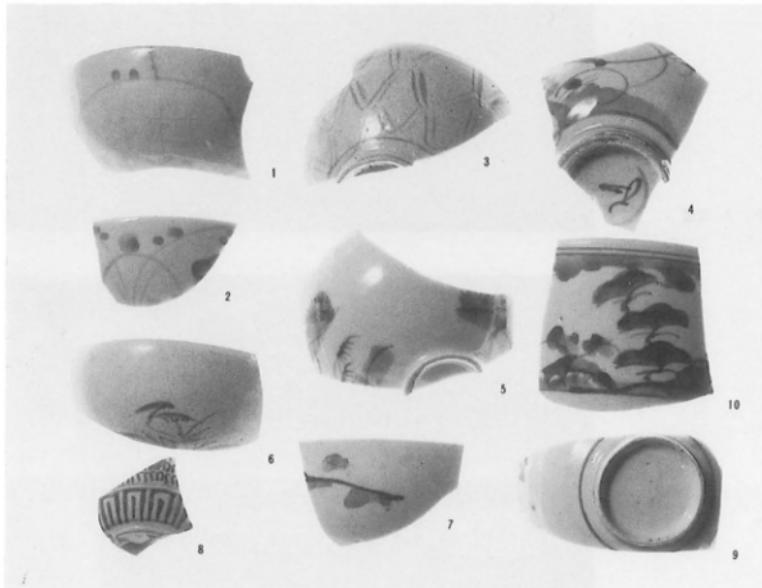




浜郷遺跡 遺跡近景  
(南から)

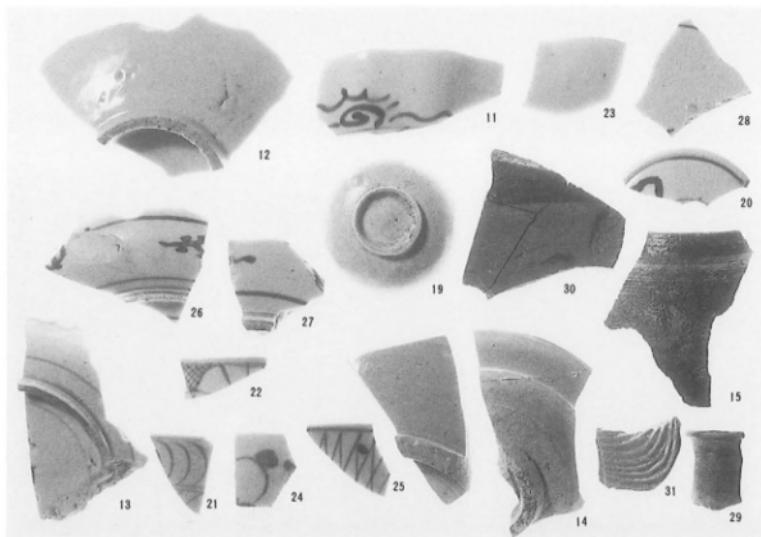
(小田1970・1983掲載の遺跡近景写真と同一方向から撮影)

### 陶磁器①

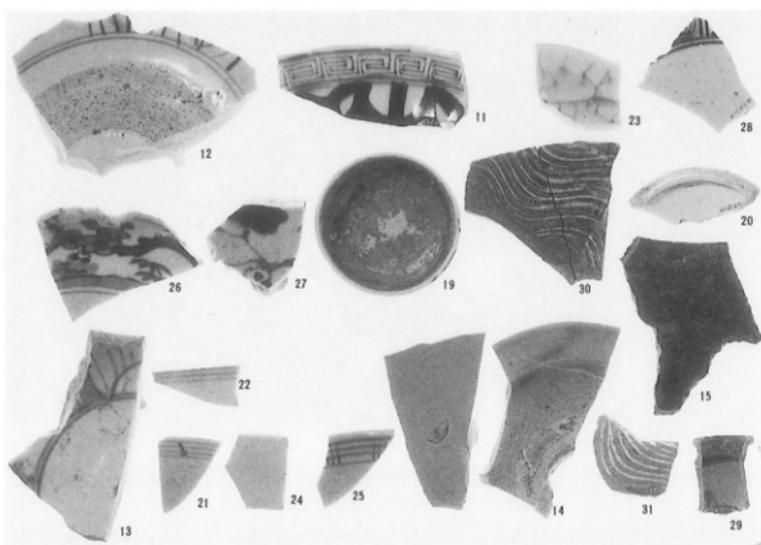


陶磁器② 外面

圖版 3



陶磁器② 内面



# 報告書抄録

ふりがな	けんないじゅうよういせきはんいかくにんちょうさほうこくしょ						
書名	県内重要遺跡範囲確認調査報告書						
副書名							
卷次	4						
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第130集						
編著者名	古門 雅高・本田 秀樹・川口 洋平						
編集機関	長崎県教育委員会						
所在地	〒850 長崎県長崎市江戸町2-13 TEL (0958) 24-1111						
発行年月日	西暦 1996年 3月31日						
ふりがな 調査原因 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>
		市町村	遺跡番号				
原の辻遺跡 範囲確認事業	長崎県壱岐郡 芦辺町	42423	92	33° 45' 26"	129° 45' 11"	19950822 19951007	766m <sup>2</sup>
宇久松原遺跡 範囲確認事業	長崎県北松浦郡 宇久町 平郷 字松原	42384	23	33° 15' 38"	129° 8' 38"	19950725 19950803	44m <sup>2</sup>
浜郷遺跡 範囲確認事業	長崎県南松浦郡 有川町 有川郷 字浜村	42409	11	32° 58' 49"	129° 7' 22"	19950725 19950803	24m <sup>2</sup>
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
原の辻遺跡	遺物包含地	旧石器 弥生 古墳	ピット 溝状遺構 住居跡	弥生土器・鉄鎌 土師器・石器・銅鏡 鉄鋤先・ガラス小玉			
宇久松原遺跡	遺物包含地	縄文 中世 近世		縄文土器・中近世土器・輸入陶磁器・錢貨・煙管			
浜郷遺跡	遺物包含地	近世 近代		近世陶磁器 煙管・錢貨			

長崎県文化財調査報告書 第130集

県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅳ

平成8年3月31日

発 行 長 崎 県 教 育 委 員 会

長崎市江戸町2-13

印 刷 有 限 会 社 正 文 社 印 刷 所

長崎市魚の町6-6